第2回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業

研究報告

「謀略朝鮮戦争」をめぐる歴史記述の問題 ―開戦時の語りから考える―

中西由紀子・山下　静香

松本清張『北の詩人』論

趙　正民

北九州市立

松本清張記念館

「謀略朝鮮戦争」をめぐる歴史記述の問題
―開戦時の語りから考える―

中西由紀子
山下　静香

一　はじめに

松本清張は「日本の黒い霧」（昭和三五年一～一二月「文藝春秋」連載）を「ヌエ的なしろもの」、つまり「文学」でも「報告」でも「評論」でもない、何とも名付けがたいものとする批判へこう答えている。

なまじっかフィクションを入れることによって客観的な事実が混同され、真実が弱められるのである。それよりも、調べた材料をそのままナマに並べ、この資料の上に立って私の考え方を述べたほうが小説などの形式よりもはるかに読者に直接的な印象を与えると思った」。（『全集』三〇二、四二〇頁）

執筆に当たって「史家の方法を踏襲した」（同書、四二一頁）との言及よりも「客観的な事実」、「真実」といった言葉は「歴史的事実」と読みかえて差し支えないだろう。「日本の黒い霧」とはつまり、「歴史的な出来事の記述」へ向けられた一つの試みであったことが分かる。清張は個々の「事件（歴史的出来事）」（全部で一二個ある）を再構成するのに土台となる資料は「なるべく信用に足るもの」を「客観的に」取り上げたと言う。その上で資料と資料の間を埋めるべく「推理」されたものこそが歴史家の「史眼」であると。しかしながら「信用に足る資料」とはどのような性質のものを指し、それを「客観的に」取り上げることはどのようにして可能なのだろうか。例えば「信用に足る」か否かの判断を下した時点で既に「客観的」ではなくならないか。しかし、これは言葉尻を捉えて難癖つけようとしているのではなく、歴史を解釈すること、そして、それを記述することの難しさを思っているのだ。

本報告では、朝鮮戦争という出来事の再構成を基礎づけるいかなる「資料」も、「事実」（というものが掬い取れるとして、それ）を無色透明に記したものとして捉えるつもりはない。これは清張自身「知名な」人物による資料といえども必ずしも「正確な姿」であるとは限らず、自分はそれを「鵜呑みにしたわけではな」い、と言うところである（尤も、「正確な姿」をした資料というものがどういったものなのかについては一考の余地があろうが）。前に述べた清張の言葉を借りるなら、本報告は「客観的」な「事実」と「事実」の間を記述者がいかなる「解釈」で埋めていったのか、という点よりは寧ろ、「事実」の記述である「一等資料」（清張）の取捨選択、本文への引用それ自体が、歴史に対する能動的な解釈行為たること、歴史をいかにプロット化するか方向付ける行為たることの方に注目していくつもりである。

※

「日本の黒い霧」の中でも特に「謀略朝鮮戦争」（昭和三五年一二月「文藝春秋」初出）を取り扱う理由について、まず歴史記述の方法といった点から考えた際、作家自身が打ち出している「信用に足る資料」の「収集」、それによ

る「秩序立て」、「綜合判断」による「歴史」の「組み立て」というスタイルが明確な形であらわれていることが挙げられる。特に朝鮮戦争のような事件になると、地理的にも時間的にも記述者自身が現地に赴いて取材するというわけにはいかないので、文献の取捨選択、配置によって出来事を意味づけ、再構成を試みるというやり方が分かりやすい形で表出しているように思う。

続いて内容の面に関しては、清張自身の「占領中の日本の不思議な事件が、結果的にここに集約されたかたちになっている」（同書、四二二頁）という言葉がある。つまり、朝鮮戦争は戦後日本にとって共産勢力とGHQ（アメリカ）の関係の極点を示している、という指摘である。文字通り、朝鮮戦争はアメリカが朝鮮民主主義人民共和国（以下、「北朝鮮」と略）と中華人民共和国率いる「共産軍」と真っ向対決した「戦争」だったし、日本は間接的であれ（後に直接的だったという話も取り沙汰されるが）アメリカ軍に与するという決定を行ったのだから、やはり「極点」ということになる。

朝鮮戦争とその期間中に結ばれたサンフランシスコ講和条約、及び日米安全保障条約を経ることによって、アメリカの中での「日本」の位置づけが「東洋のスイス」（マッカーサー）から「極東における反共の最前線基地」へと決定的に転換した、という説明は今さら必要ないだろう。否、これは当時のアメリカにおける「日本」の位置づけというよりは、寧ろアメリカという鏡に照らした際の日本による「日本」の位置づけだったと言えるかもしれない。朝鮮戦争開戦から約半月を経た昭和二五年七月一一日付「朝日新聞」は一面トップに「米、対日講和は推進」と題するニューヨーク・タイムス特約レストン記者の記事を載せている。朝鮮戦争勃発により対日講和条約は延期の恐れがあった。と言うのも講和はつまり占領状態の解消、占領軍の撤退を意味する。日本に隣接した地域での有事に接して日本という「基地」からアメリカが軍を撤退させることは無いだろう、との予測である。これを踏まえて同記事は、かえって交渉は促進されるものとの見通しを語っている。但し、講和の重要なポイントは、アメリカ軍隊の日本における恒久的な基地保有を初めとして、基地以外での軍隊の移動権等を含むアメリカの「軍事的権利」の諸要求にあることが伝えられる。占領状態は解消されても、軍は撤退しない、と言うわけだ。また、この前々日、九日にはマッカーサー総司令官より「警察力の増強」を指示する書簡が吉田首相に宛てられたことが報道されるが、レストン記者は「警察力の増強さえ認められゝば、国内共産党を処理できるし、侵略的なソ連もその“在外部隊”をそゝのかして武器をとらしめることはあるまい」との考えを「日本政府の予想」として語っている。マッカーサー（GHQ）と日本政府は一枚岩で「反共」だとアメリカの新聞が日本の読者に伝える構図。このような記事を目にするとき、そうした論調に賛成するか反対するかで意見は分かれるとしても、日本がアメリカにとっての「反共の防波堤」として軍事基地化しつつあることは意識され、それぞれの読者が当時の「日本」をそのような像として捉えるきっかけになる。

そして、再び日本がアメリカとの関係から自らの姿を確認するのが「日本の黒い霧」が一月から一二月にかけて連載された年でもあり、安保闘争が繰り広げられた年でもある昭和三五年なのである。例えば、「日本の黒い霧」の掲載誌「文藝春秋」昭和三五年八月号は、「危機にたつ民主主義―六・一五前後」と題する特集を組み、その中で「世界はこの日本をどう見るか」[三]という座談会の様子を伝えている。出席者は駐米大使・朝海浩一郎、一橋大学教授・中山伊知郎、ジャパンタイムズ社長・福島慎太郎。出席者からも知れるように、「世界」が「アメリカ」とニアイコールな点も興味深いが、どちらにしても「世界」

（二・アメリカ）という鏡に映して安保闘争下にある日本を捉えようとする試みである。中山は当時の日本が「客観的に見ても、事実を並べてみても、特に外国から見て反米的な色彩が相当強い」と語り、朝海は「国論が統一して居ない」ので日本は国際的に信用されないと憂慮する。座談会自体は反米ムードによって失われたアメリカの信頼をどう取り戻すかがこれからの課題であり、その際には日本こそがそのイニシアチブを取るべきだ、という「結語」を提示する。この反米ムードについて、同誌掲載の猪木正道「日本の中立は可能か？―民衆のムード・中立主義」は、まず日本の中立を望ましい姿として想定する。しかし、アメリカに頼った中立は土台無理な話である一方、「現在」のように中立への指向が即「親中ソ反米」と重なる（この傾向を「中立主義的なムード」と呼んでいる）のはかえってマイナスだと言う。猪木は自民党幹部を初めとする「極右」的「向米」と「中立主義的ムード」の反米との対立を朝鮮戦争に模し、日本の中立を可能ならしめるためには「日本国民が、国内の三十八度線を取り払って、民主政治の下に国内平和を実現し、確保することが」肝要だと説く。アメリカでもソ連でもなく、日本国民一人一人が衷心より「中立」たることを望んで一致団結せよ、ということだろうか。猪木の議論は、具体的な施策となると「愛国心」とか「自制心」とか「注意力」などの精神論を持ち出し、実際の政治的思惑などからは遊離してしまっているように思われるが、当時の日本国内の状況を三八度線に比し、内戦をも憂慮している点が注目される。一方、こうした中立論の非現実性を訴え、安保改定の妥当性を述べた文章（小泉信三「安保・暴力・大学教授論の常識―大学教授と青年将校」）も見られる。つまり、昭和三五年とは、安保闘争を機として「向米」か「反米」か、「中立」か「反中立」か、を問う議論が「三八度線」を髣髴とさせるほど沸騰した「場」を有していたわけである。

※

一般に歴史の記述、という過去との対決は、その「過去」の捉え方をめぐって、記述者の属する母集団の主体性を再編成する契機となりうるが、「謀略朝鮮戦争」を考える上でもこの問題は重要なものと考える。清張は「日本の黒い霧」で扱った事件群を昭和三五年一二月の時点で「すでに忘れられかけようとしている」（『全集』三〇、四二三頁）と述べているが、安保条約の改定をめぐって烈しい闘争が繰り広げられた昭和三五年という場所から、最初の安保締結に深い関わりを持つ「朝鮮戦争」という「事件」の意味を捉え返す作業は、不可避的に相方向的な性格を持つものとなるだろう。つまり、記述者の「昭和三五年の日本」に対する認識が、「朝鮮戦争」へのある種の意味づけを促すと同時に、その歴史解釈が「昭和三五年の日本」の自画像を何らかの形で再編成する、という相方向性である。その意味で「謀略朝鮮戦争」末尾の

この次に、極東のどこかに「第二の朝鮮」が発見されたときは、第一番の滅亡の危機が日本を襲うことは間違いないであろう。（同書、四一七頁）

という文章を解釈する際は、清張にとっての「昭和二五年の朝鮮」を読むと同時に清張にとっての「昭和三五年の日本」を読むことになるだろう。

勿論、これは報告者自身にも該当する。報告者が平成一三年という「場」から朝鮮戦争当時の言説を眺める際、その視界は現在の日韓関係、北朝鮮にまつわる様々な情報という外せない眼鏡を経た後のものだし、それは安保闘争当時の言説に対面する際も同様である。同時に「謀略朝鮮戦争」というテクストを

媒介しつつ過去の言説に対面することで、報告者の持つ「日本」像も何らかの改変を迫られるだろう。

以下、「朝鮮戦争」をめぐる様々な言説を対照していくことになるが、そこから「歴史的真実」を見出そうとすること、「謀略朝鮮戦争」の歴史解釈の妥当性を裁こうとすることは、我々の目指すところではない。本報告においてなそうとすることは、「謀略朝鮮戦争」というテクストがどういう資料を引用しつつ歴史を再構成しようとしているのか、その資料は同時代の他の記述群に対してどういう位置を占めているのか、先ずは議論の多い「開戦時」の記述をもとに考えることである。上記の如きを自覚しつつ、具体的に検討していく事項は以下のようなものになる。

まず、開戦時の「朝鮮」に関連する新聞記事との対照から「戦闘経過だけの新聞電報の構成ではとても分からない」(『全集』三〇、四一四頁)こと、「すでに忘れられかけた」当時の状況がどのように「紹介」されているのか明らかにすること。この「紹介」は多分に「収集」された「資料」に基づいているが、前述のように「収集」に伴う「資料」の取捨選択、本文への「引用」自体を清張の積極的な歴史解釈として捉え、その機能を考えること。具体的には引用資料の背景に踏み入り、誰がどういった立場から発言したもので、どのように受け入れられていったか、という考察。その「資料」が選択された時、どこが清張の解釈の傍証となり反証となったか、何が引用され何が引用されなかったか、またそれは何故なのか、について考えること。さらに、そのようにして構築された清張の解釈は「朝鮮戦争」に対する他の様々な解釈や語り方からどのような距離を取っているのかについて。この作業は清張の歴史解釈が再編成しようとする「日本」の自画像について考える際に有効なものと考える。

本報告において「謀略朝鮮戦争」のテクストは『松本清張全集』三〇、に拠るものとする。一部、内容が校異に関わるかと思うがその点は校異表を参照されたい。また、「北鮮」「南鮮」等の呼称は資料からの引用に限って用いている。なお、本文中旧漢字は新漢字に改め、傍点は特に断りがない限り報告者が付している。

二　朝鮮戦争の端緒―どちらが仕掛けたのか？

「謀略朝鮮戦争」の場合

三八度線に全面的な武力衝突が発生、即ち朝鮮戦争が勃発したのは昭和二五年六月二五日のことである。しかし、大韓民国(以下、「韓国」と略)と北朝鮮のどちらが先に仕掛けたのかについては今日でもなお喧しい意見があるようだ。

「謀略朝鮮戦争」ではその問題を「興味ある謎」として提示しながら、まずアメリカ国務省発表による公式文書『朝鮮白書』(朝日新聞社訳、朝日新聞社、昭和二五年九月)を引いている。『朝鮮白書』の原題は“UNITED STATES POLICY IN KOREAN CRISIS”。「朝日新聞」紙上では「朝鮮の危機における米国の政策」と訳された。アメリカでの発行は戦争勃発の翌七月(「朝日新聞」に拠れば、二〇日発表とのこと)。日本では同年七月一九日付「朝日新聞」に「朝鮮白書あす発表」の記事が掲載され、三日後の二二日には「北鮮、計画的に侵略　米「朝鮮白書」を発表」と題する記事が、その大まかな内容を伝えている。

「謀略朝鮮戦争」における引用部の前半、

北朝鮮軍が一九五〇年六月二十五日日曜日の夜明け直前（朝鮮時間）三十八度線を越えて、大韓民国に対し、全力をあげての攻撃を開始した、という最初の公式報告は、朝鮮に駐在する米国大使ジョン・J・ムチオから受取った。同大使の報告を国務省で受取ったのは土曜日の夜、即ち、六月二十四日の東部日光節約時間午後九時二十六分であった[四]

は、『朝鮮白書』中「公式文書」に入る前の解説にあたる「韓国の危機」（同書、九頁）から取られている。「韓国の危機」は開戦から『朝鮮白書』発表までのアメリカを中心とした国連の動きをまとめた箇所である。続く引用後半、

北朝鮮の共産政権が大韓民国に対して開始した奇襲こそは、世界の平和への狂暴な攻撃であった。この奇襲は、人民によって選ばれ、国際連合の協力を得て樹立され、世界における自由な諸国家の大多数によって承認された一独立政府の治政下にある、平和に満ちた人民に対し向けられたものであった

という部分は、『朝鮮白書』冒頭の「前言」（同書、三頁）から取られたものである。「前言」では「北鮮」が「共産政権」であることが強調され、「侵略者」、「平和の破壊」者たることが「国際連合」の名の下に宣言されている。この「重大な事件」に際して『朝鮮白書』が「公示」する「完全な、そして正確な情報」をもとに「米国民と世界」は「米国政府のとつた行動について、精通した判断を下」すことが要求される。アメリカ政府が提示する情報（「完全」で「正確」との保証付き）でアメリカ政府の対応の妥当性を決定することが求められるのだ。

「北鮮共産政権」による「侵入」というアメリカの公式発表に対して「謀略朝鮮戦争」はジョン・ガンサーの回顧を布置する。ガンサーはアメリカ人ジャーナリスト。昭和二五年六月初旬に日本を訪れている。東京滞在中には「V・I・P（非常に重要な人物）という特別の待遇をうけたうえ、総司令部当局からあらゆる便宜が提供されたようだ」（ガンサー／木下秀夫・安保長春訳『マッカーサーの謎』[五]時事通信社、昭和二六年五月、三六六頁）と訳者は述べている。総司令部から便宜が図られた云々に関わらず、ガンサーの基本的な姿勢は「日本におけるマッカーサーの施政」を「素晴らしい治績」（同書、二～三頁）と呼び、その人となりをシーザーに比する（二人の類似点には「慈悲ぶかい専制政治への趣味」などが挙げられる）点、「三十八度線を突破した野獣のごとき北鮮軍の侵入」（同書、一頁）、「日本におけるアメリカの事業の核心は、アジアにたいして、民主主義が共産主義より優れていることを実証することである」（同書、三頁）といった記述に明らかである。

ガンサーの訪日後間もなく朝鮮戦争が勃発。開戦の報が飛び込んだ六月二五日のことをガンサーは自らの体験を回顧する形で『マッカーサーの謎』第九章「朝鮮」に綴っている。「謀略朝鮮戦争」が引用（同書、二五六～二五七頁）し問題化しようとするのは、総司令部のある高官が発した「大ニュースですよ。韓国軍が北朝鮮へ攻撃を開始したんです[六]」（『全集』三〇、三八六頁）という言葉である。ガンサー自身はこの情報を「どちらが侵略を始めたのか、という点については、とんでもなく間違つて」（『マッカーサーの謎』、二五七頁）いたが、とにかく朝鮮戦争の勃発を知らせたものであった。「総司令部でも、最初の数時間というものは、何のことかあまりよくわからなかつたので、おそらく、誰しも、北鮮側の騒々しい、たちの悪い嘘つき放送にだまされてしまつたのだろう」（同書、二五八頁）と受け入れている。この納得の仕様を「謀略朝鮮戦争」の解釈が多くを依拠するI・F・ストーン『秘史朝鮮戦争』[七]（内山

敏訳、新評論社、昭和二七年九月）は「ジョン・ガンサーの本は、東京の総司令部の公式な見解を盛つたもの」（同書上巻、一〇頁）で、「一見おどろくべき間抜けさ加減とおもわれるものを認めようとする東京の司令部の熱心すぎるほどの熱心さを反映している」（同書上巻、二〇頁）。「マッカーサーが北鮮側ラジオにまどわされたというのは、たくましい想像である」（同書上巻、六一頁）と皮肉っている。「謀略朝鮮戦争」にも見える「その高官は昂奮のあまり、（報告者注：どちらが先に攻撃したのか）間違えてしまったというのだ」という発言にはストーンと同様の調子が認められるだろう。

ここでは先ずアメリカ側の公式発表が引かれた上で、執筆者（ガンサー）の意図としては「総司令部の公式な見解を盛ったもの」であったろう文章を対置することで、逆にその相対化が促されるという機能が見て取れる。このアメリカの北朝鮮側による「奇襲」という発表を相対化する解釈、つまり、総司令部、及びワシントンが何も知らなかったというのは如何にもおかしな話だ、という解釈は「謀略朝鮮戦争」においても開戦前後の三八度線をめぐる状況によって根拠づけられていくため、少し当時の報道のされ方を確認しておく。

※

昭和二五年六月二六日朝日新聞第一面の見出しは「北鮮、韓国に宣戦布告」、続いて「京城に危機迫る　38度線総攻撃侵入軍、臨津江突破」とある。「謀略朝鮮戦争」には「当時の日本の各新聞の第一報は、いずれも「北鮮軍、三十八度線を侵入」と大きく書き立てている」（『全集』三〇、三八七頁）とあるが、「朝日新聞」紙上でも北朝鮮側が「侵入軍」として捉えられていることを確認できる。しかし、詳しい記事内容（「京城特電二十五日発＝ロイター特約」記事）に目を転じてみると

二十五日午前四時ごろ南北鮮境界線である三十八度線にそつた春川甕津、開城付近と東部海岸地区などで北鮮軍と韓国軍との間に戦闘が開始された、これに関して韓国政府は同日北鮮との間に全面的内戦が発生したと公表したが、同日朝の北鮮側平壌放送は韓国側にたいして正式に宣戦を布告したと伝えている

とのことで北朝鮮側が前に口火を切ったとは伝えられていない。ここで問題とされているのは、韓国側がこの戦闘を「内戦」と認識するのに対して北朝鮮側は「正式」な「戦争」を宣言した、ということだろう。同日〈解説〉欄では「二十四日の平壌放送によれば、北鮮側は韓国側が甕津半島で砲撃を加えたと非難しており、これから見て北鮮側が報復的攻撃を行つたとも見られたが、しかし北鮮側は平壌放送でついに宣戦布告を発するに至つた」と述べられている。先に韓国側が砲撃を加えた、との情報を追及しないあたりからも、この紙面が問うているのは、南北のどちらがこの戦闘を仕掛けたのかではなく、断続的に続いてきた三八度線をめぐる小戦闘を、宣戦布告によって全面的な「戦争」に拡大させた北朝鮮側の責任のようだ。ただ、この北朝鮮に「責任」を問う姿勢は同紙面上の「安保理事会開く　米、懲罰動議を提出か」という見出し等とも相俟って、北朝鮮を「懲罰」さるべきものとして印象づける可能性が大いにある。これら開戦時の新聞報道からは、北朝鮮側が「侵入」したと報道されたこと、小戦闘、内乱を北朝鮮が「宣戦」によって戦争に拡大した責任は問われたが、どちらが仕掛けたのかについては伝えられなかったことが確認できる。が、「侵入」という言葉に接した時点で、やはり北朝鮮側が先に三八度線を武力によっ

て踏み越えた、とのイメージが多くの日本人読者のうちにはあったのではなかろうか。

※

「謀略朝鮮戦争」において「ガンサーによると」として引かれている開戦時の北朝鮮の兵力に関する情報八は、『マッカーサーの謎』二五八頁、以下の部分に記してある。

六月二十五日の朝、北鮮軍は攻撃を開始するとともに、陸軍四個師団に保安隊三個旅団、合計七万を下らない兵力を投入し、約七十の戦車が四地点で同時に行動を開始しており、一方、海上からする大胆な上陸作戦にも成功している。これは、いったい、どういうことなのか、軍事専門家にきいてみるがいい。これだけの兵力を集結して、これに完全な武装を施し、しかも、ある一定の期日に、この軍隊を広汎な戦線にわたって、いっせいに予定の行動を開始できるように待機させておく、ということになると、これには、どうしても、少くとも一ヶ月の時日を要したに違いない。

ガンサーは、「それにもかかわらず、東京の総司令部はいわずもがな、韓国側も、韓国駐在のアメリカ人たちも、完全に不意をつかれたかたちであった」、と述べている。ここでガンサーが引用されるのも、その記述を総司令部の意向を盛ったものとすれば、前と同様親総司令部の情報によって総司令部の発表を解体しようとする試みである。つまり、「謀略朝鮮戦争」では、当時常に緊張状態にあった三八度線付近で、北朝鮮側がそれくらい軍事活動を活発化させたとして、アメリカの諜報機関が気づかない、などということが果たしてあり得ようか、という疑問を投げかけるのである。

三八度線の緊張状態については、早い時期では例えば、昭和二二年一〇月五日「朝日新聞」に、境界線を警戒中の米兵と北朝鮮側から来た「朝鮮人警官隊」のそれぞれが互いに越境したものとして発砲、付近の住民が怪我を負った旨報道されている。翌年の七月には米兵が射殺され、二四年に入ってからは先ず二月に北朝鮮軍の越境、六月四日にまた「北鮮側の警備隊越境」が報じられる。この衝突がしばらく続いた後、同月一七日には三八度線の視察に向かった国連朝鮮委員会の調査団が射撃を受けた、と伝えられ、更に翌月にはソ連兵の負傷、衝突拡大の兆しが報道されている。日本の報道ではこの程度だが、朝鮮半島内では年中行事化しており、その数は六百回とも千回とも伝えられる。これらの軍事衝突九を受けて、昭和二五年三月四日には「国連朝鮮委員会」が「三日、国連に対して三十八度線でひき起こされる軍事衝突を監視するため、八人のオブザーヴァーからなる監視班を任命するよう要請した」旨報じられている。この国連朝鮮委員会は開戦前の六月一一日、三八度線で南北鮮統一問題について北朝鮮側と会談を設け、その一週間後に当時のアメリカ国務長官ダレスが三八度線を視察している。ダレスが韓国に滞在したのは六月一七、一八、一九日の三日間。二〇日にはマッカーサーとの会談のため、帰国の予定が予め伝えられていた一〇。「謀略朝鮮戦争」においてダレスが三八度線の視察を行ったのが何故「戦争の勃発する二日前」とされているのかは不明だが、ことによると国連朝鮮委員会の現地視察と混同しているのかもしれない。国連の現地視察官は九日から視察を行っていたが、委員会に報告書をまとめたのは二四日、開戦前日のことである。よって二三日まで視察が継続されていたと考えることが可能だ。この報告書は開戦後の六月二九日に公表され、後に『朝鮮白書』中「一四号文書」と名付けられる。

いづれにしても、アメリカの国務長官と国連の調査団とがそれぞれ開戦直前に三八度線の視察を行っていたわけである。北朝鮮が境界線付近で兵力を増強していたとしてそれに気付かなかったとする「アメリカ及び国連の報告への疑念の根拠にはなる。

ただ、これはガンサーの記述と国連の報告書とをつき合わせて考えたときに浮かぶ疑問で、新聞やラジオによる情報では互いの情報に時差があるし、脈絡づけては受け取らないかもしれない。つまり、一〇年後に様々な資料を一時に眺めて突き合わせ、配置できる状態とリアルタイムでその時々に流れてくる情報を摂取するあり方とは、同じ「出来事」に向かっていても認識のパターンに何か根本的に違うものを含むのではないか、ということである。こうしたあたりが、新聞の構成からは「分からないこと」であり、新たに「紹介」しなおされている部分なのだと言よう。

話を戻せば、アメリカの諜報機関は気付いていなかったのか、という自らの疑念に「謀略朝鮮戦争」はストーンからの引用で答えている。

先述のI・F・ストーン『秘史朝鮮戦争』は先ず「原著刊行者」によって「朝鮮戦争の姿を非常にちがつた風に描いている」、「実際、ほとんどすべての点で公式の見方とはちがつて」（同書上巻、一頁）書いている本だと紹介される。ために、イギリスでもアメリカでも出版を断られていたところ、ストーンと意見を同じくする「アメリカの有名な社会学者ポール・スウィージーの主宰する『マンスリー・レヴュー』の出版部」（同書上巻、二三四頁）が刊行を請けおったと言う。北朝鮮に「全面的に責任があつたことは、明白なように思われた」朝鮮戦争の再評価にあたって、ストーンを含む『マンスリー・レヴュー』執筆陣は「背景と周囲の事情から見て」、「李承晩大統領は、北鮮が三八度線の強行突破という形で報復することを期待して、北鮮をわざと挑発したというのが、おそらく真相であろう」（同書上巻、七頁）という結論に達した、と述べられている。「謀略朝鮮戦争」の朝鮮戦争に対する解釈はその多くをこの本に負っている。

「謀略朝鮮戦争」中、前の疑念に答えて、アメリカの中央諜報局が朝鮮で「侵略がはじまるかも知れない状況だつた」ことを「承知していた」という話は『秘史朝鮮戦争』上巻二頁から五頁にかけての抜粋によって構成されている。それでは諜報局が情報を入手していたとして、極東総司令部がその情報に接していないということがあり得るか、「謀略朝鮮戦争」ではそうした問いを掲げ、独立後の朝鮮については「政治的にも、軍事的にも、かれには、なんら責任はなかつた」（『マッカーサーの謎』二六三頁）とマッカーサーを弁護するガンサーを「三百代言的な強弁」（『全集』三〇、三八八頁）として否定的に引用している。しかし、これは総司令部の軍事情報収集に不備があり、それについては弁護の余地がない、という話に繋がるのではない。そうではなく、マッカーサーが諜報機関からの朝鮮戦争勃発についての警告を故意に軽視、或いは黙殺し、ワシントンへの報告義務を怠ったのではないか、ということが同じく『秘史朝鮮戦争』上巻七九頁からの引用で語られるのである。しかし、マッカーサーのそうした「努力」にもかかわらず、おそらくワシントンはあらゆる諜報機関から寄せられる情報によって朝鮮の緊迫した状況について察知していたであろうことが述べられる。

朝鮮戦争勃発に関するアメリカの公式な見解はあくまで「北朝鮮側による不意打ち」である。これに対して、北朝鮮側の発表についても勿論目が向けられている。「謀略朝鮮戦争」で引用されている平壌放送の内容は訳語の一致より、

おそらく劉浩一『現代朝鮮の歴史』（三一書房、一九五三年六月）からの引用[一二]と考えられるが、「南朝鮮カイライ軍」、「三八度線全域」といった表現は同放送内容についての吉武要三『アメリカ敗れたり?』[一三]（五月書房、一九五二年一二月）における記述[一四]を参考にしたものとも考えられる。

劉浩一は「在日朝鮮科学技術協会」に所属。『現代朝鮮の歴史』の朝鮮戦争に対する基本的な考え方は、六月二八日の京城陥落によって「不幸な朝鮮民族のあいだの内戦は事実上おわりをつげた」（一七八頁）にも関わらず、「六月三十日のトルーマン大統領によるアメリカ地上軍の出動命令、七月七日の国連軍総司令部の設置によってアメリカの朝鮮武力介入は本格化し、戦争はぜんめん的に拡大していった。戦争の性格はいっぺんした。朝鮮人民にとって「内乱を挑発した李承晩軍を撃滅し、祖国の統一・独立をたたかいとるための国内戦は、アメリカ軍の出現によって、かれらから祖国の独立と、自由と栄誉をまもり、侵略軍隊を撃滅する全朝鮮人民の祖国解放戦争となった」（金日成）」（一八〇頁）というところにある。つまり、当初は南北間の「内戦」だったものが、アメリカ介入より、その侵略に対して「祖国」を「解放」する戦いとなった、という解釈。この著書は「謀略朝鮮戦争」中、「10」（四〇九～四一〇頁）の日本人の戦争協力[一五]についての記述で、比較的肯定的に引用されることになる。

それでは北朝鮮側の言う通り、韓国側の「侵入」としたところで、北朝鮮側がこうした事態を全く予測していなかったかと言えば、開戦後の破竹の勢いを考える限りそれが「奇襲」だったということもないだろう、と「謀略朝鮮戦争」は考える。ただ、有事に備えてあった北朝鮮側の兵力が三八度線近辺にではなく、その後方に配置されていたという点が防御目的と解釈され、韓国側による先制攻撃という仮説を補強している。この北朝鮮側の軍備が三八度線より後方で形成されていたことを「謀略朝鮮戦争」では退役後のマッカーサーによる証言から導いている。証言とは、昭和二六年四月一一日のトルーマン大統領によるマッカーサー元帥解任という「大事件」の後アメリカ議会で行われたマッカーサーの聴聞会における証言のことである。この軍備の問題については『秘史朝鮮戦争』の中にも以下のような内容の話が見える。

> 開戦後一ヶ月目の一九五〇年七月三十日、マッカーサー司令部でおこなわれた戦況説明会にさいして、ある情報参謀は特派員たちにこう語った。「六月二十五日、戦争が開始されたとき、北鮮軍は事故の動員計画を実行しなかった……北鮮軍の作戦計画では十三個師団ないし十五個師団を使用することになつていたにもかかわらず、侵略開始当初にわずか六個師団しか戦闘態勢になかつた。」動員を完了しないのに、攻撃を開始したということ、とくに李承晩に敵意をいだく韓国国会が李承晩政権を内部から打倒するかに思われたさいに北鮮が攻撃を開始したということは、じつに不可解である。（『秘史朝鮮戦争』上巻、八九頁）

「謀略朝鮮戦争」がストーンのものとして引用している「何故、北朝鮮側は完全に準備出来てから侵略を始めなかったのか。その理由は、おそらくウィロビー少将が説明してくれるだろう」（『全集』三〇、三八九～三九〇頁）という文章は、ストーンが前の内容の話を別の場所（『アメリカ敗れたり?』によると「ネーション」一九五一年一二月一五日。但し未見。）で発表した論文を吉武要三が『アメリカ敗れたり?』中で引いてきたものに拠っている。内容は以下の通り。

> さらにストーン氏は、「ウ少将が、その『朝鮮の真相』（報告者注：ウィロビー少将が一九五一年一二月「コスモポリタン」誌上に発表）で述べるこ

とを好まなかった一つのことがある。七月三〇日の総司令部の記者会見で一情報将校は『戦乱勃発の六月二五日当時、北鮮軍は完全動員していなかった。北鮮軍の戦時計画では、一三～一五師団を動員することになっていたのに、事実は六師団しか戦線にいなかった』と奇妙な声明をしている。なぜ北鮮軍が完全に準備をすませてから侵略をはじめなかったのか、その理由については、おそらく、いつか、ウ少将が説明してくれるだろう」と、皮肉たっぷりに、暗示的な指摘をしている。どうやら「開戦」は、北鮮軍の「奇襲」ではなかったようでもある。（『アメリカ敗れたり？』、一八頁）いづれも、開戦当時北朝鮮側が三八度線に兵力を集中していたわけではないこと、動員が完了していなかったことを示そうとしている。

これに対して、韓国側は聴聞会においてマッカーサーに「韓国軍は三十八度線に軍隊、装備のほとんどを集中していたので、第一線がくずれると同時に人的、物的に壊滅した」（『現代朝鮮の歴史』一七八頁）と説明されるような状況[一六]、つまり六月二五日以前、三八度線近辺に兵力が集中されていたかは詳らかにしないとしても、開戦後すぐに集中できるような配置がなされていたことは指摘できる状況であったにも関わらず、前出の国連朝鮮委員会の報告書で現地視察員の

韓国軍は全地域において縦深的に配置されている。三十八度線の南側は散在する前哨陣地に配置された小部隊および巡邏兵によつて防衛されている。部隊の集中と攻撃のための集結はいかなる地点においても見られない

との観察に基づき、

韓国軍は全く防衛のために組織されており、北鮮にたいし大規模攻撃を行いうる状態には全然ない（『朝鮮白書』、四七頁）

という保証を受けている。

「謀略朝鮮戦争」では韓国側にだけ与えられたこの「保証」を、事件に対する不在証明として考える[一七]。国連が与えたこの「保証」は韓国側が先制攻撃による「侵入」という「事件」には立ち会えないことを請け負うものであり、韓国側の攻撃という可能性を封じてしまうものになっている、ということだ。

しかし、一端「韓国側の攻撃」という可能性を開いてみると、一九五〇年五月までに行われた幾つかの戦争勃発を予見する警告と特にその後の「沈黙」に俄然新たな意味が付与されてくる。更にこの「沈黙」の期間中には先にも述べたアメリカの三首脳とマッカーサーの会談が設けられている。「地震計のように頻繁に記録されている」「南朝鮮側の戦争勃発の予見」について『秘史朝鮮戦争』は

（報告者注：国連朝鮮）委員会は、九月十四日に一つの報告を発表したが、この報告は韓国政府当局が、北鮮が侵略を準備している徴候について、国連朝鮮委員会と何回か討議したことを示している。その第一回目は、一九五〇年一月で、韓国軍参謀長は「委員会に対し、北鮮当局の侵略計画がすでに完了したものと信ぜられ、それが実行に移されるのは、たんなる時間の問題にすぎないことを報告した」。彼は諜報にもとずくくわしい数字をあげたが、これらの数字は委員会の報告中にふくまれている。第二回目は、それから一ヶ月後で、そのさい参謀長は「北鮮軍は大韓民国軍のものよりも有力な大砲をより数多く持つていると述べ、」北鮮側の戦車、装甲車、飛行機が増加したことについてくわしい数字をあげた。さらに第三回目は五月にあつた。その月の十日の新聞会見で韓国国防相は「北鮮軍は大部隊で三八度線にむかつて移動しつつあり、北鮮からの侵略の危険は切迫して

いる」と述べ、これに対して「委員会の注意」が喚起された（『秘史朝鮮戦争』上巻、一一頁）

こと、「五月のはじめに、李承晩大統領は戦闘機の援助をもとめて「五月と六月はわが国民の生活における決定的な時期となるかもしれない」と述べ」たことをあげ、

不思議にたえないのは、韓国政府が五月十日の国防相の新聞会見以後、自己のおそれている侵略の危険と、苦情を述べていた装備の不足とについて、世論の注意を喚起するためなんらの努力もおこなわなかつたことである（同書、一五頁）

と問うている。「謀略朝鮮戦争」でもこのストーンの記述を踏まえ、五月一〇日の記者会見の内容に触れている。ここの記述（『全集』三〇、三九一頁）は「二つの世界とナショナリズム」を特集した日本国際政治学会編「国際政治」（有斐閣、昭和三四年一月）所載、大浦敏弘「朝鮮戦争」[一八]の以下の部分と多く一致する[一九]。

五月に入ると韓国首脳部はしきりに危険説を喧伝しはじめた。五月一〇日、李承晩は外国記者団に、「五、六月は危険なときで、何事かが起こるかもしれない」と語り、申性模国防長官は、「一〇日以内に全面的な内戦が勃発しそうである」とのべた。同月一三日には、蔡秉徳参謀総長は、「五月三〇日の総選挙を期して、北鮮軍が大規模な攻勢に出るであろう」との予測を発表した。（同誌、一九頁）

「しかし、南朝鮮側がこれらの警告を公然と訴えたのは、なぜかこれが最後になった」（『全集』三〇、三九一頁）。韓国はアメリカと気脈を通じ、国連朝鮮委員会の報告（文書第十四号）というアリバイも手に入れ、「注意を喚起する」必要はなかった。寧ろ韓国側から仕掛けるとしたら注意は喚起されない方が都合良かった、ということか。

ストーンにしても、それを引いてくる「謀略朝鮮戦争」にしても、それらが例えばこうした「沈黙」のうちに意味を読み込んでいくことについて、穿ちすぎだとか、鋭い読みだとか判定することは本報告の狙いでない。問題はこうした読み方の占める位置なのだと考える。

結論的に「謀略朝鮮戦争」は朝鮮戦争の端緒について「三十八度線をどちらが先に越したかということは、時間の問題であったように思う」が、「北朝鮮側の資料は極めて手薄」だという留保付きで「資料からみると、南朝鮮側が三十八度線で先に火蓋を切った、という強い印象は免れない」（『全集』三〇、三九二頁）としている。

戦争勃発時の新聞報道が「開戦」の責任は北朝鮮側にあると見なし、「侵入軍」として伝えたことは先に見ておいた。そこからの距離は明らかだろう。そこで今度は新聞とは異なって、ある期間をおいて「出来事」を振り返り、意味づけることを目的とした他の記述、それは具体的に「朝鮮」や「朝鮮戦争」といったものについての歴史書になるが、それらと「謀略朝鮮戦争」との距離感を眺めてみよう。

三　「開戦」の語り方―「謀略朝鮮戦争」における解釈の位置

開戦の翌年にしてマリク休戦提案から約半年後の昭和二六年末に刊行された旗田巍『朝鮮史』（岩波書店、一九五一年一二月）は、後続の朝鮮関係の歴史書が頻繁に参考文献として挙げる著書である。そこには「日本の敗退以来、朝

鮮の統一を主張し、統一運動を指導して来たのは、主として北鮮および北鮮を支持するもの」（同書、二四三頁）であったことが記され、「ソ連からの大きな援助」による「改革・発展」を背景とした北朝鮮が、反対に恐ろしく治安の悪い、「アメリカの援助（一九四九年までに五億五千万ドル）によって辛うじて支えられ」ている「不安定な」韓国政府に対して、「絶えず南北統一の工作」を行った（同書、二四五～二四七頁）、とある。北朝鮮側が「韓国国会にあて、南北鮮国会を以て全鮮統一連合政府を樹立し、李承晩大統領以下を民族反逆者として逮捕すべきことを呼びかけた」のが「動乱の始まる直前のこと」（二四九頁）であったことも記されている。これは朝鮮祖国統一戦線派が昭和二五年六月七日に韓国の各政党にむけて南北鮮の統一を呼びかけたことに端を発する一連の動きを指しているものと思われるが、そのことについて直接的な評価が下されることはなく、朝鮮戦争についてもどちらが先に仕掛けたのかについては述べられていない。ただ「一九五〇年六月二五日に始った動乱は、朝鮮の平和的統一に終止符を打った」とし「それは統一の異常な困難性を示」す（二四九頁）、としている。報告者の個人的な印象としては意識的に明言を避けているように思われた[二〇]が、或いはそのことは問題と見なされていなかったのかも知れない。休戦提案がなされたとは言え、停戦になったわけではなく現在進行の「出来事」なので、振り返って意味づける、という性質は希薄なのかもしれない。

『朝鮮史』刊行の翌年十月にはストーン『秘史朝鮮戦争』が出版されている。この本の朝鮮戦争に対する眼差しは前にも見てきたところである。アメリカの公式発表とは非常に異なった視点、端的に言えば朝鮮戦争を政治的、経済的理由から戦争を欲望するアメリカが引き起こしたものとして解釈したという特色がある。「謀略朝鮮戦争」を初めとして、米・韓挑発説に立つ解釈は多くこの本からの引用を用いて自説の補強としており、大きな影響を与えたと指摘できる。

同年、十二月には吉武要三『アメリカ敗れたり?』が出る。この著書の大きな試みは朝鮮戦争を軍事的側面から眺めようとするものである。しかし、それでも「開戦以来二年間、この戦争が、まったく共産侵略勢力の赤い魔手によって開始されたのだと、なんの疑いもはさまず無邪気に信じきっている国民は、世界広しといえども日本人位のものであるということは、いささか問題である」として「日本を支配している常識とはまた別の常識」（一三頁）を紹介している。吉武の言に拠れば、当時の日本人の多くにとって北朝鮮側の「侵略」は「常識」だったということになる。その「常識」とは「別の常識」として紹介されるのが「謀略朝鮮戦争」にも引かれている[二一]元韓国内務部長官「金孝錫の告白」である。『現代朝鮮人名辞典』（外務省アジア局監修、霞関会編、外交時報社、昭和三五年三月）に拠ると金孝錫（キム　ホソク）の項には

1948年5月制憲国会議員（慶尚南道陜川乙区，大韓独立促成国民会）当選；1949年1月内務部次官，同年3月～1950年2月内務部長官，朝鮮事変後は北朝鮮に残留，1956年7月在北平和統一協議会執行委員，常務委員

とある。『アメリカ敗れたり?』では「開戦直後、北鮮軍の捕虜となった」、「金孝錫の告白（五〇年九月二六日平壌から放送された）」が「韓国軍の北鮮攻撃はすでに一九四九年に計画されていた」（『アメリカ敗れたり?』、一三頁）ことを語ったものとして紹介されているが、「謀略朝鮮戦争」で引用されている部分（『全集』三〇、三九二頁）は吉武の記述に重ならない。ここで吉武が拠っているのは「新時代」第一五号掲載の「侵略者は誰か　ある告白」であり、

そこに該当すると考えられる部分があるので挙げておく。

一九五〇年一月、申性模、ロバーツ、それに私が国防部長官の部屋に集ったとき、ロバーツは不愉快そうな口調でつぎのように話した。――／「北朝鮮討伐は既定の計画である。そしてその実行のときはそう遠くはない。もしあなたたちが目的の遂行を欲するならば、武力とくに戦闘力を準備しなければならない。私が全警察力の軍事訓練を強調する理由はここにある。しかし残念なことに、人員不足を理由として、それが十分になされていない」と。／かれはさらにつずけてこういった。――／「もちろん、北朝鮮討伐はまずわれわれによってはじめられるであろう。ところで、われわれは形式的にせよ、それにたいする妥当な口実をつくらねばならない。この点で朝鮮委員会が、国連本部えの報告は非常に重要性をもっている。国連朝鮮委員会はもちろんアメリカに有利な報告を作成してくれるであろう。しかし、あなたたちの方でもこの点に留意して、委員会に好感をうるようにした方がよい」と。[三二]

吉武は金の「告白」を「そのまゝ信用しないとしても、少なくとも「北鮮の侵略」というだけでは決して説明し切れない多くの事実があったということだけは明らかである」（『アメリカ敗れたり?』、一七頁）と評価し、「謀略朝鮮戦争」は「北朝鮮側の捕虜の「自白」だから相当割引くとしても、このような訓示があったかもしれない可能性は考えられる」と判断する。「謀略朝鮮戦争」の歴史解釈についてその妥当性を量るのは本報告の目指すところでないことは再三述べているが、国連の現地調査報告を韓国側にとって「極めて好都合なアリバイ」とし、「北朝鮮側の捕虜」の「告白」に「かもしれない可能性」を見る判断基準は順次見ていく一九五〇年代における大きな物語としての朝鮮戦争の語り口に求められるのではないだろうか。

一九五三年五月、先述の劉浩一『現代朝鮮の歴史』が刊行される。この本の朝鮮戦争への解釈については既に述べておいたので、ここではストーンの言っていることを自説の補強として用いながら、例えば「国連をせきたてて「北鮮の侵略行為」にたいする非難決議をつくりあげることに大わらわであった反面、いわゆる「北鮮の奇襲攻撃」にたいしては、アメリカも韓国政府も奇妙なくらいにおちつきはらっていた」（同書、一七七頁）とするような記述を確認しておく。アメリカが国連に対して特別なイニシアチブを有している、北朝鮮の「奇襲」はアメリカと韓国政府にとって予定内の事件だった、という視線がうかがえるだろう。

その『現代朝鮮の歴史』と先述、旗田の『朝鮮史』とを参考文献に挙げているのが朴慶植・姜在彦『朝鮮の歴史』（三一書房、一九五七年七月）である。「謀略朝鮮戦争」では「5」（『全集』三〇、三九四～三九八頁）、日帝からの解放より開戦に至るまでの南北朝鮮の流れを述べた部分がこの本から引用抜粋される[三三]。「謀略朝鮮戦争」での引用部分、つまり日本の敗戦による朝鮮の解放から開戦までの執筆は姜在彦が、以後の朝鮮戦争部分は劉一孝という別の人物が担当している（三四一頁、「あとがき」参照）。しかし、両者の間に基本的な解釈の違いはないと考えて良いだろう。姜が、劉の文章を含めたこの本全体の著者として名前を挙げていることからもそれは窺えるが、具体的な著述に分け入っていくとすれば、例えば、姜は

朝鮮における戦争の危機をふせぐために、平壌でひらかれた祖国統一民主主義戦線拡大中央委員会は、六月七日に第二回の平和的統一にかんするあたらしい提案をおこなった。それにもとづいて最高人民会議常任委員会は、

六月十九日に、共和国最高人民会議と南朝鮮国会を単一の立法機関として合同し、朝鮮の平和的統一を実現することをうったえた。平和の戦争にたいする決定的な対決はせまられていた（同書、三一四頁）

と記す[二四]。これに続いて当時のアメリカ高官による好戦的な発言が対置されるのだが、ここには、「平和的統一」を目指す北朝鮮が好戦的なアメリカ、韓国に「対決」する、という構図が見える。文脈から「平和の戦争にたいする決定的な対決」とは、「北朝鮮の米・韓にたいする決定的な対決」と読みかえることができよう。この「対決」を受けて劉は

戦争勃発と同時に発せられた六月二十七日の米大統領トルーマンの命令は、朝鮮戦争とアメリカ極東政策との関係――つまりこの戦争がアメリカの侵略政策に起因するものであることをはっきりとしめしている（同書、三一五頁）

と語る。朝鮮戦争を引き起こした責任はアメリカの帝国主義的「侵略政策」にある、という解釈だ。こうした姿勢は著書全体の結び、「朝鮮の平和的統一のみとおし――それは北半部における人民民主主義制度の強化とともに、このような平和的統一のための民主主義的勢力の結集の規模と、テンポいかんに主としてかかっているといわねばならない」という文章にも表れている。つまり、北朝鮮の制度を拡大していくことこそが朝鮮半島の統一に繋がる、という考え方である。

昭和三三年に『朝鮮―民族・歴史・文化―』（岩波新書、昭和三三年九月）を著した金達寿は「朝鮮を知るために」旗田の『朝鮮史』と朴慶植・姜在彦『朝鮮の歴史』を読者に薦めている。実際、『朝鮮史』からの引用が多く取られており、政治的な主張は『朝鮮の歴史』と近いところにある。金は朝鮮の独立、統一への試みは「左翼」、「別なことばでいえば「北鮮」を支持するものが主導権を握っている」（二〇四頁）とし、しかしながらその動きは「反共を旗幟とする南鮮政府」（報告者注：旗田『朝鮮史』よりの引用）によって阻まれていると語る。

では、この「反共を旗幟とする南鮮政府」の主体というものはいったい何であろうか。それはもちろん日本にとってかわったアメリカであり、李承晩であるが、しかしそういっただけでは、コトが少し単純にすぎる。さきに私はアメリカの軍政が「現存の政治機構を使用」するということで、旧総督府官吏をはじめとするかつての対日協力者たちを激励することとなったといったが、それはここのところの事情を説明したものである（同書、二〇五頁）。

金は李承晩政府の「いわゆる国防軍と警察との首脳」はその多くが「旧日本軍将校、カイライ満州国軍将校、旧総督府警察官」（二〇五頁）からなっており、「彼らにとってはいわゆる八・一五の解放もただ「主人」がかわっただけのこと」、「アメリカというあたらしい「主人」をもつこと」（二〇六頁）に過ぎなかったと言う。解放後の朝鮮に対するこの見方、アメリカは日帝の後釜に過ぎないのではないかという疑念は、直接的な影響関係は云々しないが、「謀略朝鮮戦争」から丸一年後に執筆され始める「北の詩人」（昭和三七年一月～昭和三八年三月「中央公論」連載）こと林和が直面する戸惑いや懊悩に共有されている。例えば、林和の目に映る次のような「景色」が注目されよう。

その下に白い大きな議事堂まがいの建物があった。元朝鮮総督府で、中央の高い所にアメリカの国旗が翻っている。その下は影のように低く、その底面に屋根が密集し、朝鮮ホテルなどの少し高い建築だけが日向をうけて

いた。（『全集』一七二五、八頁）

日帝が元居た「中央の高い」場所に今度はアメリカが立ち、その「下」で「影」のように朝鮮人が「密集」しているという構図。林和の目にはソウルの街がこう「映る」のである二六。

金は朝鮮戦争の勃発について「社会主義経済体制」によって「生活水準の向上」した北朝鮮が「政治と経済」の「どん底」状態にある韓国へ「統一のための協議をよびかけ」ていたことに加え、中華人民共和国の建国を受け、李承晩政府及びアメリカは「焦らないわけにゆかなかった。当時、国務長官顧問であったダレスがこのとき南朝鮮を訪問し、彼は李承晩と会談をおこなうと同時に、三八度線を視察して帰った。朝鮮に戦乱がおこったのは、このダレスが帰って数日を出ない、一九五〇年六月二五日のことであった」（『朝鮮』、二〇八～二一〇頁）と語られる。どちらが仕掛けたかについて明言はしないものの、ここにある含みは、朝鮮人民軍が中国人民志願軍の援助によって国連軍を「追っぱらった」、「アメリカは細菌戦をこころみるなど卑劣な手段をまでつくした」、停戦後朝鮮労働党は「祖国の平和的統一のための新提案を採択した」のに対し、韓国ではアメリカ軍が「居座りつづけ」ており、李承晩も「暴威をふるいつづけ」「性コリもなく武力による「北進統一」を呼号」、「しきりにまた戦争を挑発」（同書、二一二～二一四頁）している、といったレトリックに明らかだ。

大西正道『南朝鮮』（新読書社、一九五九年七月）もまたその副題「圧制にあえぐ民衆」が示すように韓国、特に李承晩政府に対する批判的な視点から著されたものである。参考文献にはやはり『朝鮮史』、『現代朝鮮の歴史』、『朝鮮の歴史』が挙げられており、これらの著書の歴史解釈は肯定的に受け入れられている。開戦については、「六・二五のまえ」三八度線は全線にわたって非常な緊張状態にあったのに米国政府と軍だけが「表面のんきそうな顔をしていた」（同書、七〇～七一頁）。米軍が「三八度線に備えないふりをしていたのは、北鮮軍を半島の前まで引きこむ戦略だったろう、という見方もできる」し、実際「米軍は戦略的な大後退を演じた」。それに気付いた「優秀な性能をもつ北鮮空軍は」防衛に専念し「南鮮に侵入することをさけた」（同書、七二頁）と述べる。大西はこの「事実」から「世界の心ある人びと」はアメリカが政治的、経済的理由から世界戦争を誘発していることを「直感」したのであり、「たわいもない宣伝に酔わされて、いい気になっていたのは、一部の日本人ぐらいのもの」（同書、七二頁）だと言う。アメリカが戦争を誘発しようとしていたことを示す例としては、ダレスが三八度線を視察した後、李承晩に宛てたとされる

> 現在展開されつつある「偉大なドラマの中で、貴国が演じうる決定的な役割に、私は大きな意義を見出すものである」との手紙（同書、七一頁）

が紹介されている。一方、「世界の心ある人びと」の中心は「アジアの平和をねがう国々の指導者」、即ちソ連と中国の指導者だが、彼らの平和への「大いなる努力」は、李承晩の軍隊が行ったとされる極めて「非人道的な」エピソードと対置、対照されることとなる。

「伝聞」だった先述の手紙を「事実」として「報告」するのが『事実は語る—朝鮮戦争挑発の内幕—』（朝鮮・平壌　外国文出版社編集刊行、一九六〇年五月）である。「戦争当時、朝鮮人民軍によって敵の機関からろ獲された秘密文書—かれらの朝鮮戦争挑発の内幕をばくろする文件の一部をとりまとめて出版」（三～四頁）したとされるこの「資料集」は、冒頭で十年前の出来事を次のように振り返っている。

一九五〇年六月二五日、アメリカ帝国主義者が朝鮮にたいする侵略戦争を挑発したことは、いまなお、人々の記憶に新たなものがあろう、／かれらは、その侵略目的のために、一九四五年南朝鮮に上陸していらい、引きつづいて、植民地・軍事基地化政策を追求し、李承晩カイライ軍の増強に狂奔してきた。／こうして、かれらは、ついに、一九五〇年六月二十五日早暁、北緯三八度線全線にわたつて侵攻を開始した（同書、三頁）

朝鮮戦争は「アメリカ帝国主義者」による「挑発」によって引き起こされた、という解釈を読者の「記憶」（もともとそれが在るしろ無いにしろ）に埋め込むような記述だと言える。一九五〇年六月二〇日に送られたとされる件のダレスによる手紙の全文は以下の通りに掲載。

わたしの親愛なる李大統領！

わたしは、あなたに私の近著「戦争と平和」を贈るようになつたことを幸福に存じます。わたしは、この本が、われわれの闘争の本質についてのあなたと私の見解が多分に一致していることを見せてくれるだろうと思います。また、あなたは、私の本のなかに朝鮮問題がしばしば言及されていることもお分りになるでしょう。

私は、まだ開幕されない偉大な演劇で、あなたの国が演ずべき決定的な役割をひじょうに重要視しています。（同書、二〇五頁）。

この手紙については「謀略朝鮮戦争」においても、アメリカが韓国と北朝鮮の対立を冷戦構図の中でまさに「われわれの闘争」として捉えていたことの証左として示されている（『全集』三〇、三九二頁）。つまり、「韓国対北朝鮮」は内戦というよりは寧ろ、アメリカにとって「アメリカ対ソ連」、ひいては「自由主義対共産主義」の縮図として捉えられていたという解釈である。韓国と北朝鮮を最も可視的な例として、世界地図が二色に塗り分けられようとしていた時代の政治・経済・軍事的背景は「謀略朝鮮戦争」中「4」で総括されているが、そこで強調されるのはアメリカの「焦燥」である。広大な中国大陸が共産党に席巻され、アメリカの原爆独占という優位がソ連の所有という最悪の状態でうち破られ、対極東援助を初めとして「世界にばらまいた厖大な資本」（『全集』三〇、三九四頁）は、貸し付けた国が勢いを増す共産主義に染まってしまえば、採算の見込みがない。当時のアメリカとしては何としても朝鮮半島で押し寄せる赤化の波を押し返したかったに違いない。そのために先手を打ったのではないか、という読み。

以上「謀略朝鮮戦争」に引用されるものを中心に、その周囲を拾いながら朝鮮戦争を読んだ五〇年代の資料を眺めてきた。時期的な流れから見ると、「謀略朝鮮戦争」はここに位置することになる。では、この後の六〇年代にはどのような流れが形成されていくのかもう暫く追っていきたい。

※

これまでの資料から、韓国と北朝鮮の両国の捉えられ方には一つ傾向が認められるだろう。統一を目指す北朝鮮は社会主義経済が功を奏して生活水準が上向きになったのに対して、韓国の李承晩政権は政治的にも経済的にも混乱しており、開戦直前には政権自体が危ういものになっていた、とする傾向である。

このことについて、一九六二年、注目さる書が刊行されている。関貴星『楽園の夢破れて（北朝鮮の真実）』（全貌社、昭和三七年三月）である。著者は一九六〇年八月、「八・一五朝鮮解放十五周年慶祝訪朝日朝協会使節団」の一員

として平壌を訪れ、そこで見聞したことをきっかけに本書を著したと言う。使節団の目的は

牡丹峯下の金日成広場で繰りひろげられる、北朝鮮解放十五周年の祝典に参列し、日本人民を代表して、観覧台上から心中に慶祝の意をのべ、国威を示すパレードに接し、朝鮮事変の惨禍という、きびしい試練に打克った逞しさに、心からの尊敬と慶びをわかちあう（同書、一三頁）

ことにあったが、著者が「北朝鮮で見た現実は、あまりにも文明に逆行した大衆収奪の姿であり、非科学的非人道的野蛮極まる独裁国家であった」（同書、一三四頁）と言う。当時の日本における北朝鮮のイメージと実際のそれとの違いを表すのに関は、昭和三三年に出版されベストセラーになったという『三十八度線の北』という本の作者寺尾五郎が、それを読み、希望を抱いて北朝鮮に渡ってきたという複数の青年から激しい抗議を受けたエピソードを紹介する。「北朝鮮謳歌にはじまり、北朝鮮賛美でおわる」（同書、六九頁）本の内容に反し、実際の北朝鮮は貧困と圧制の地、であったという。著者は「今の北朝鮮労働党およびその手先朝総連の愚民政策はその頂点に達した。彼らは、己れに迎合し、忠実に盲従するものをもって愛国者とし、その愚民政策を賛美するものを称して英雄とする。そして彼らの矛盾、誤りを指摘するものはことごとく反動、スパイの汚名を冠し、追放、粛清の極刑に処す」（同書、「まえがきにかえて」）と告発する。勿論、ここで「注目さる」と言ったのは、何もこの本が北朝鮮の実相を言い当てていると考えるからではなく、北朝鮮に対してそれまでとは違った語り方がなされている点を確認しておきたかったのである。

昭和三八年には金三奎『朝鮮現代史』（筑摩新書、昭和三八年七月）が刊行される。著者の金は若い時分東大に学び、ソウル文理科大学教授を勤め、ソウル東亜日報社主筆となったのが開戦の前年である。金は解放から朝鮮戦争までの間に行われた南北双方の政治に批判的である。北朝鮮労働党はソ連に対して「羊のよう」に「従順」（同書、五六頁）で、南朝鮮は「デモとストライキと暴動とパルチザン闘争の波状的連続であった」（同書、六三頁）と言う。結果、「米ソは朝鮮に民主主義的政府を樹立することに失敗した。思想、信念の自由をはじめ、言論、結社の自由など一連の大事な朝鮮人民の基本的人権は、すでに、米ソ軍政時代に消え去っていた」（同書、六六頁）ということになる。開戦については以下のように語っている。

一九五〇年（昭和二五年）六月二五日午前四時、北鮮軍は戦闘を開始し、午前六時にはすでに、三八度線を越え、二七日夜中には首都ソウルを陥れ、一路釜山に向かって怒濤の進撃をつづけた。韓国民は、政府の不手際から避難の機会さえも与えられず、彼らの恐怖政治にふるえおののかねばならなかった。だから、国連が侵略防止のために、迅速な警察行動に出たとき、「民主主義の奇蹟」と思われたのも無理からぬことであった。（同書、六八頁）

ここで、注目されるのはこれまでなら肯定的に評価されてきた開戦前の北朝鮮による統一の呼びかけが「計算された挑戦」（同書、七一頁）と考えられていることである。統一の呼びかけは同時に李承晩を初めとする韓国政府閣僚の逮捕を条件とするものであったことは以前に述べた。当時の韓国にとってこれは無理難題だと言うのである。この申し出が拒否されることは事前に分かっていたことであり、それを踏まえて敢えて「平和的統一」を呼びかけ、予想通り拒否されることで武力統一の正当性への布石を打った、と解釈するのである。ストーンを初めとしてこれまで取りざたされてきた米・韓による挑発行為につい

ては、三八度線の小戦闘は間断なく繰り返されてきたのであり、その一つを敢えて戦争の呼び水として忖度するのは、北朝鮮の「宣戦布告」を前にしてナンセンスだと金は主張する。つまり、「共産主義者の大義名分がどのようなものであれ、とにかく、北鮮軍は三八度線を越えて怒濤の進撃を始めたのである」（同書、七四頁）。

少し時代を下らせて昭和四一年発行の神谷不二『朝鮮戦争』（中公新書、昭和四一年二月）にも目を配っておく。神谷は「まえがき」で朝鮮戦争は戦後日本の歩みの中に極めて重要な足跡を残したにもかかわらず、占領下にあった戦時には「占領担当国であるアメリカ」から「きわめてかぎられた情報しかあたえられ」なかった。その後占領が解けてから朝鮮戦争に目が向けられる際は「こんどはもっぱらアメリカの占領政策・反共政策への批判、さらに進んでその「帝国主義」あるいは「戦争政策」への非難、それにたいする共産側の反帝国主義・「平和政策」・民族解放闘争への共感とその推進という立場から論じられるようになった」（同書、二頁）と言う。こうした「政治的主張の一環として論じられ」てきた傾向の結果、「わが国では今日でも、朝鮮戦争はアメリカの指令による南鮮の北鮮への侵略であるというイメージがひろくもたれて」おり、「北から南への大規模な攻撃が真相だなどといおうものなら、叱られないまでも白眼視されかねない空気さえあった」が、「その多くはほとんどI・F・ストーンの『秘史朝鮮戦争』を論拠としていたもので、今日の水準からすれば安易にすぎる議論が多かった」（同書、四頁）との苦言も呈している。この反省から神谷は自らの立場を「アメリカ側・共産側いずれの公式論や政治的主張からも自由」（同書、三頁）であること、に求める。そこから見る限り「前年における中共の大陸制覇に大きな刺激と激励をうけながら、この見通し（報告者注：北朝鮮が武力統一に乗り出しても、アメリカは自らの軍隊を出動させてまで韓国を守ろうとはしないだろう、という見通し）のもとに北から南にたいして民族解放戦争として開始されたのが、まさに朝鮮戦争」ということになるが、「南北どちらがさきに発砲したかは水かけ論」（同書、三〇頁）で、窮地に立たされていた李承晩が挑発を行った可能性は考えられるが、当時の南北の軍事状況を鑑みると北朝鮮が計画的に侵攻を意図していたものと考える。こうした解釈に、いずれの「政治的主張からも自由」な「学術論文」としてその妥当性を付与しようとする姿勢にはアカデミズムのイデオロギーを感じざるを得ないが、それは兎も角として結果的にこの解釈は五〇年代に繰り返された「南から北へ」を揺り戻すものとなっていることが指摘できる。

この後も神谷が謝辞を贈った信夫清三郎による『戦後日本政治史Ⅳ』（勁草書房、一九六七年一一月）が刊行され、朝鮮戦争に対する記述が見られるが、開戦時の語り口は神谷によるものと大差ないと考えられる。

これまで見てきた資料から、五〇年代の朝鮮戦争の開戦に対する語り口は当時の新聞報道に反して、と言うよりはそれに「警鐘」を鳴らす形で、「米・韓」による謀略的先攻、或いは挑発を唱える傾向にあったと指摘できる。この語り方の形成に『秘史朝鮮戦争』が大きな影響を及ぼしていることは、その引用の多さからも十分にうかがえる。この「南による挑発」という「大きな物語」に乗る形で「謀略朝鮮戦争」が登場し、しかもその物語を飛躍的に浸透させたと考えることができよう。『日本の黒い霧』が大変話題を呼んだベストセラーたることは今更言うまでもない。こうした流れを受けて、以降その解釈を批判的に相対化する言説が目に付くようになる。いわば、揺り返しが起きたのだと考えられる。「謀略朝鮮戦争」はそれまでの解釈を捉え直すことを誘発する言説

として機能した、と位置づけることができよう。

四　おわりに

最後に引用資料と「謀略朝鮮戦争」の「解釈」の関係についてこれまでの議論を踏まえつつ、考察を加えておきたい。

先ず引用されている資料について、米国政府の公式発表は、著者の意図としてはそれを擁護するものであったろう記述をもって、かえって相対化、解体されてしまうものとして引用されていたことを確認した。それに対して、北朝鮮側の公式発表は評価のための「資料」の「乏し」さより明確な判断は留保され、「常識的」（『全集』三〇、三八九頁）な推論により多少の「割引」をもって読まれることが提案される。この「割引」という考え方は、比較的数の少ない北朝鮮発信の言説の一つである、「金孝錫の告白」を引いてくる際にも提案されていた[二七]。しかし、「割引」とは多少引いて考えるにしても基本的にはそのまま、ということでもある。

直接的な北朝鮮発信の言説は少ないと述べたが、実は「謀略朝鮮戦争」で引用される資料の殆どは「二」、「三」で見て来たように『秘史朝鮮戦争』を初めとして開戦の責任をアメリカに問う解釈や、北朝鮮側の発表を賛同的に汲んだ解釈を取るものである。これら一連の傾向を持った「資料」に対する清張の姿勢は、『朝鮮の歴史』の著述に対する以下のような評価に端的に表出している。

北朝鮮側は、着々と金日成の指導によって基礎が固まり、工業生産力の建設となった。これは北朝鮮の記録にはもっと讃美的な修辞で書かれているが、公平に考えてあまり間違いはないように思える。何となれば、北朝鮮では南朝鮮のようなストライキや暴動や暗殺などが見られないからである。重工業建設のために一般の農民の「不平」が宣伝されているくらいなもので、南朝鮮側のような暗黒的な印象は、北朝鮮側からは受けないのだ。（『全集』三〇、三九七～三九八頁）

ここにも大袈裟な「修辞」はあるが、「事実」関係に「あまり間違いはない」だろう、という「割引」を見て取ることができる。実際、「謀略朝鮮戦争」においてなされる『朝鮮の歴史』からの引用に、李承晩政権の基盤をなした地主階級を指して使われる「対日協力分子」、「買弁資本家」、アメリカの施策を評した「帝国主義」的「反動政策」、などの「修辞」は用いられない。しかし、これらの「修辞」を取り除いた後には「事実」が残るのであろうか。「修辞」は「内容」を「飾る」言葉だろうか。

「公平に考えてあまり間違いはない」という言い方は、どちらにも与さない立場から考えて「事実」と「記述」はそれ程齟齬をきたさないとの判断を示すものだ。この場合の「事実」とは「ストライキや暴動や暗殺などが見られない」ということに当たる。しかし、そうした動きが「見られない」からと言ってそれが「無い」とは限らない。何より、それは「日本の黒い霧」が一貫して訴え続けてきたことではなかったか。

勿論、「どちらにも与さない立場」を遂行するために、例えば北朝鮮に「讃美的」な解釈に対して、それに反するような読みを持って来て、それぞれの言説を相対化することは可能だろう。しかし、その試みは「事実」との照合には決着しない。寧ろそれは「事実」とか「内容」といったものの自明性を無化してしまう試みである。そして、「記述」の「真偽」とか「妥当性」といったものは判断留保となる。

結局、ある「出来事」について、ある言説、ある解釈を選び取ったとすれば、それはまさに一つの「行為」たることの他ないのではないだろうか。

こういった意味で、本報告は「謀略朝鮮戦争」における歴史解釈を時宜に応じた、つまり安保闘争下、「中立」であることの可能／不可能といった問題が大きく問われた「場」に応じた、一つの「行為」として位置づける。それがある明確な「行為」であることは、末尾の日本はまだ「占領中」であるという指摘、アメリカが講ずる「謀略」への注意の喚起、そしてその文脈の中で解釈される

この次に、極東のどこかに「第二の朝鮮」が発見されたときは、第一番の滅亡の危機が日本を襲うことは間違いないであろう（『全集』三〇、四一七頁）

という「警鐘」が裏付けるものと考える。

※

今回は開戦以後の流れを追うことが出来なかった。公式発表に反するものがmaster narrativeとなる問題を含めて機会があれば別稿にて詳察したい。なお、テクスト全体に対する参考資料は別添の〈資料編〉を参照されたい。

注

一　「なぜ「日本の黒い霧」を書いたか」（「朝日ジャーナル」昭和三五年一二月四日初出）。

二　『松本清張全集』三〇（株式会社文藝春秋、一九七二年一一月）。以下、本論における清張のテクストの引用はこの全集に拠る。

三　冒頭、「この座談会は、去る六月十九日夜行われ、NHKラジオ・テレビを通じ放送されたものであるが、各方面の多大の反響を呼んだので、茲に掲載する」との断りがある。こうした政治的内容の座談会が「反響」（どれくらいかは兎も角）を呼んだらしいことは興味深い。

四　但し、「北朝鮮軍」、「朝鮮に駐在」は「白書」中においてはそれぞれ「北鮮軍」、「京城に駐在」となっている。また、句読点、漢字遣いと平仮名遣いの違い（例えば「受けとつた」が「受取った」になっているなど）については文意に関わらない限り以下も割愛することとする。

五　原題は"THE RIDDLE OF MACARTHUR"。「訳者あとがき」に脱稿は昭和二五（一九五〇）年一二月中旬、ニューヨークでの出版は昭和二六（一九五一）年二月とある。日本での発行も奥付に拠れば同年（昭和二六年）だが、「訳者あとがき」の末尾には「一九五二年五月」とある。

六　『マッカーサーの謎』には「大ニューズですよ、韓国軍が北鮮に攻撃を開始したんです」（二五七頁）とある。この後も、「ニューズ」は「ニュース」として記述される。また「謀略」では、他の引用資料についても「北鮮」「南鮮」といった言葉はそれぞれ「北朝鮮」「南朝鮮」に改められている。詳細は〈資料〉の校異表を参照のこと。

七　原題は"The Hidden History of Korean War"。「原著者刊行の言葉」末尾には「ニューヨーク市にて／一九五二年四月」とある。

八　但し、『マッカーサーの謎』においては「陸軍四個師団」、「保安隊三個旅団」とあるところが、「謀略」においてはそれぞれ「正規軍四個師団」、「警官隊三個旅団」とある。これより表現の一致から考えて「謀略」が直接引いてきたのは『秘史朝鮮戦争』上巻、四頁、ストーンによるガンサーの引用部分であると考えられる。

九　朝日新聞紙上には北朝鮮側の越境行為ばかりが告げられているが、他にも報じられなかった事件が多発していたであろうと考えられる。

一〇　但し、実際には二〇日が天候不良であったため、二一日に東京帰還となった。

一一　朝鮮白書第一四号文書には以下「六月二十二日、木曜日、甕津の連隊本部が受けた報告によれば、三十八度線北方約四キロの翠野附近で軍事活動が増大しているとのことであつた」との報告がなされるが、「しかし、三十八度線の全般的情勢が急激に変化するであろうことを示すような北鮮軍の異常な活動については、何等の報告もなかった」（『朝鮮白書』、四八～四九頁）と

結論づけられている。

一二 「六月二五日払暁、南朝鮮政府のいわゆる国防軍は、三十八度線全線にわたり三十八度線以北地域に不意の侵攻を開始した。敵は海州西方方面からと、金川方面からと、鉄原方面から三十八度線以北地域にむかって一キロないし二キロまで侵入した。／朝鮮民主主義人民共和国内務省は、三十八度線以北地域に侵入した敵を撃退するようにと共和国警備隊に命令をくだした。げんざい共和国警備隊は侵攻する敵をむかえうってかこくな防衛戦を展開している。共和国警備隊は、襄陽方面から三十八度線以北地域に侵入した敵を撃退した。（注：一九五〇年六月二六日「建設通信」）」劉浩一『現代朝鮮の歴史』（三一書房、一九五三年六月）、一七五～一七六頁。続いて「朝鮮民主主義人民共和国政府は、まんいち南朝鮮政府当局が三十八度線以北地域にたいする冒険的な戦争行為を即時中止しなければ、敵を制圧するために決定的たい策をとるであろうし、同時にこの冒険的な戦争行為から発生する峻厳な結果にたいする責任を、ぜんめん的にかれらがおわなければならない点を、南朝鮮政府当局に注意することを共和国内務省に委任した」とある。

因みに『金日成著作集』6（朝鮮・平壌　外国文出版社、一九八一年）の「断固たる反撃によって武力侵略者を掃討しよう／―朝鮮民主主義人民共和国内閣非常会議でおこなった演説―／（一九五〇年六月二十五日）」と題する演説の冒頭には「同志のみなさん！／売国奴李承晩一味のかいらい軍は本日未明、三十八度線全域にわたって共和国北半部にたいする不意の武力侵略を開始しました。／共和国政府は戦争の拡大をくいとめるために、敵に無謀な武力侵略を即時中止するよう警告し、もし冒険的な武力侵略を中止しないならば、その結果は全的にかれらの責任に帰するであろうことを言明しました。それにもかかわらず、ごう慢な敵は戦火をさらに拡大しています。敵はすでに三十八度線以北の地域に一～二キロメートル侵攻し、冒険じみた「電撃戦」で共和国北半部を一挙に席巻しようと策しています（以下略）」（一頁）とある。これが翌日行われたらしい「すべての力を戦争勝利のために／―全朝鮮人民への放送演説―／（一九五〇年六月二十六日）」という演説では「親愛な同胞のみなさん！／愛する兄弟姉妹のみなさん！／人民軍の将校、下士官、兵士諸君！／共和国南半部で活動しているパルチザン諸君！／私は朝鮮民主主義人民共和国政府を代表して、みなさんにつぎのように訴えます。／売国奴李承晩かいらい政府の軍隊は、六月二十五日、三十八度線の全域にわたって共和国北半部にたいする全面的な攻撃を開始しました。勇敢な共和国警備隊は敵の侵攻を迎えうって激戦を展開し、李承晩軍の攻撃を挫折させました。／朝鮮民主主義人民共和国政府は現情勢を検討し、人民軍に断固たる反撃戦を開始して敵の武力を掃討せよ、と命令しました。人民軍は共和国政府の命令によって、敵を三十八度線以北の地域から撃退し、三十八度線以南の地域へ十～十五キロメートル前進しました。人民軍は甕津、延安、開城、白川などの各都市と多くの村落を開放しました（以下略）」（八～九頁）となる。

一三 『アメリカ敗れたり？』は本文中にも書名ごと引用されている（『全集』三〇、四〇一頁）が、その際は『アメリカ破れたり』となっている。

一四 「二五日朝の平壌放送は、朝鮮民主々義人民共和国内務省の発表として、つぎのように伝えている。／「二五日早朝、南鮮カイライ国防軍は、三八度線全域にわたって北朝鮮に突如侵入を用始し、三八度線以北の海州の西方、樺川、鉄原の地域にむかって一キロ侵犯してきた。…激烈なる防禦戦を展開した結果…三八度線全域にわたって敵の攻撃を阻止した…敵を完全に撃退した後、反撃に移った。／六月二五日現在、人民軍および警備隊は三八度線の多くの地点を突破し、三八度線以南五キロないし十キロに進撃した。戦闘はなお続行中である」。吉武要三『アメリカ敗れたり？―軍事的に見た朝鮮戦争―』（五月書房、一九五二年一二月）、四四頁。

一五 日本人兵が朝鮮戦線に参加していた、という内容のもの。清張は兵士の数はとにかく、直接日本人が戦線に加わっていたであろうことは「否めない」としている。なお、本文中ネオ・平塚のことを報じた「朝日新聞」の日付が「五二年一一月一九日」となっているが、これは「五二年一一月一三日」の誤り。

一六 ほぼ同内容のことを「謀略朝鮮戦争」では「マッカーサーは、韓国軍の三十八度線の防衛が脆くも破れたことについて、のちに証言している。「韓国軍は北朝鮮軍には全然抵抗できませんでした。そして、韓国軍の補給力の配備が途方もなく貧弱だったのです。韓国軍は、その物資や装備を三十八度線のすぐ傍に置いていました。彼らは縦深陣地を造っていなかったのです。三十八度線と京城の至る所が韓国軍の物資集積地域だったのです」（『全集』三〇、三九一頁）と記しており、文書第一四号の「韓国軍は全域において縦深的に配置されている」という報告とは齟齬をきたす。

一七 「アリバイ」という考え方のヒントは無論ストーンに拠っているだろう。「この現地報告の企図するところは、韓国軍がどんな意味にしろ、攻撃的意図をいだいていることはありえない旨を示すことにあったようだ。（中略）韓国軍は空軍の支持、装甲車、重砲等を欠いているので、「侵略を目的とする作戦は……不可能」であろうといっている。戦争勃発のまさに前夜に提出

されたこの報告の作成の時期と内容は、韓国軍にとつてきわめて好都合なアリバイとなつた。」『秘史朝鮮戦争』、一三〜一四頁

一八　大浦の基本的な主張は、朝鮮には「南鮮住民の利益をいささかも代表しないところの、米軍政庁によって保護育成された親米派、隷属資本家、封建地主といった階層に属する人々」から成る「南鮮単独政権たる韓国政府」と、「朝鮮人民の意志の統一的な表現ではあっても、地域的な統一はなしとげえなかった」人民共和国政府」の二つがある、というもの。李承晩の「北伐」はアメリカの援助を得るためのものと解釈される。開戦については、韓国軍の方が北朝鮮軍よりも兵力を三八度線に集中していたこと、北朝鮮軍はその多くを後方に配置していたことが述べられ、暗に韓国側の先攻を印象づける。この姿勢には、同誌後続の論（高杉恭自「朝鮮戦争の報告に寄す」）から、「冷厳な歴史的事実を、多分に自己の好みによる主観的価値によって曲げて伝えるもの」だとする批判が加えられている。「冷厳な歴史的事実」を「曲げず伝えられるかどうかはさておき、清張が大浦の論を引用したという確証はない。しかし、報告中でも述べたように、今のところ他の資料では見られない発言内容の一致と発表された時期の問題からもその可能性は大きいと言えるのではないだろうか。

一九　ただ、李承晩が発言したのが「謀略」では「五月十二日」になっているほか、韓国の総選挙が「五月二十日」になっている。実際、韓国で総選挙が行われたのは五月三〇日。

二〇　『朝鮮史』は基本的に北朝鮮側の「発展」は韓国側に「誇示宣伝」され、韓国側では北朝鮮側の「統一運動」が拒否され続けた、という姿勢を取っている。双方に対して批判的であろうとする視線が伝わってくる。「動乱」については直前に「北鮮政府」から「連合政府」樹立の提案（但し、「李承晩大統領以下」の反逆者としての逮捕が条件）がなされたことが記されており、明言は避けられているものの「和平統一」の無理を悟った北朝鮮側が「武力統一」に踏み切った、との印象は与えるかもしれない。

二一　『全集』三〇では「金考錫」になっているが、初出は「金孝錫」。詳しくは〈校異表〉参照のこと。

二二　内容的には重なるが、言い回しなどが異なり、この資料を参考にしたものとも考えられない。

二三　他に、「1」の末尾に記されているシャブシーナ『第二次大戦後の朝鮮』による「二つの政策、植民地図の運命に対する二つの態度、対角線的に反対な二つの方針の図解」（三八六頁）という文章も、この本からの引用であろうか。但し、『朝鮮の歴史』では「植民地図」が「植民地国」（二八六頁）となっている。

二四　本文中の記述はあくまで一九五七年当時のものである。つい近年同氏による『増補新訂　朝鮮近代史』（姜在彦、平凡社ライブラリー、一九九八年一一月）が出版されており、そこに記される朝鮮戦争に対する解釈は新しい資料の発見、世界事情の推移などによると思われるが、当時とはだいぶん違ったものになっている。「解説」の姜在彦に対する紹介と共に一瞥しておく。姜在彦は、「一九二六年朝鮮に生まれ、成年まで日本による植民地教育を受けた。日本の敗戦（朝鮮の解放）後、ソウルの東国大学政経学部経済学科第一期生として勉学のかたわら、左派政党勤労人民党創党準備委員会の学生組織で活動」、「朝鮮戦争のさなか」に「密航」という形で日本に渡ってきたそうである。「左派ではあるが、極端な左翼とは異なる」立場にあるという。朝鮮戦争については「従来南朝鮮の単独政府を主導してきた李承晩は、韓国政府の大統領になってからは、盛んに「北進統一」を唱えはじめた。だから朝鮮戦争は、韓国軍の北進に対する北朝鮮の反撃だとする金日成の宣伝を、世界の多くの人はそのまま信じてしまうようになった」（四二二頁）、「一九九〇年を前後にした旧ソ連の解体、中国の開放政策によって、北朝鮮との未公開文書や証言が公表されるにしたがって、金日成は表面的には「平和統一」を唱えながら、秘かに武力統一の準備を進めていたことが明らかになった」（四二三頁）、「六月二十五日に三八度線を突破した北朝鮮軍は三日目にはソウルに入城したが、アメリカの介入は以外に早かった。トルーマン大統領は六月二十七日にアメリカ海空軍の出動を命令したばかりでなく、三十日には東京のマッカーサー司令部に地上軍を動員する権限を付与した」（四二四頁）など、以前より北朝鮮側に対して批判的な視線が目に付く。因みに「武力統一」については例えば、『金日成著作集』5、に「戦闘準備をさらに強化しよう／―朝鮮人民軍第七四九軍部隊の軍人におこなった談話―／（一九五〇年六月五日）」という資料が見える。この談話がなされたのは、「平和的統一」の呼びかけの前々日ということになる。

二五　『松本清張全集』一七（株式会社文藝春秋、一九七四年一月）。

二六　「北の詩人」とアメリカの関係については、趙正民論文を参照のこと。

二七　「北朝鮮側の捕虜の「自白」だから相当割引くとしても、このような訓示のあったかもしれないという可能性は考えられるのである。」（『全集』三〇、三九二頁）

【付記】

本報告は二〇〇一年五月二六日「北九州松本清張研究会」における発表に基づくものです。研究会御参加の皆様には数々の貴重なアドヴァイスを頂き、それによって本報告をまとめることができました。この場を借りてお礼申し上げます。有り難うございました。

【発行者付記】

本報告中に言及される〈資料編〉及び〈校異表〉については、紙面の都合により本報告書には掲載できませんでした。研究のため入用の方は松本清張記念館までお申し出下さい。

（なかにし　ゆきこ・九州大学大学院博士後期課程）
（やました　しずか・九州大学大学院修士課程）

松本清張『北の詩人』論

趙　正民

Ⅰ　はじめに

松本清張の『北の詩人』（『中央公論』昭和三七年一月～翌年三月）は、一九四五年一〇月、日本軍が撤退した以降、三八度線を境界にアメリカとソ連の統治下に置かれる「朝鮮」を背景に、主人公の左翼詩人林和（イムファ）がアメリカのスパイ活動に巻き込まれ、やがては朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」と略す）の軍事法廷で死刑を言い渡される過程を描いたものである。この小説には、主人公の林和をはじめ、朴憲永（パクホンヨン）、李承燁（イスンヨップ）、趙一鳴（チョイルミョン）、薛貞植（ソルジョンシク）など、各人物が実名で登場しており、一九四五年前後の朝鮮半島の歴史的事情や韓国近代文学の思潮などと重なる部分も多い。また、作品の末尾には、「一九五三年八月三日～六日の四日間にわたって、朝鮮民主主義人民共和国最高裁判所特別軍事法廷で行われた朴憲永＝李承燁グループに対する裁判所記録（一部）」が掲載されているが、それの出典については以下のように記されている。

この判決文の抄録は、現代朝鮮研究会訳編『暴かれた陰謀』に拠った。同書によると、「訳出した公判記録のテキストは、朝鮮民主主義人民共和国政府機関紙『民主朝鮮』一九五三年八月五日号（起訴状）、同紙一九五三年八月七日・八日号（公判廷における被告たちの犯行陳述）、および朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』一九五三年八月八日号（判決文）などによった」とある。抽出と省略は著者の判断による――著者[一]

清張が『暴かれた陰謀』の裁判記録を土台にしていることは、小説の内容と裁判記録のそれが符合していることからも明らかである。

しかし、朴憲永ら一二人の「アメリカスパイ事件」や作品の下敷きとなっている裁判記録を巡っては、「いわゆる「スパイ事件」は、一握りの金日成一派を除いては大多数の朝鮮人は信用しない事件である。金日成一派はこの「事件」を真実のものであったように信じこませるために、その裁判記録といわれるものを朝鮮文のみならず、英文、中文、露文そして日本文などに翻訳して各国にばらまいた」[二]とする「真実の捏造」説があり、そのため「『北の詩人』の〝真実〟は、全く小説の内容と違うようである」[三]、「この作品は端的にいって、小説以前の事実関係において義憤を感じるほどでたらめで」[四]などの批判の声も上がっている。

一方、朴憲永らが粛清された六日後、八月一二日付の『毎日新聞』は、「今回の朴憲永副首相以下の除名の原因が果して発表通りの反国家的スパイ活動であったかどうかは疑問符に包まれている」、「このように大がかりな陰謀があの厳しい戦時態勢下にあって果して行われ得たかどうかは疑問なので、これは金日成首相を中心とする北朝鮮の親ソ的主流派が反対派を陥れるために実際あった一寸したスパイ事件にからませて作り上げた虚構ではないかと見る観測筋もある」と伝えている。つまり、この一連の事件を巡っては当時においても事件の捏造可能性が問われていたようである。

一つの事件を巡って複数の視点や物語が存在することは当然のことであるが、

物語を構築する際には一方の言説を排除し、他方の言説を選択するという行為が必ず随伴される。さらに、ある基準や視点によって取捨選択され、形成された物語はどのような力を持ち、どのような働きをするのかが問われなければならないと思うが、それは、松本清張の作品『北の詩人』を読む際にも同様である。つまり、清張がこの作品に取り組んだ際に朴憲永らの「スパイ事件」にまつわる複数の言説の中で、どのような取捨選択を行い、それによってどのような物語を構築したのかを検討することは、彼がどのような物語を描き、読者の私たちに何を呼びかけようとしたのかを明らかにすることにつながると考えられる。

本稿では、まず『北の詩人』を巡る言説を踏まえ、それらが提起している「歴史の真実」と清張の作品との間にはどのような齟齬があるのかについて検討したいと思う。その際、韓国で調査した文献や資料が多数引用されると思うが、しかしそれらの資料に基づいた最終的な結論は「事件の真相」を探ったり、「歴史の真実」を定めたりする方向にはいかない。つまり、現在の時点で入手可能な文献や資料と清張のそれとの間に相違する部分があるとすれば、そのずれは『黒地の絵』(『新潮』昭和三三年三月～四月)、『日本の黒い霧』(『文藝春秋』昭和三五年一月～一二月)、「金環食」(『小説中央公論』昭和三六年一月)など、戦後日本とアメリカ、そして「朝鮮」といった清張における戦後史観の文脈の中でどのように位置付けられるかについて考えてみたいと思う。

II　『北の詩人』を巡って

松本清張の『北の詩人』は、北朝鮮の裁判記録を多用していることもあって、常に「歴史の事実」、「歴史の真実」と対を成して批評されてきた。

例えば、菊池昌典の場合、「『北の詩人』は、もちろんフィクションであり、作中の林和と、実在した林和とは別人である」[五]としており、大村益夫も「これはあくまでフィクションである。(略)『北の詩人』がフィクションである以上、実在の林和と小説の林和とは区別しなければならない。この作品が事実を歪曲するものだとする韓国での非難は、その意味で当たらないだろう」[六]と述べている。そして、菊池昌典は『北の詩人』には、「日本からアメリカへとバトン・タッチされた朝鮮支配の実態と、国家権力の不気味さが塗りこめられている」とし、『小説帝銀事件』(『文藝春秋』昭和三四年五月～七月)や『昭和史発掘』(『週刊文春』昭和三九年七月～昭和四六年四月)とともに国家権力の不気味さを告発したものとしての解釈の可能性を指摘している。

川村湊は『満州崩壊―「大東亜文学」と作家たち』の「林和別伝」の中で、「小説の素材や資料こそ松本清張は明らかに北朝鮮寄り(だった?)人物から提供されたのだろう」と推測したが、しかしそれは「北朝鮮の政治的な主張をプロパガンダ」[七]するためではないとしている。つまり、『北の詩人』において「林和」がアメリカの陰謀に巻き込まれていくありさまは、昭和三五年の『日本の黒い霧』の中でアメリカ占領軍の謀略を告発したテーマ性と通じ合うものだと指摘する。これは菊池昌典の見解とほぼ同様であると言えよう。

大村益夫も「解放軍として南朝鮮に進駐したアメリカは、ソ連との対抗上、三八度線以南の左翼勢力を徹底的に弾圧するはこびとなる。アメリカ軍政庁が日本の統治機構をそのまま温存し、左翼人士の大物を次々と自家薬籠中のものにしていくありさまは、読みながら戦慄をおぼえる。これは朝鮮一国の物語ではないはずである」と述べ、緊張関係にあった米ソと終戦直後の朝鮮半島事情

との関わりを描いた作品として『北の詩人』を位置付けている。

要するに、以上の研究者は、清張の『北の詩人』を史実に基いたものとして見る一方、実在した林和と作中の「林和」は区別されなければならないと主張している。さらに、作品の解釈の可能性として、国家権力およびアメリカ占領軍の権力に対抗する作家のメッセージや終戦後の緊張した朝鮮半島の様態を描いているものとして評価する。

一方、林英樹は「「北の詩人」の真実」(『自由』昭和四二年一二月)で、「真相を知る私」の立場から清張の作品が「真相」とどれほど相違しているかを指摘しており、『北の詩人』を「捏造裁判記録の脚色」であるとしている。氏によると、「林和が日本官憲に「アカ」の理由で逮捕されたという一九三四年(昭和九年)には、朝鮮の前衛党である朝鮮共産党はすでに五年も以前にコミンテルンから除名解散されて、存在していなかった。そしてカップ(朝鮮プロレタリア文学芸術同盟)所属の文学芸術家たちも、みんな逮捕され、筆を折り、転向し、脱退してカップも実際には存在しなかった」[八]。また、作中に登場する作家の金南天や趙一鳴、薛貞植、安永達、李承燁らの身辺事項なども事実と相違しているとして批判の対象とする。さらに、林英樹によると、「朴憲永、李承燁、林和らのスパイ事件」を、朝鮮戦争の失敗により民衆の支持が朴憲永の方に赴くことを恐れた金日成一派が朴憲永や林和らをアメリカのスパイにでっち上げた、とする。

安宇植(アンウシク)も「悲劇の「北の詩人」」(『季刊青丘』第五号一九九〇年)で、やはり「事実」と清張の作品との間の相違点をあげている。右の林英樹も指摘しているように、作中の「林和」は一九三四年のカップ第二次検挙で全羅北道警察部によって逮捕、拘束されたことになっているが、実際の林和は結核のため平壌の病院に入院していたので、カップの解散と距離を置いていたということを指摘する。

林英樹と安宇植は、いずれも清張が「歴史的な事実」を歪曲した形で作品に臨んでいることを述べている。つまり、『北の詩人』は、「自明な史実」と対を成して論じられてきたと言えよう。

＊

韓国での林和に対する理解は様々であると言える。つまり、南労党系の文学者に言わせれば、彼は立派な詩人、批評家として評価される。しかし、一方では唯物弁証法的、教条的な詩を書いていた詩人として評価されたり、あるいは、「祖国」と「人民」を引き換えに甘い汁を吸った人間として酷評されたりもした。林和に対する評価の相違は、彼が越北した詩人であったため、作品をはじめ資料や文献を入手し難かった点もあるが、長い間韓国政府が林和の作品を発禁したことにも因る。しかし、林和に対する評価のレベルが様々だとは言え、清張の描いた「林和」、つまり解放前に日本帝国主義(以下「日帝」と略す)と協力していた「林和」が、解放後にはそれを隠蔽するためアメリカのスパイとなり、それの引き換えに「偽造転向契約書」を受け取ることやまた持病の結核の薬をもらうためにアメリカの権力に翻弄される姿は、やはり韓国の中でも受け入れ難いものがあったと考えられる。

例えば、一九五七年北朝鮮から韓国へ亡命した李喆周(イチョルジュ)は、韓国の綜合雑誌『思想界』[九]に一九六三年七月から一九六五年四月まで「北韓の作家・芸術人」というタイトルの連載物を書き、後に『北の芸術人』(一九六七年一月、啓蒙社)

としてまとめている。その中で氏は、執筆動機について次のように述べている。

共産主義の実生活を認識せず、その理論だけで共産主義を論じてはいけない。特にこの本を書くようになったのは、日本の推理小説の第一人者である松本清張の『北の詩人』という実名小説を読んでからである。私は林和を含めた同時代における北朝鮮の多くの作家や芸術家の共同運命を同僚の立場で紹介しなければならないと思った。一〇

つまり、氏は林和をはじめとする北朝鮮の作家や芸術家たちの理解が曲解と誤謬に纏われているといい、それを解明することを執筆の目的としている。本文の中で李喆周は多くの文人の生活や文学活動について語っているが、朴憲永、李承燁、林和などを刑場まで至らしめた経緯についても詳細に書いている。これについては次章で述べることとするが、簡単に言及すれば以下のようである。朝鮮戦争の推移が休戦会談（一九五二年）へ向かっていた時、北朝鮮出身の党員を含む世論は、南労党出身の朴憲永に傾く。そこで、金日成一派は「思想検討会」というものを設け、朴憲永一派の思想を批判し、更に粛清へ至らしめた。このような流れを紹介した後、李喆周は「以上のような権力争いの内容を知らない松本清張は、金日成一派が捏造した公判記録にひたすら頼ったゆえ、事実を歪曲した形で「北の詩人」を書き、さらに良心の呵責も感じていないのである。また、林和をアメリカの雇用間諜と描写しているが、それもまた捏造した公判記録に頼っているからである。もしも、松本清張が北朝鮮の共産党の内実や戦後の事情、そして共産党の生理を認識していたなら、このような作品は書かなかったのであろう」一一とし、事件のでっち上げ、裁判記録の捏造、「事実」を歪曲した清張の作品をそれぞれ批判する。

また、松本清張の『北の詩人』は、韓国でも『北の詩人・林和』（キム・ビョンゴル訳、一九八七年九月、未来社）というタイトルで翻訳されている。この訳本の最後にもやはり「この小説は歴史を背景にした上、実在した人物によって物語が展開されていくが、あくまでも推理小説的なフィクションであるため、事実と異なる部分があることを断わっておきたい」一二という注記が添えられている。

清張の『北の詩人』に対する韓国での反響は、「歴史の事実」を歪曲したもの、あるいはあくまでもフィクションでしか成り立たない物語というような評価であったと言える。このような議論に接すると、最近盛んに論議されている「歴史修正主義」議論が思い浮かべられる。つまり、「林和はアメリカのスパイであった」、「林和はアメリカのスパイではなかった」などを主張する議論は、「ホロコーストはなかった」、「南京大虐殺はなかった」と主張するいわゆる「歴史修正主義」の議論と性格が通じ合っているようにみえる。

自明な事実として「歴史」が存在するのではない。「歴史の事実」を記述する語り方そのものを批判するポストモダニズム的立場からすると、北朝鮮の裁判記録に記述される林和は確かに「日帝に迎合し、アメリカのスパイとして祖国を売ったもの」であり、粛清されるに値する人物である。と同時に、「立派なプロレタリア詩人であった林和が金日成一派がでっち上げた謀略により粛清されてしまった」という韓国における解釈も一つの「歴史」であるに違いない。しかし、だからと言って、筆者は各共同体が自分たちの都合に合わせた「歴史」がそれぞれ存在してもいいとは思わない。というのも、相反するイデオロギーの下で語られた各々の「歴史」は、絶対化された枠組みの中で作られるゆえ、

相手のそれを排斥しがちであるからだ。林和に立ち返って見ると、北朝鮮の公判記録や作品『北の詩人』に対する韓国での反応は、対立するイデオロギーの枠組みの中でしか林和や『北の詩人』を論じず、それは「関係性」を全く無視した閉鎖的な議論になりかねない。要するに、今までの『北の詩人』に対する批評は、双方の歴史イデオロギーを主張する政治的文脈の中で繰り広げられていたと言えよう。

以上の研究者たちの批評により、「歴史の真実」と清張の作品の間には大きなずれがあることは明らかになったが、では、両者間には具体的にどのような齟齬があるのだろうか。冒頭にも述べたように、清張における戦後日本とアメリカ、「朝鮮」といった配置図の中で『北の詩人』を論じるためには、両者間のずれがどのようなものであるのかが、まず問われなければならないと思う。次章においては、韓国で調査した文献や資料を用いて両者を照らし合わせ、そのずれについて考えてみたい。

Ⅲ　植民地下の林和

日清戦争（一八九四～九五年）と日露戦争（一九〇四～〇五年）で勝利を収めた日本が朝鮮を直接統治することになるのは一九一〇年日韓併合からである。つまり、植民地支配時代とは一九一〇年以降のことを指すが、ここでは特に、林和がカップの解散届を出し、転向したとされる一九三〇年代半ば以降の韓半島事情を簡単に言及してみたい。

周知の通り、日本の朝鮮支配の基本方針は「同化政策」というものであった。満州事変（一九三一年九月一八日）から日中戦争（一九三七年七月七日）へと戦争が拡大されるとともに、この政策はより一層エスカレートし、いわゆる「皇民化政策」となる。この「皇民化政策」の性格をコンパクトに示している文章を次に引用する。

昭和一二年の支那事変と共に半島の思想界は激しい変り方をした。そして今迄あらぬ方を向いていた所謂インテリには誠に暮し悪い時代となったかも知れないが、本当の国民として立上らうとする純真な半島の同胞にとっては本当に生き甲斐のある時代となった。すべては内鮮一体の旗の下に統一された。皇国臣民の誓詞が津々浦々に迄斉唱され、志願兵が町々から送られ、普通学校、高等普通学校等が小学校、中学校となり、とうとう氏名迄内地人と同一のものとなった。特別の事情のあるもの以外は全く内地出身と半島出身との区別がつかなくなって了った。[一三]

一九三七年一〇月に制定された「皇国臣民ノ誓詞」は、「一、私共ハ大日本帝国臣民デアリマス。二、私共ハ心ヲ合セテ天皇陛下ニ忠義ヲ尽シマス。三、私共ハ忍苦鍛錬シテ立派ナ強イ国民トナリマス。」という三ヶ条からなっており、学校では毎朝これを児童に斉唱させたという。

「創氏改名」に関する法律は三九年一一月に公布され、翌年二月に実施された。これについて、四〇年八月の『朝鮮』の「彙報」は「六月末日現在創氏は遂に百万戸を突破して百七万八千六百九〇戸に達し、（略）届出歩合は二割五分強に当る訳である。府邑面で実際に届出を受理して居り乍ら届出殺到と手不足との為まだ戸籍に記載を終ってないものは包含していないから届出の実数は右の数字を遥に越えて居る」と伝えているが、このような短期間における高い

達成率は、それがどれだけ強制力を伴っていたものかを伺わせる。

また、もう一つ注目に値するのが、「思想犯保護観察令」である。ここでの思想犯とは、いうまでもなく反日的な文章を書いたり、民族運動を行ったりして摘発された人を指す。三八年一一月の『朝鮮』は「保護観察署長会議」について伝えているが、そこでは「時局に鑑み思想犯保護観察上非転向者の転向を促進する具体的方策」や「思想犯保護観察上対象者の就職を促進する為特に考慮すべき具体的事項如何」について論議されていた。この記録から想像できることは、当時の文人や知識人は常に総督府からマークされ、監視、管理されていたこと、またこのような状況の中で彼らは行動の自由が完全に剥奪される苛酷な時代を過したことなどである。

話は『北の詩人』に戻るが、裁判記録によると、法廷で「林和」は植民地時代に日帝と協力したこと、戦後はアメリカのスパイとして活動をしたことを陳述している。まずは、植民地時代の林和について考察していきたいが、林和自らが述べている罪状を簡単に整理すると以下のようである。

① 一九三四年四月、五月にカップの幹部たちが全羅北道警察部に検挙された時に、一身上の安全をはかるため、日帝と迎合しようとした。

② 一九三五年六月下旬、京畿道警察部主任である警部斎賀と会い、本人が署名したカップの解散宣言書を提出した。

③ 一九三七年九月中旬、日帝の合法的出版機関である「学芸社」経営。

④ 一九三九年六月頃、「国民総力連盟」の文化部長であった日本人ヤナベと対談。「内鮮一体」と「国民精神」の培養に努力すると表明。

⑤ 一九三九年九月、『京城日報』に「言葉を移植する」という日本語論文を書き、日本精神を注ぎ込もうとした。

⑥ 一九四〇年六月、「朝鮮反共協会」機関紙の『反共の友』に「北韓山脈」、「泰平洞」など反ソ・反共的な内容の随筆を発表。

⑦ 一九四二年一二月頃、ブルジョア映画社である「高麗映画社」文芸部の嘱託として働く。『キミとボク』の台本を校正、『朝鮮映画年鑑』及び『朝鮮映画発達史』を編集。

まず、①と②について考察する。

カップ全体検挙は一九三四年二月、劇団「新建設」の活動が発端となり、同年一二月までカップのメンバー八〇名が連行されたが、その中で二三名が起訴される。これによってカップは完全に麻痺状態に至るが、この時期に林和は肺を病み、検挙及び起訴からは免れる。カップの書記長であった彼が起訴を免れたことについては、周りの人も多少疑問に思っていたようだ。これについて白鉄は次のように述べている。

その中でも特に林和が起訴されていなかったことについては様々な話があった。実に林和は才知のある人であった。彼は身の周りが危険な状況になると、わざと卒倒してしまうふりをした。日本の警察は林和を検挙し京城駅まで連行したが、駅の前で彼が突然に卒倒してしまい、警官は林和をセブランス病院に入院させ一人で全州に行ったという。その他にも林和に関する話はたくさんある。さらに、カップの事件があった時に、彼は先妻の李貴礼と離婚し馬山で李現郁と結婚し気楽に過ごしているなど、多くの噂が立っていた。とりあえず、このカップの事件で書記長の林和が検挙されなかったことは疑わせるものであった。一四

「流浪」（一九二七年）、「昏街」（一九二九年）など、朝鮮映画芸術協会製作のカップ系映画に出演していた林和が、「身の周りが危険な状況になると、わざと卒倒してしまうふり」をするなどの演技をしていたことは想像に難くない。しかし、「思想犯保護観察令」が制定される前ではあるが、文人への監視、管理が厳しかった時代に、林和が肺を病んでいたとはいえ、起訴や検挙を免れたことに関しては、筆者も疑問に思う。

結局、長い間危険視されていたカップが解散届を提出したのは、一九三五年五月二一日であった。カップの解散届は、当時のほとんどの部員が全州刑務所に収監されていたため、林和、金南天、金基鎮の三人が鐘路警察に提出した。これについて、六月五日付『東亜日報』は次によう に伝えている。

東大門警察署高等係は去る四月初旬から朝鮮プロレタリア芸術同盟の役員林仁植氏を数次訪問し、解散を勧告してきた。同芸術同盟はその解散を先送りにしていたが、警察側の解散要求は依然として続き、去る四月二二日に部員が集合し論議を重ねた結果、解散を決議した。二八日には代表林仁植の名義で解散届を東大門警察署高等係に提出したと言う。

林和が「日帝と迎合」しようとしたのか、そうでないのかは定かではないが、一九三四年のカップの検挙から免れていたこと、またカップの解散届を出していたことは確認できる。

③学芸社経営について。

総督府通訳の西村真太郎によって火野葦平の『麦と兵隊』が翻訳されるのは一九三九年一月である。この時期を起点とし、当時の「朝鮮」からも従軍作家を派遣しなければならないという声が上がった。

林鍾国（イムジョンクック）の『親日文学論』の「皇軍慰問作家団」によると、従軍作家団派遣問題は文章社の李泰俊、学芸社の林和、人文社の崔載端の三人を中心に論議されたという[一五]。一九三九年三月一四日、府民館における会合では、九人の実行委員―李光洙、金東煥、朴英熙、李泰俊、林和、崔載端、李寛求、盧聖錫、韓奎相―が選抜されるが、後に彼らは三人の「慰問者」―金東仁、朴英熙、林学洙―を決定する。

このような記録からすると、林和が学芸社の代表であったことや「皇軍慰問作家団」の派遣にも参加していたことなどが分る。

一方、当時の図書情報誌と考えられる『文献報国』をみると、学芸社から書籍が出版されたのは一九三九年七月からである。林和が編集した書物としては『現代朝鮮詩人選集』、『朝鮮民謡選』などが確認できるが、しかしこれらの本が「日帝に迎合」する内容を持っているとは考えられない。また、一九四一年一月一五日、国民総力連盟の文化部長矢鍋と対談した際、矢鍋が「ところが、あなたがしている出版事業というものはどんなものですか」と聞くに対し、林和は「去年はじめたばかりですが、例えば朝鮮の古書籍を復刻する仕事などをしています。漢文関係のものもあり、東洋文化研究ということも関係すると思います」と答えている。ここでの「出版事業」は、学芸社のことを指すと思うが、その内容は「朝鮮の古書籍を復刻」したり、「東洋文化研究」に関するものなどであり、決して林和を死刑に致らせる程のものではないと考えられる。

④一九三九年六月頃、「国民総力連盟」の文化部長ヤナベと対談したことについて。

林和は法廷で一九三九年六月頃にヤナベと対談したと陳述している。が、ヤナベとの対談は一九四一年一月一五日に行われたものであり、またそれが掲載されたのは一九四一年三月雑誌『朝光』においてであった。その内容は「連盟と文化団体加盟問題」、「文化の職域奉公」、「政治と文化」、「朝鮮文化の特殊性」、「言語問題」、「農村娯楽について」などの六つの項目となっている。

しかし、この対談の中で特に林和が総督府の政策を擁護するような発言をしているとは思えない。「連盟と文化団体加盟問題」では、「総力連盟」の組織構成の問題が議論されており、「文化の職域奉公」、「政治と文化」で林和は、文化が国家に奉公することは政治や経済、軍事のそれと性格が完全に異なること、小説を書くように銃を撃つことはできないし、銃を撃つように小説を書くことはできないことを披瀝する。文化の独自性を確保しようとするこのような林和のスタンスは、「銃撃の中にも詩はある」とする文化部長の矢鍋のそれとは確実に相反するものだと言える。そして、「朝鮮文化の特殊性」においては、「朝鮮の生活、言語を考慮すべきだが、今は銃後のことを考え、諸文化もそういう方向にもっていこう」とする矢鍋に、「朝鮮文化に執着するわけではないが、特殊性は現存するものであり、将来の見地からすれば至極重大な問題」であると応酬している。「言語問題」に関して議論する際にも、日本語を指して「国語」と称してはいるものの、朝鮮語の必要性についても述べており、「文化の健康性」、「農村娯楽に対して」では、朝鮮の郷土文化、農村文化を残していくことを主張している。

以上、矢鍋との対談内容を簡単に紹介したが、日本の大政翼賛会とその性格とを同じくする総力連盟の発足にあたって、林和は政治や軍事から独立した文化の領域を確保しようとしており、また「内鮮一体」が叫ばれる中、朝鮮文化の特殊性が現存すること、そしてそれを残していこうとする意向を明確にしていると言える。公判記録には、これらの内容が林和の陳述として、「これより朝鮮人文学者たちが時局に協力し、「内鮮一体」の強化と「国民精神」の培養に努力するという決意を表明しました。この時の会談においては、同報道部のカメラマンも参加し、その会談の場面を撮影し、それを雑誌に発表するようにさせ、多くの文壇活動家と朝鮮人民をして日帝のため忠実であるよう誘いました」と語られるが、筆者は対談記録と公判記録との間の齟齬を感じざるを得ない。

因みに、対談内容は資料三に訳してあるので、詳細なことはそちらを参照していただきたい。

⑤一九三九年九月、「言葉を移植する」という日本語の論文を発表したことについて[一六]

一九三九年九月『京城日報』に発表したとされる林和の「言葉を移植する」は、実際一九三九年八月一六日から二〇日（一九日休）まで連載されたものである。また、タイトルとして記されているのは「言葉を移植する」ではなく、「言葉を意識する」である。「言葉を意識する」は四回にわたって掲載されるが、そこには毎回「『よき言葉』と『よくない言葉』」、「作家の心と表現への意思」、「完く美しき表現と作家心理」、「表現手段として精神標識」というサブタイトルが付されている。

この連載を一つの物語として読んでいくと、まず「『よき言葉』と『よくない言葉』」の中で、林和は「他人が読むに適し、又自分が表現するのに十分で、且つ美しかったら、それは文学にとって良き言葉である。反対に読むにも表現にも不適で、不充分で、美しくなることが出来なかったら、それは当然不自然

な言葉であり、良くない言葉である」と定義する。そして、「作家の心と表現への意思」では、「作家にとって、最良の言葉としての一番先きの条件は使いよいということである。使いよい言葉でなければ、表現の完璧さも、美しさも期待できないからだ。（略）言葉に対して、作家はただ利己的であり、功利的である」とする。つまり、林和は「よき言葉」を抽象的に「他人が読むに適し、又自分が表現するのに十分」な言葉であるとしており、また、言葉に対して「利己的」な作家は表現の完璧さと美しさのために、「使いよい言葉」を使わざるを得ないと述べている。もちろんここで林和が抽象的に「よき言葉」、「使いよい言葉」としているのが、「朝鮮語」を指しているとは思えない。すでに三五年五月二一日、カップの解散届を提出し、転向したとされていた林和が三九年八月一六日の時点で改めて「朝鮮語」の復活を主張しているとは考えられないからである。また、何より林和が「日本語」で文章を書いていること自体、「よき言葉」、「使いよい言葉」＝「日本語」という等式に説得力を与えるものと言えよう。さらに、作家が言葉に対して「利己的」かつ、「功利的」たるべきものとすることは、自分を含む朝鮮の作家たちが「日本語」を使うことにある種の免罪符を与える行為として読むこともできる。

続けて「完く美しき表現と作家心理」では、「如何に完璧に、如何に美しく表現を完成し得るか？」に悩む作家の心理は、「実に冷徹なもの」であるとする。ここで林和は「ドイツの職人が、フランスの武器を無中になって慥えている瞬間」を喩えにし、「技術というものは、何時も倫理を拒否するものである」、「この製作の心理、これを理解する事なしに吾々は作家達の言葉に対する意識を理解する事は出来ない」と言い、より完璧で美しい表現を追求する作家は、常に冷徹で倫理と距離を置くべきであることを指摘する。歴史的文脈からすると、ここで林和が強調している「冷徹」さや「倫理の拒否」は、「朝鮮語」から冷徹であること、「朝鮮語」との決別を暗喩するものとして読み得る。

最後に、「表現手段として精神標識」では、「表現がそうである如く、表現の手段としての言葉は、精神の標識ではない。殊に、一歩進んで言葉を何か国境標識とでも思って騒ぎ立てている論議は、一言も早く誠実さを取り返す必要がある。（略）要点は、何も文学精神は、また飽くまで文学の精神であって、ポリスのドキュメントではない」と述べ、どんな言葉で表現しようと、言葉は精神の標識と直結するものではなく、まして国家標識と直結するものではないことを強調する。要するに、「日本語」で表現された文学は、特別に日本の精神の標識でも、日本という国家の標識でもなく、単に「文学の精神」の標識でしかないので、言葉にさほど敏感でなくてもよいのではないかというように解釈できよう。

以上の内容は、④で検討した矢鍋との対談のそれと性格が異なるものと言える。日中戦争が長期化していた三八年一一月に「東亜新秩序」声明が、四〇年七月には「大東亜共栄圏」声明が発表され、当時朝鮮においても「皇民化政策」が強制力をもって進行されていく真っ只中、総力連盟文化部長の矢鍋との対談の中で、林和は大前提としての「東亜共同体」を認定しながらも、朝鮮の文化的特殊性を確保していこうとした。

また、四〇年七月『文芸』の「現代朝鮮文学の環境」という文章の中でも、林和は「吾々はただ現代朝鮮文学が、その過去の端初に於いて、又現代の領域に於いて、共に固有な自分だけの環境の中にいると言う事を、朝鮮の作品を読む人々が理解して呉れれば、自ら足りるだけである」[一七]と書いており、やはり彼は朝鮮文学の「固有な自分だけの環境」を主張する。

しかし、矢鍋との対談が行われる半年前の『京城日報』には、抽象的な書き方ではあるが、明らかに朝鮮総督府の政策と符合するような発言をしているのである。この落差はどこに因るものだろうか。

一九四〇年七月の『文芸』は「朝鮮文学特輯」号であるが、白鉄は「朝鮮の作家と批評家」の中で林和を以下のように紹介する。

林和は批評家であるが、あの思潮に生きて来た点では兪鎮午や李孝石よりも本格的な立場に立って居た人である。だから、近年の転向期にはそれだけ急転廻を要求される立場でもあったが、しかし彼は別に目につくような転向の声明をせずに、我々の気づかないうちにいつの間にか当り前の文学市民になっていた。いわば群衆の中で抑されもまれているうちに自分も知らない間に左翼詩人と思う人はいなく、極めて善良な一文壇市民で通っているが、それで結構いいわけである。と言うのは、彼は別に転向を表明したことはないが、純粋文学に転向を表明した他の人たち以上に、彼は今日純粋に文学の畑で仕事しているからである。[一八]

一九三六年、思想犯保護観察法が公布されたことからも想像できるように、林和のような文人は思想の転向を強いられていた。白鉄が語る「彼は別に目につくような転向の声明をせずに、我々の気づかないうちにいつの間にか当たり前の文学市民になっていた」の部分からは、苛酷な時代に対する林和の処世術が伺えるが、『京城日報』の連載もその延長線上にあるものではなかったのかと考えられる。と言うのは、『京城日報』は、『毎日申報』（一九三八年『毎日新報』と改名）と共に日本人の社長が経営していた新聞社であり、また朝鮮総督府の準官報的な新聞でもあった。よって、ある程度は『京城日報』の社旨に合わせたものを書かざるを得ない状況であったと考えられる。また、朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配（下）』によると、「日本語を理解する朝鮮人が一九三八年には全人口の一二・三八％であったのが、一九四三年には二二・一五％に増加」していたという[一九]。つまり、この時期の朝鮮では朝鮮語の代りに日本語が強要されつつあったが、林和は当時の文人を代表して「国語普及運動」を広めるよう強いられていた可能性も考えられる。

三九年八月一六日から二〇日まで『京城日報』に連載された「言葉を意識する」は、後の林和をして「一九三九年九月には、「言葉を移植する」という題目の日本語論文を直接『京城日報』に発表して、朝鮮人作家に日本精神を注ぎこもうとしました」と語らせしめるものになる。しかし、「言葉を意識する」の前後に発表された彼の文章を参考にする限り、『京城日報』のそれを額面通りに受け入れるには再考の余地がある。むしろ、「言葉を意識する」の内容と矢鍋との対談のそれの間には大きな落差があるにも関わらず、彼に死刑が言い渡されたことを考えると、北朝鮮の苛酷な裁判性格を感じざるを得ないのである。

⑥「朝鮮反共協会」機関紙『反共の友』に「北韓山脈」、「泰平洞」など、反ソ・反共的な内容の随筆を発表したことについて。

現段階では、これに関するものが確認できていない。今後の課題としたい。

⑦ 映画「キミとボク」の校正、『朝鮮映画年鑑』及び『朝鮮映画発達史』を編集したこについて。

林和が「朝鮮映画文化研究所」の嘱託として勤務していたことについては、一九四二年からであるとする説と一九四四年からであるとする説がある。とに

かく、映画法が公布されるのは一九三九年四月五日であるので、林和は厳しい検閲制度の下でこの仕事についていたと言えよう。この時期の朝鮮映画事情を説明している資料として、一九四二年一月の『朝鮮』に掲載されている池田国雄の「半島の映画界を語る」を引用したい。

次に昭和一六年に於ける検閲室を通じて見たる映画の動きに就て触れて見る。

（略）映画の内容の点からいえば当局がその製作内容に対して事前検閲等に依って積極的指導を行っている関係もあって、著しく良心的にありつつあることは争えない事実であるが、その反面又新体制映画は一般的に面白くないという非難が多い。（略）こうしたあらゆる困難な条件の中に於て新体制映画として、然も娯楽としての条件を備えた数本の映画が現れた。即ち①馬（東宝映画・四月）②潜水艦一号（日活映画・六月）③愛の一家（日活映画・七月）④指導物語（東宝映画・一〇月）⑤航空基地（松竹映画・一一月）⑥土に生きる（東宝映画・一一月）⑦君と僕（軍報道部・一一月）⑧朝鮮農業報告青年隊（総督府制作・一二月）⑨元禄忠臣蔵（松竹映画・一二月）（略）その中でも高麗映画の『家なき天使』と軍報道部制作の『君と僕』はどちらも問題作となった。[一〇]

以上の引用からは、総督府が積極的に製作内容や事前検閲に関わっていたことが分るが、池田国雄は総督府の趣旨を反映しつつ、娯楽的な面も備えているものとして「君と僕」をあげている。

では、映画「君と僕」はどのような性格をもっていたのか。

朝鮮総督府と朝鮮軍司令部の援助を得て、朝鮮志願兵訓練所および鉄道局、日本新興キネマ社の協賛で制作されたこの映画は、天皇のため、聖戦のため、朝鮮と日本の青年が兄弟となり戦争に臨むという筋書きのものである[一一]。企画、監督は許泳（日夏英太郎）が担当し、朝鮮青年役には沁影が、日本青年役には韓国出身の歌手永田鉉太郎（韓国名金永吉）が演じた。その他、徐月影、金信哉、文芸峰、李香蘭、小杉勇、三宅邦子、朝霧鏡子等が出演したこの映画は、軍国映画の中で最も大規模なものとして、朝鮮軍報道部の命令により、朝鮮のみならず日本でも封切られたという。

朝鮮総督府と朝鮮軍司令部の援助、朝鮮志願兵訓練所および鉄道局、日本新興キネマ社の協賛で制作されただけに、映画の内容は「皇国精神」を鼓舞するようなものであったことは想像に難くない。ところが、「君と僕」の制作において林和が関与したのは、企画でも監督でもなく、シナリオの校正という役割に止まっている。これは、同時期にカップから転向した朴英熙が「志願兵」（一九四一年）という国策映画のシナリオを手がけていたこととは対照的と言える。

また、『朝鮮映画年鑑』と『朝鮮映画発達史』を編集したことについてだが、公判記録には「一九四三年一月より一九四四年十二月までは「朝鮮映画文化研究所」の嘱託をして、反動的内容の『朝鮮映画年鑑』及び『朝鮮映画発達史』を編集し、朝鮮文学及び映画の発達のためには当然日帝と合同するのが正当であるということを強調しました」と記されている。「朝鮮映画文化研究所」は朝鮮映画製作株式会社の付属機関であり、そこで林和が以上の書籍の編集に関係していたことは、それだけで「親日」的な行動として捉えられるものがあるかもしれない。残念ながら、『朝鮮映画年鑑』や『朝鮮映画発達史』の現物を確認できなかったため、その内容については触れられないが、この時期の林和は「別に目につくような転向の声明をせずに、我々の気づかないうちにいつの

間にか当たり前の文学市民になっていた」形で身を処していたことは確かなことだと言える。

以上、北朝鮮の法廷で林和が語る自分の罪状を今日確認可能なものに照らし合わせてみたが、法廷で語る林和のそれが、果して彼自身を死刑にまで致らしめるほどのものであったかどうかについてはまだ疑問が残る。勿論、現在の時点で入手可能な資料や文献は限られており、それらに基いた筆者の記述も「事後」と「外部」から出発している。従って、植民地時代の林和、または入北以来の林和を語る際、「当時は日帝の苛酷な時代であっただけに、林和は最低限の転向をせざるを得なかった」とか、「林和が時局に協力したことは、李光洙や金龍済らの協力ぶりと比較すれば、まだましだ」という相対的な評価になりかねない。このように林和を当時に還元させ、相対的にみることは、彼の「歴史」を肯定的に評価し、肯定的に価値付けてしまう恐れがある。

しかし、北朝鮮の公判記録には「出来事」の前後の文脈が完全に省略され、「出来事」のみが強調されていると感じさせるものがある。また、清張が参考としている公判記録は、韓国で確認した『南労党研究資料集』(金南植編、高麗大学出版部、一九七四年)のそれと相違が多く、本章で確認した通り、初歩的なミス—例えば、対談記録の年月日の間違いや、記事のタイトルの間違いなど—も幾つか見られる。それ故、裁判記録の捏造説も浮上したかもしれないが、次章では入北以来の林和やいわゆる「スパイ事件の真相」および裁判記録に関する言説について検討していきたい。

Ⅳ　入北以来の林和について

清張の『北の詩人』には、林和が三八度線を越え入北した(一九四七年一一月頃と推定)以降のことについては空白となっている。そして場面は、物語の時間軸が飛躍した一九五三年八月、北朝鮮最高裁判所に移る。そこで林和は日帝に迎合したこと、アメリカのスパイであったことを認め、死刑を言い渡される。

越北以降の林和については、残された資料が少ないため、不明となっているところが多い。その中でも参考になるのは、李喆周の『北の芸術人』(一九六七年一月、啓蒙社)や李基奉(イギボン)の『北の文学と芸術人』(一九八六年二月、思想社会研究所)であろう。特に、李喆周の『北の芸術人』には、松本清張の作品『北の詩人』が直接言及されており、執筆契機として「特にこの本を書くようになったのは、日本の推理小説の第一人者である松本清張の『北の詩人』という実名小説を読んでからである。私は林和を含めた同時代における北朝鮮の多くの作家や芸術家の共同運命を同僚の立場で紹介しなければならないと思った」[三]としている点が注目を引く。

李喆周は一九二五年九月二六日に北朝鮮の海州市で生まれ、黄海道連盟文化部長、海州市党宣伝煽動部長、黄海人民報副主筆、国立出版社文学芸術部長などを経て、一九五七年に韓国に亡命して以来、「反共言論」に従事している人である。彼自らが記したと考えられる「筆者略歴」には、幾つか特異な部分がある。例えば、「四六　北傀職総黄海道連盟文化部長」、「五一　北傀内閣中央指導幹部学校卒業」、「五六　北傀平壌市マルクス・レーニン主義夜間党大学卒業」など、「北朝鮮」のことを「北傀」と表記していることがそれである。「北傀」とは「北韓傀儡集団」の略字として、韓国では北朝鮮のことを警戒する旨

を込めて称する時に使われる。他にも、「五七　自由大韓へ越南」、「六一　以後反共言論に従事」などと記されているが、以上の表記が李喆周自身の政治的転向やイデオロギーを反映していることは明らかである。

このように、本人の政治的立場やイデオロギーを明確に示す傾向は、越北した人にも越南した人にも見られるものである。例えば、一九五七年、北朝鮮の外国文出版社が出した『私はなぜ南朝鮮からとびだしてきたか』には、韓国の事情が以下のように語られている。

北朝鮮の同胞を『敵』につくりあげて毎日のように『北進』大演習をおこなう『国軍』の生活――人を殺すときに手がふるえるようではだめだとほざいたアメリカ人の顧問の訓示……私はこの絶望的な生活の回想を頭から払い落そうと頭をふった。（略）それからまた幾日かがたった去る五月二二日に、わたくしは、わたくしの連絡兵であった柳義鐘と安在満とともに生地獄からぬけでて義挙入北に成功したのである。そして、げんざい、わたくしはおおくの友とともに、喜びで胸のときめく新たな生活をいとなんでいる。[二三]

つまり、朝鮮戦争の休戦後、韓国と北朝鮮はお互いの政治体制を誹謗し、異なったイデオロギーを主張するなど、厳しく対抗していた。『北の芸術人』や『北の文学と芸術人』を書いた両者は北朝鮮から亡命した人であり、この本が出版されたのも南北関係が緊張していた時期においてである。よって、その内容がどれくらいの信憑性を持つのかは分からないが、彼らの本が韓国のイデオロギーを色濃く反映していることは間違いないだろう。このような背景を認知した上で、李喆周の『北の芸術人』や李基奉の『北の文学と芸術人』が越北以後の林和をどのように証言しているのかを見ていきたい。

＊

一九四七年一一月、入北した林和は海州（ヘジュ）第一印刷所で南労党機関紙『努力人民』を編集、それをソウルに送るなどの仕事をしていた。その翌年、北朝鮮では政権樹立を控えて、韓国から左派が入北したり、南労党が北労党に回収されたりするなど、共産勢力に地殻変動が起きる。この時、林和は海州から平壌へ移るが、朴憲永や李承燁を支持する文学路線を堅持する。

一九五〇年六月二五日、朝鮮戦争が勃発するが、同年六月末に林和はソウルを訪れる。しかし九月中旬からはじまった国連軍の反撃によりソウルが奪還されたため、彼は再び三八度線を越え北に帰らざるを得なくなる。この際、林和は南に残した娘の恵蘭（ヘラン）を思いながら、「お前は何処に」という詩を書く。この詩は後に、北朝鮮文学の社会主義的リアリズム原則に背いた作品とされ、粛清理由の一つとなる。これについては、後に詳しく扱うことにしたい。

五一年、中共軍の参戦と国連軍の退却により、人民軍は平壌を奪還するが、この時の平壌は爆撃や砲撃で完全に崩壊されていた。疲弊した北朝鮮では朝鮮戦争を仕掛け、勝利を収め得なかった金日成一派への批判が漏れはじめた。さらに五二年、板門店で休戦会談が本格的に進むにつれ、金日成一派は敗戦責任の追及や政権転覆の危機を感じざるを得なくなった。

当時の北朝鮮では金日成を支持するソ連系の勢力と朴憲永を中心とする南労党出身の勢力、また中共出身の勢力が伯仲していた。金日成一派はソ連軍司令部の勢力を背負っていた。だが、党の宣伝や煽動を担当していたのはほとんど

南労党出身の人であったし、朴憲永を筆頭とする南労党は大勢の人から支持され、維持されていたのである。よって、金日成一派は朴憲永らの南労党勢力を牽制せざるを得なかったが、そこで彼らは南労党の主要人物を粛清するためのプランを練る。すでに一九三四年から三六年にわたってのソ連では、スターリンが独裁政権の基盤を堅くするため、反党・反国家暴力団体の結成、暗殺陰謀、外国スパイ活動などの罪状を捏造して、一〇月革命の先頭に立っていた「ボルシェビキ同志」を粛清した事件があった。金日成はこの事件を手本として、朴憲永一派の粛清計画を進めたが、それはまず朴憲永の下で活動していた文学者を批判することからはじまった。

一九五三年四月、金日成参謀部は当時の文芸総中央委員長であった韓雪野（ハンソルヤ）らと連係し、金南天や林和らの作品を批判することを命令した。韓雪野は出版検閲指導局の厳浩爽（オムホソク）に中央党の方針を伝え、林和、金南天、李泰俊らの作品を批判するよう指示し、その後、厳浩爽は「典型性の幾つかの問題」という批評文を発表する。彼は林和、金南天らの作品を取り上げ、社会主義的リアリズムを基本軸として、彼らの諸作品を批判した。

まず、彼は金南天の「蜂蜜」を取り上げる。金南天の「蜂蜜」は、激しい戦争の中、一人の人民軍が重傷を負ってしまい戦場に残されることになるが、あるお婆さんから蜂蜜を飲まされるなどの心温かい看病を受け、元気を取り戻し、再び部隊に帰ることができるという筋の小説である。この作品が批判された理由としては、社会主義的リアリズムと程遠い自然主義作品であること、部隊が重傷を負った人を取り残したまま戦闘に行ったという描写は、人民軍隊の同志愛を侮辱するものであること、偵察兵が故郷を考えながら死を迎えることは哀傷の気分を鼓舞させるものであることなどが上げられている。

また、厳浩爽は林和の詩、「お前は何処に」や「白雪を赤く染めたわが血の上に」などをも批判する。これらの詩については、日本語訳を資料五にあげているので、そちらを参照していただきたい。

朝鮮戦争勃発時、人民軍がソウルまで下ったのは一九五〇年六月二八日のことである。林和がソウルを訪れたのは五〇年六月三一日頃であるとされているが、ソウル生まれの彼が故郷の地を踏んだのも束の間、同年九月からはじまった国連軍の反撃により再び北朝鮮に帰らざるを得なくなる。この時、林和はソウルに残した娘の惠蘭を思いながら「お前は何処に」を書く。

厳浩爽がこの詩を批判している部分は次のところである。

半白髪の
父親を想い
風吹く山頂にいるのか
心が紙のように薄く
何時も心を引き裂かれていた
母親を想い
黄昏れる野原に立ったのか

厳浩爽は、参戦している娘を想い、焦燥にかられる父親と「心が紙のように」惰弱な母親を詠うことは、銃後の人民を侮辱することだとした。また、勝利を堅く信じる人民軍がこの詩を読むと、故郷や親のことを思い出して戦意を失う恐れもあることを指摘した。

しかし、林和はこの詩の中で「わずかな土／わずかな陣地でも／血で以って

守りきれ／一口の水／一粒の稲でも／仇に与えないために／あなたの全力を尽くせ／仇が滅び私たちが／勝利するまで戦え」と、娘に積極的に参戦することを注文している。むしろ戦意を奮い立たせているように感じられるこの詩を、厭戦気分を促すものとする厳浩爽の評価に対しては筆者も理解に苦しむ。

このような厳浩爽の評価は、「白雪を赤く染めたわが血の上に」においても同様である。タイトルの下に「一九五〇年一二月二五日黄海道新渓附近六〇二高地戦闘で仇の火点を体で押さえ戦死したキムチャンゴン同志のために」と記されていることから、この詩は戦死した人民軍を称えるために書かれたものと見られる。

しかし、厳浩爽は「思い出してくれ　その遠い故郷に／寂しい一人の母が／生きていることを……／そして／母の息子は／母の言葉の通り／勇敢に戦死したと／伝えてくれ／勇敢に戦い／我らは勝ったと／悲しむ彼女を／慰めてくれ」という箇所などについて、戦死した英雄の母親を誰一人世話していないことを強調している、これは銃後の人民に絶望感や厭戦気分を助長するものであると評価した。

以上のように、林和や金南天らの作品は、北朝鮮の文学方針である社会主義リアリズムから離脱した自然主義作品と評価され、後には林和にして「刑法第七十八条および刑法第六五条一項によって死刑、刑法第七十六条二項によって死刑、刑法第六十八条によって死刑をそれぞれ量定し、刑法第五十条一項によって、刑法第六十八の死刑に処する。かれに属する全財産を没収する」という判決を下す原因となった。

＊

厳浩爽の批評文は入手できなかったため、ここでは李喆周の『北の芸術人』や李基奉の『北の文学と芸術人』を参考にして論じることしかできなかった。しかし、一九五七年九月、北朝鮮の外国文出版社から出された『解放後の文学』には、林和の「お前は何処に」や「白雪をあかくそめたわが血のうえに」、金南天の『蜂蜜』などの諸作品について「いずれも朝鮮人民の革命意識を麻痺させ、敵どもへの投降と屈従を説教し、哀愁と悲願、絶望と堕落のみちへ人びとの感情を引きずりこむなど、その内容は、反動的ブルジョア思想を人民のなかに扶植し伝播する目的につらぬかれている」[二四]と酷評しており、また、林和、金南天らが刑場に至るまでのゆくえを説明している部分がある。以下に紹介する。

金日成同志の『作家・芸術家にあたうる書』がわが国の作家たちに思想・芸術性の豊かな文学作品を創作するうえで指針となったとすれば、一九五二年十二月にひらかれた朝鮮労働党中央委員会第五回総会での金日成同志の報告『朝鮮労働党の組織・思想的強化はわれわれの勝利の基礎である』は、わが文学・芸術分野にもぐり込んだブルジョア・イデオローグ、分派主義者らとの假借のない闘争をくりひろげ陳列内の純潔性を保証しわが文学のリアリズムの伝統を敢然とまもりぬく思想闘争を展開するにあたってその烽火となったのである。

金日成同志は報告のなかで、党の組織的強化のための諸対策、とくに自由主義や分派主義の残滓との闘争を強化する問題、党の思想活動を強化する問題、党員の党性をたかめるための諸対策など闘争の重要任務を提示し、とくに文学芸術総同盟内にもぐりこんだ分派分子の反党的行為を指摘してつぎの

ように言った。

『いま文学芸術総同盟内にひそんでいる、南朝鮮出身だとか北朝鮮出身だとか、または誰それは何何のグループに属していたとかをあげつらい思想的統一を妨げている。狭隘な地方主義・分派主義思想の残滓とのきびしい闘争を展開し、文化人たちのなかにいる分派主義分子どもに打撃をあたえると同時に、祖国が難局に当面しているこんにち、党と祖国と人民のためにすべてをつくす崇高な思想を堅持して、総力をあげて祖国解放戦争の勝利のためにたたかわなければならない』

文学・芸術分野ではこの報告精神に立脚して熾烈な思想闘争を展開し、この闘争過程で林和、李泰俊、金南天など文学・芸術分野にひそんでいた分派主義者を白日下にバクロした。林和を筆頭とするかれら分派分子――ブルジョア作家らは、文学芸術総同盟を内部から瓦解(ママ)させ自分らのブルジョア反動文学路線を組織的に保障し得る分派の団体たらしめるために、陰険なたくらみのもとに、まずわれわれの堅実な作家たちを中傷し誹謗し迫害してきた。かれらは文学芸術総同盟内で占めた地位を悪用して、われわれの賢実な作家らのすぐれたリアリズム文学作品の出版を妨害し、新人たちの進出をさまたげた。

かれら分派主義分子どもはこうした組織的な破壊工作だけでなく、アメリカ帝国主義者や李承晩売国奴一味に反対してケツキした朝鮮人民を思想的に武装解除させるために、自分らの作品を通して、反動的な腐敗したブルジョア・イデオロギーを宣伝し、わが文学の高貴な伝統であるリアリズムを抹殺するために自然主義と形式主義を動員したのであり、文学の階級性と党性を抹殺するために反動的な『民族文化論』を振りかざして反党的で反人民的な犯罪行動にでたのである。

しかし党の正しい指導と全作家の假借のない闘争によって、林和一味の凶悪な策動はあますところなくバクロ粉砕された。

林和、李泰俊、金南天一味が粛清されたことによって、わが国の文壇は、その思想・意志の統一がいっそう強化され、創作活動がよりいっそう活発になった。林和一味の粛清は、いかなる反動的潮流であれそれがわが文壇でながいあいだ余命をたもつことは不可能であり、いかなる反動的たくらみであれ、それがわが文学のかがやかしい伝統を抹殺し得ないしわが文学から確固たる党性を去勢することはできないということを如実に立證した。二五

引用が長くなってしまったが、以上の記述は、林和、李泰俊、金南天らが分派主義、ブルジョア反動文学路線を歩んだ作家、さらにはアメリカ帝国主義者や李承晩売国奴一味と結託した反動分子という罪状で、一九五三年八月六日に死刑を言い渡されるありさまを確認させてくれるものと言える。

V 「スパイ事件の真相」および裁判記録に関する言説について

越北以来の林和が北朝鮮共産党の権力争いに巻き込まれ、最後には刑場で死を迎えたことについてはⅣで述べた。このような朴憲永、李承燁、林和らの「スパイ事件」を、事件当時の韓国や日本はどのように見ていたのだろうか。

まず、韓国の『朝鮮日報』から見ていきたい。

朝鮮戦争が休戦を迎えるのは、五三年の七月二七日のことである。翌月八月一五日は終戦記念日（韓国では「光復節」と言う）であるが、その日の『朝鮮

日報』一面には「共産再侵に対備しよう、弛弱な精神は六・二五を呼ぶ」という見出しが見られる。記事の主な内容としては、「第二次世界大戦の終戦により、日帝の支配から解放され、美しい国土を取り戻すことができた。しかし、その後、新たな侵略者である北朝鮮の攻撃に遭遇したわけだが、休戦とはなっているものの、彼らが再び侵略しないよう、国民は団結せねばならない」ということが強調されている。つまり、朝鮮戦争は「休戦」という形で一区切りをつけたので、北と南は相反するイデオロギーを主張するまま、三八度線を境に固定されてしまったと言える。

休戦して間もない五三年八月六日、いわゆる「スパイ事件」の公判は行われる。この事件が『朝鮮日報』紙上に報道されるのは、八月一〇日からであるが、同紙一〇日付の紙面には「朴憲永等に死刑―起訴理由に「利敵行為」という大きな見出しが見うけられる。『朝鮮日報』は、ソ連のタス通信の報道を踏まえて、「起訴された朴憲永ら一二人は北韓傀儡集団の裁判結果、死刑の宣告を受けた」と伝える。また、韓国政府は即座に処刑された人物の確認に取り組んだこと、つまり一二人のいずれもが朝鮮戦争の前に越北した南労党出身であることを確認した上、韓国に残った共産党員との連係可能性について調査を進めることを報じる。以下は新聞からの引用。

一九五三年八月一〇日『朝鮮日報』「李鉉相帰順の工作―治安局、新事態へ対処」七日の平壌放送が報道した、朴憲永ら一二人が反逆の容疑で傀儡の高等検察総長李成雲によって起訴され、粛清されたという情報は、八日内務部治安局の関係幹部級の動きを一段と活発化させた。粛清の対象となっている人のみならず、すでに粛清されたと見られる一二人は、みな朝鮮戦争以前に越北した、いわゆる南労党系に属する分子であり、また、智異山に本拠を置き、後方を攪乱する敵共匪らと直接緊密に提携してきた者も、今回に粛清されたとみられる。よって、治安局では、朴憲永のかけがえのない部下であり、現在南韓遊撃隊の総司令官である李鉉相などの残匪に、この折りに銃を棄て、下山、帰順することを勧誘する、ある種の工作を試みるだろうと一関係者は示唆している。よって、残匪掃討と共に共匪に対する宣撫工作の成果が大いに期待されている。

「スパイ事件」に関する具体的な記事は、同月一二日の社説「北韓集団の内訌」、同月一三日「共産独裁者の末路（一）刑場に連れられた朴憲永をみろ」、同月一四日「共産独裁者の末路（二）朴憲永粛清は三巴戦の初の餌食」、同月一八日「共産独裁者の末路（三）次に粛清されるのはどの派になるのか」などと続く。

八月一二日の社説は、「スパイ事件」の発端を北朝鮮における権力争いに因るものだとし、北朝鮮内にソ連と中共の勢力が存在する限り、韓国は油断してはならないと注意を促す内容になっている。また、同月一三、一四、一八日に連載される「共産独裁者の末路」では、事件の内幕や捏造可能性が言及されている。連載の一部を引用する。

まず、朴憲永がアメリカの軍事諜報機関の頭株であり、大韓民国と内通していたことが、彼らの罪名であるが、これは全く信じ難いものである。この事件は、独裁政権を強化し、反対派閥をなくすため、彼らにいわゆる反逆という罪を被せてしまったことにすぎない。これは、ソ連の「マレンコフ」がソ

連共産党のために三〇年間努力してきた「ベリヤ」を、アメリカと内通し、ソ連政権の転覆を試みたという反逆の罪を被せたことと同様である。

この連載では、「スパイ事件」は、金日成一派の独裁政権を維持するための謀略であって、全く事実無根であることが終始一貫強調されている。しかし、連載の論点は、事件の捏造可能性を説くところから、北朝鮮の政治体制やイデオロギー批判へと移動する。その例としては、朴憲永に関する記述があげられる。つまり、連載の筆者は朴憲永について異例なほど好意的な評価をしている。朴憲永は植民地時代から朝鮮共産党の組織に荷担していた人物として、解放後も朝鮮共産党の再建に着手し、四六年には南朝鮮労働党を創立させた。四六年五月の精版社偽造紙幣事件や同年一〇月の大邱暴動などは、朴憲永の指導によるものだとされ、彼は常に韓国政府やアメリカから警戒されていた。にもかかわらず、連載における朴憲永は、「現在北韓傀儡集団内部において共産党のために今まで最大の忠誠を捧げてきた」、「解放される日まで日帝の目を避けながら秘密組織を設立させて以来、彼の共産主義運動は三〇年間の長い道のりであった」、「朴憲永の性格からして、彼は最後まで自分の仇が他ならぬ共産独裁と偽りの「偶像」であることを叫んだに違いない」などと評価されており、彼の活動振りは少々同情的、擁護的に語られているようである。このように、韓国政府の敵手とされていた朴憲永を、朝鮮の共産主義を築き上げた人物として語り、また彼が北朝鮮の権力争いにより粛清されたと論じることは、暴力的な北朝鮮の共産イデオロギーを攻撃するものであると言えよう。

一方、林和をはじめとする文人の粛清については、以下のように述べられている。

また、朴憲永の粛清が目前のものと知らしめたのは、約二ヶ月前に南労党系の文人たち、つまりソウルから越北した李泰淳ら一派がみな粛清されたことである。つまり、李泰淳・林和・李源朝、金南天など、いわゆる北韓文壇誌の錚錚たるメンバー十数名が一気に粛清され、その事実が北韓の「人民報」や其の他の機関誌に掲載された。その理由は、「反動」的であったというが、反動的というのは「反逆」や「政府転覆」の予備段階に該当するものである。彼ら文士はその罪に問われた途端に、傀儡集団からの保護を受けず、筆を捨て労働者のような生活をすることになった。自由労働者とは違って、自由に職業を求めることもできず、その日から飢える生活をはじめた。のみならず、いつ「反逆」という罪名を着せられるかも分からない恐怖に悩まされた。このようにして、ソウルから越北した文人の大量粛清は、南労党系人物の最後粛清を意味するものであったし、その目論見が朴憲永の命を狙っていたことは想像に難くない。

『朝鮮日報』の「スパイ事件」報道は、一二日の段階においては、事件の捏造可能性に対する疑いはなく、むしろ韓国に残留している共産勢力との関わりや「その勢力を掃討する」、「宣撫工作に臨む」といった韓国政府の対応を伝えているに止まっている。そして、一三日から連載される「共産主義者の末路」では、事件の捏造可能性が問われる一方、その論旨は北朝鮮の共産主義が持つ暴力性や謀略的な権力争いを説くところに重点が置かれているように見える。

ところで、朴憲永らが死刑を宣告される時期と重なって、同年八月八日、韓国はアメリカと「韓美相互防衛条約」を締結する。それが影響を及ぼしたのか、

「共産独裁者の末路」は「美国民主主義の発達過程」という連載物と同時に掲載される。これは、当時の北朝鮮が中国やソ連の勢力を背負っていたように、韓国がアメリカの勢力を背負い、南北が対立しあっていた時代状況を示唆してくれるものだと言えよう。

これらの新聞記事については、資料六の日本語訳を参照していただきたい。

一方、日本の新聞における「スパイ事件」報道は、五三年八月八日付の『朝日新聞』、同月一二日付の『毎日新聞』などに見られる。

まず、八月一〇日付の『毎日新聞』にはＡＦＰ記者が語る北朝鮮の事情が掲載されている。同紙は、「朝鮮戦争に伴う捕虜交換で北鮮にはりめぐらされた「鉄のカーテン」は更に大きく開けた。しかし既に千数百名の国連軍将兵が帰ってきたが北鮮の実情は未だにナゾにつつまれている」とし、三年間の捕虜生活を体験したＡＦＰ通信特派員モーリス・Ｇ・シャントルーの証言を掲載している。

シャントルー記者は、北朝鮮の政治状況について「北鮮人民共和国は「モスクワの愛児」だといわれていることはすでに有名だが、北鮮軍官もそう信じている。ということは、中共軍の動乱介入以来、軍事面では完全に中共の指導下に入ったが、政治面では北鮮は依然モスクワに直結しているということだ」と語るが、この内容は、李喆周やその他の人が証言する北朝鮮政治状況の枠に反れないものであると言える。そして、朴憲永らの「スパイ事件」についても簡単に触れている。氏は、「スパイ事件」について「七日夜平壌から公表された北鮮要人ら一二名の追放がこれら三派の権力争いの結果かどうかは確言できない。しかし私が捕虜だった今年の二月ごろまでは追放された朴憲永は北鮮では最も権力を持った人物だった。そして若年の金日成首相などはむしろ名目的存在にすぎず、背後には彼をあやつる有力な人物がいるということも聞いたが、それが誰かは判らない」と言及する。彼の証言からは事件の内幕を推測することはできないが、首相の金日成に劣らない権力を持っていた朴憲永が、北朝鮮の主導権争いに巻き込まれざるを得なかった状況はある程度読み取ることができる。

同月一二日付の『毎日新聞』は、この事件をさらに詳細に伝えているが、同紙の報じ方は注意深く、かつ懐疑的であると言える。

さてこのように大がかりな陰謀があの厳しい戦争態勢下にあって果して行われ得たかどうかは疑問なので、これは金日成首相を中心とする北鮮の親ソ的「主流派」が反対派を陥れるために実際あった一寸したスパイ事件にからませて作り上げた虚構ではないかと見る観測筋もある。

すでに、一〇日付の『毎日新聞』は、シャントルー記者の証言を掲載する際、北朝鮮の事情について「未だにナゾにつつまれている」、「北鮮の実相が明かでない限り政治会議の見通しも立て難い」とコメントしており、また、平壌放送が発表した「スパイ事件」に対しても鵜呑みにできない雰囲気を感じ取っていたようである。つまり、明確な判断を差し控えた『毎日新聞』の記事は、他の人が指摘する事件の捏造可能性と通じ合うものであると言える。

同紙は、ソ連の「ベリヤ事件」と北朝鮮の「スパイ事件」の性格が類似していることについても指摘している。共産陣営におけるこの二つの事件を「国際的な共産主義陣営の一環として、社会主義統一国家建設の基本方針を曲げるも

のではなく、従って米国あるいは李承晩政権の出方には徹底的に警戒し、妥協してはならないという警告を北鮮人民に対して発したもの」と見て、両事件は朝鮮戦争とその後における米ソ関係を示唆するものと解説している。

以上の資料を検討する限り、「スパイ事件」に関しては、北朝鮮がそれを公表した当時からすでに「捏造可能性」説が出回っており、事件に対する解説も明確な判断を留保した懐疑的なものであったことが分る。

次は、裁判記録に関するものであるが、林愛樹が裁判記録を捏造された「宣伝文書」であるとする他、裁判記録の捏造可能性について最も詳細に触れているのは、目下のところ李喆周の『北の芸術人』である。特に氏は、林和の訊問記録について様々な疑問点を提示している。

例えば、公判記録の序文には、「林和は拘置所で自殺をはかり、眼鏡のガラスで左手の動脈を切った。ひどい出血で人事不省に陥ったところを輸血し、命は助かったものの健康は害した」[二六]という文章が添えられているが、李喆周はこのような記述自体が、疑わしいものであるとする。つまり、林和が「拘置所で自殺をはかり、眼鏡のガラスで左手の動脈を切った」ということは、北朝鮮の拷問がいかに耐えがたいものであったかを物語るものであり、「人事不省」であった林和が正確に陳述できない分、訊問内容は操作、捏造された可能性を孕んでいると述べる。また、林和の訊問内容は公開されたことがなく、当時の新聞においても「起訴状」と「判決文」のみ掲載されており、よって林和の訊問内容は捏造された可能性が十分あることを指摘する。

林和を含む被告たちの訊問内容は一九五三年八月七日、八日付の『民主朝鮮』に掲載されたという。李喆周は、それを読んだ「人々は「これは嘘だ」と騒いだが、大声を出すわけにはいかなかった。林和の起訴状や訊問を否定することは党の政策を否定することになるため、いくら根拠があるとしても否定できないのが北朝鮮の社会だからである」、「北朝鮮の共産主義者らは、李承樺・林和一派の公判を公開裁判にするとしたが、全期間は公開しなかった。李承樺の場合のように自分たちに都合がいい時だけ公開したのである。私は今日まで林和の公判を傍聴したとする人に出会ったことがない」と証言する。

他にも氏は林和の公判内容について、幾つの疑問点を提示しているが、それについては資料の七を参照していただきたい。

以上、「スパイ事件」や公判記録に関する証言や論評、解説について見てきたが、これらの資料から事件の「真相」を明確に捉えることはできない。「スパイ事件」や公判記録の内容は、それを見る視点によって多様なレベルでの解釈が許されるものであった。

林和の断片的な足跡からすれば、彼は「皇国慰問作家団」の派遣に関係し、一九三九年八月に連載される『京城日報』の「言葉を意識する」においては、植民地政策に符合する内容を書くなど、確かに「日帝に迎合」していたのである。このように、林和が経験した数多い出来事の中で一部分だけを取ってみると、北朝鮮の裁判記録は整合性を持つものであるかもしれない。しかし、問題はそう簡単ではなさそうだ。北朝鮮の公判記録は、林和の足跡の中でも罪状になり得るものだけを収集し、物語を構築しており、それは北朝鮮の政治的都合に合わせた閉鎖的な「歴史」にならざるを得ない。

また、公判記録を収録した『暴かれた陰謀』（一九五四年八月）を出しているのは、北朝鮮の外国文出版社であるが、この出版社の性格も注目すべきであろう。「外国文出版社」という名前から推察できるように、この出版社では北朝鮮内の書物を外国語に翻訳し出版していたと考えられる。外国文出版社から

出された日本語書籍を検索してみたところ、朝鮮戦争勃発原因を韓国やアメリカの陰謀に因るものとみるものや中国、北朝鮮、ベトナムの共産イデオロギーを美化したものなど様々な書物が出版されていることが分った。要するに、北朝鮮では、朝鮮戦争の休戦を契機に、戦争責任を韓国に転嫁する内容、または本国のイデオロギーを宣伝するような書籍を外国語バージョンで数多く出版していたと言える。また、清張がベースにしている『暴かれた陰謀』も、その脈絡にあることは間違いないだろう。以下は検索結果の一部である。

・『私はなぜ南朝鮮からとびだしてきたか』　一九五七年
・『解放後の朝鮮文学』　一九五七年
・『千里馬・千里の駒』　一九五八年
・『兄弟諸国の貴い援助』　一九五八年
・『朝鮮・中国・ベトナム人民の永遠の親善―わが政府代表団の中華人民共和国とベトナム人民共和国親善訪問文献集』　一九五九年
・『事実は語る―朝鮮戦争挑発の内幕』　一九六〇年

一方、「スパイ事件」や公判記録、そしてそれに基いた清張の『北の詩人』の虚構性を指摘し、「歴史」の歪曲を云々する批評にもジレンマはある。事件や公判記録の捏造可能性を主張するためには、それを論破するためのもう一つのイデオロギーを主張する必要性が生じる。その際、もう一方のイデオロギーにおける正当性の証拠は何処にもなく、議論は相互のイデオロギーを排斥しあうものにしかなりかねない。

いずれにせよ、「スパイ事件」が世間を騒がし、それを巡る様々な言説が存在する真っ只中に清張がいたことは確かなことであろう。端的に言えば、彼が「スパイ事件」の捏造可能性を問うている『毎日新聞』に目を通さなかったとは考え難い。問題の中核は、「事件の真相はどうなのか」、「林和は本当に日帝に迎合し、解放後はアメリカのスパイであったのか」を問うところにはない。むしろ、事件に関する複数の言説の中、何故清張は裁判記録と符合する内容の作品を書いたのかということが問われるべきであろう。これについては、次章において清張の戦後日本とアメリカそして「朝鮮」という配置図を念頭に置きながら考えてみたい。

Ⅵ　戦後日本とアメリカそして「朝鮮」という配置図
―　「おわりに」に代えて

清張が『北の詩人』の連載に取り組んだ際、北朝鮮出身の関係者から資料を渡されたと推測される点は幾つかある。すでに川村湊も言及しているが、清張が昭和三七年『中央公論』に『北の詩人』を連載していた時、彼は「林和」のことを「イムファ」と読ませず、「リムファ」と読ませていた。韓国語においては「R」音が語頭にくることがなく、「リ」は「イ」に変化するが、北朝鮮では「R」が語頭にきてもそのまま発音される。つまり、韓国では「林和」のことを「イムファ」と読ませるに対し、北朝鮮では「リムファ」と読ませる。松本清張全集においては、漢字の「林和」に「イムファ」とルビが付いている。が、昭和三七年『中央公論』に連載されていた段階では、「リムファ」と表記されていたことから、資料や文献のルーツが北朝鮮側にあったのではないかと推察できる。また、小説の下敷きとなっている『暴かれた陰謀』は、北朝鮮か

ら出版されたものであり、それを含めた他の資料の入手過程においても、「在日本朝鮮人連盟」（略して「朝連」ともする）の関係者が関わっていた可能性が高い。

しかし、何度も繰り返して述べているように、この「スパイ事件」を巡っては、事件が公表された一九五三年八月の時点からすでに捏造可能性や懐疑的な言説が存在していた。また、『北の詩人』の連載を手掛けていた際の清張が、このような言説空間を意識していなかったとは考え難い。

では、事件に対する多様な解釈が散在する中、清張はなぜ捏造可能性を孕んでいる『暴かれた陰謀』をベースに『北の詩人』を書いたのだろうか。

まず、昭和三〇年代における清張の作品群をみてみよう。

清張は、昭和三三年の「黒地の絵」（『新潮』昭和三三年三月～四月）をはじめ、翌年には『日本の黒い霧』の執筆契機となった「小説帝銀事件」（『文藝春秋』昭和三四年五月～七月）を、昭和三六年にはＧＨＱの検閲問題を扱った「金環食」（『小説中央公論』昭和三六年一月）や、日米の政府と企業が殺人事件に関係していることを描いた「蒼ざめた礼服」（『サンデー毎日』昭和三六年一月～翌年三月）などを書いている。これらの作品は、いずれも戦後日本とアメリカとの関係を描いたものであり、清張が戦後日本を語る際、アメリカの存在にいかに意識的であったかが伺える。換言すれば、昭和三〇年代の清張における重要なモチーフの一つは、終戦後の日米関係であったと言える。

その中でも、最も注目に値するのは、『日本の黒い霧』であろう。『日本の黒い霧』は、昭和三五年一月から一二月まで『文藝春秋』に連載されたドキュメントである。ＧＨＱ被占領期に起きた不可解な事件、例えば「下山国鉄総裁謀殺論」や「二大疑獄事件」、「帝銀事件の謎」などを題材にしているが、そのいずれもがアメリカ側の謀略による事件であるという筋になっている。この作品を通して清張は、日本の共産勢力の残酷な暴力性を告発しつつ、自らの「民主主義」イデオロギーを社会に広め、かつ正当なものとしようとするアメリカの謀略的戦略を批判していると言えよう。

『日本の黒い霧』が連載された昭和三五年は、日米安全保障条約が締結された年であり、またハガチー事件や東大生の樺美智子の死亡事件、そして安保条約の自然承認という尖鋭な日米関係の続いた年であった。このような時期に発表された清張の『日本の黒い霧』が反響を呼んだことは想像に難くない。

このように、清張における昭和三〇年代の作品群を検討してみると、彼は戦後のアメリカを、「民主主義」の使者と名乗りながら、むしろ権力を逆手にとり、自らのイデオロギーに反するものを弾圧する、いかがわしい存在として物語っていた。以上のような彼の戦後アメリカ認識は、『北の詩人』にも影をおとしている。

『北の詩人』においては、アメリカ情報機関が安永達や薛貞植らを媒介に林和に接近し、彼にして共産党関係の情報を提供するよう要求するありさまや、林和もまたそのようなアメリカの権力に振りまわされる様子が主な流れとなっている。小説の中で、林和が決定的にアメリカの情報機関と結託するのは、植民地時代の転向記録をアメリカ側から渡されてからである。彼は、恥じるべき過去の証拠が消滅されることによって、自由に生きることができると思った。しかし、「偽造転向誓約書」を受け取り、暗い過去から抜け出したと思ったのも束の間であった。アメリカは林和に「偽造転向誓約書」を渡しはしたが、その文書を写真の形で残していたので、林和の転向記録は依然として残っていることになる。つまり、林和はアメリカに新たな転向証拠を提供したにすぎなか

った。

ところで、アメリカは林和が提供する情報などにはそもそも関心がなかったかもしれない。彼がアメリカ側に渡した資料の内容は、共産党傘下の組織や幹部の名簿などにとどまっており、機密といえるほどのものではなかった。つまり、アメリカは、林和の提供する「情報」よりも、アメリカ情報機関と連係する「林和」そのものを獲得したかったのである。林和が転向事実の暴露を恐れ、また結核治療の薬を欲しがっているのを見抜いていたがゆえに、アメリカは彼を買い上げることができたのである。

また、清張は、「精版社事件」もアメリカの謀略の一つとして推理している。「精版社事件」については、資金難に陥った朝鮮共産党が、党活動資金を調達し、ソウルを中心に経済攪乱を目的に偽造紙幣を大量に刷った、という理解が最も一般的であると言える。しかし、清張の『北の詩人』では、ソ連と同じ路線を主張する朝鮮共産党の勢力を根絶させるため、アメリカがデマを流し、偽造紙幣事件を捏造したことになっている。また、この事件がきっかけとなって、朝鮮共産党の機関紙である『解放日報』は発禁となる。ここでも、清張は政策やイデオロギーの違いにより、アメリカに踏み躙られていく朝鮮共産党を描いている。

他にも、権力者のアメリカを強調しているところは散見できるが、『北の詩人』の中の安永達は、終戦後の韓半島情勢について、「アメリカ軍がソビエトに忠実な極左政党をはじめから支持するはずがありませんよ」、「アメリカは、金輪際、この南朝鮮を放しませんよ。放したら最後、極東はソビエトのものになると信じこんでいますからね」と語る。これらの文章からは、朝鮮の支配を巡ってアメリカとソ連が激しく対立する中、アメリカが韓国をソ連を牽制するための手段としていることが伺える。要するに、清張が注目していたのは、「林和」のスパイ行為そのものよりも、米ソ対立の中、アメリカが林和のような共産党の重要人物をどのようにしてアメリカ側に組み入れていったのかということであった。

『北の詩人』における林和の最期は次のように語られる。

裁判長の訊問も検事の諭告も、遠いところから声が辷って聞こえているようであった。彼の暗い陶酔のなかには、運命というテーマが茫乎としてひろがっていた。彼は相変わらず詩人であった。詩を――彼はその恍惚の中でつくっていた。[二七]

林和の臨終を「詩人」として語る松本清張に、「林和がアメリカのスパイであったのかどうか」の問いは無用なものであろう。要するに、彼は、朝鮮を巡ってアメリカとソ連が拮抗する中、一人の詩人であった「林和」が対立する両陣営のイデオロギーの犠牲になっていくドラマを書いたのである。

では、清張は『日本の黒い霧』を連想させる「謀略的なアメリカ」を、何故再び『北の詩人』の中で語ったのだろうか。

『日本の黒い霧』の「謀略朝鮮戦争」において、清張は「これまで書いてきた一連の事件の最終の「目的」は朝鮮戦争のような極点を目指し、そこに焦点を置いての伏線だった」[二八]とし、占領下における不可解な事件を朝鮮戦争の勃発に帰納させている。また、「朝鮮戦争は、さまざまな影響を日本の上にもたらすことになった。戦争勃発以後、日本はアメリカの軍事行動のために用いられ、B二九は本土や沖縄のアメリカ空軍基地から朝鮮戦線へ出撃した。また、

戦線に動員された米軍は、装備や補給などを日本で大量的に行なった。北朝鮮軍や中国軍がその背後のソ連を安全地帯としたように、米軍にとっては日本は安全な「聖域」であった」[二九]と説明し、朝鮮戦争とアメリカ、そしてアメリカの軍事基地にならざるを得なかった日本との緊張関係に注目している。更に、「この次に、極東のどこかに「第二の朝鮮」が発見されたときは、第一番の滅亡の危機が日本を襲うことは間違いないであろう」[三〇]と述べるなど、『日本の黒い霧』を執筆する際、「朝鮮戦争」あるいは地理的な位置としての「朝鮮」、そして日本とアメリカという三角関係の配置図を念頭に置いていたことを示唆している。

『日本の黒い霧』においても確認できるように、アメリカが極東地域の支配のため、「朝鮮」や日本における反対勢力を弾圧するありさまを告発した清張の史眼は、『北の詩人』まで至っている。換言すれば、朝鮮戦争に回収される一連の不可解な事件を仕組み、朝鮮におけるソ連の勢力を牽制するために一人の詩人をスパイとしていくアメリカ像は、両方共に清張の「反米」史眼から産まれたものと言える。このように清張が構築した戦後史の文脈の中で『北の詩人』を再読してみると、「『北の詩人』の真実は、全く小説の内容と違うようだ」、「捏造裁判記録の脚色」だ、云々の議論は的を射てない、ということになりそうだ。

注

一 『松本清張全集一七』文藝春秋 一九七四年一月 一九〇頁
二 林英樹「「北の詩人」の真実」『自由』昭和四二年一二月 一八二頁
三 林健彦『韓国現代史』至誠堂 昭和四二年一〇月 一二〇頁
四 注二に同じ 一八三頁
五 中公文庫『北の詩人』中央公論社 昭和四九年二月 三四一頁
六 角川文庫『北の詩人』角川書店 昭和五八年六月 三四六頁
七 川村湊『満州崩壊―「大東亜文学」と作家たち』文藝春秋 一九九七年八月 一七八頁
八 注一に同じ 一八三頁
九 一九五三年四月に創刊された韓国の代表的な綜合雑誌。七〇年五月号に金芝河の詩「五賊」を掲載したことで廃刊させられた。李承晩、朴正熙政権に対抗して言論の自由を勝ち取ろうとした雑誌としてよく知られている。
一〇 李喆周『北の芸術人』啓蒙社 一九六七年一月 五頁
詳細は資料一を参照。
一一 注一〇に同じ 一四〇頁
一二 『北の詩人・林和』キンヒョンゴル訳 未来社 一九八七年九月 二八九頁
詳細は資料二を参照。
一三 浦田剛「半島における思想の今昔―新しき出発―」『朝鮮』一九四〇年一一月 六七頁
一四 金允植『林和研究』一九八九年一二月 文学思想社 五四一頁から再引用
一五 林鍾国『親日文学論』一九六六年七月 平和出版社 九五頁
一六 資料四を参照。
一七 林和「現代朝鮮文学の環境」『文芸』昭和十五年七月 二〇二頁
一八 白鉄「朝鮮の作家と批評家」『文芸』昭和十五年七月 二二〇頁
一九 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配（下）』青木書店 一九七三年六月 六一頁
二〇 池田国雄「半島の映画界を語る」『朝鮮』一九四二年一月 三九頁
二一 兪賢穆『韓国映画発達史』チェックヌリ 一九九七年五月 二四九頁
二二 注一〇に同じ 五頁
二三 外国文出版社編集『私はなぜ南朝鮮からとびだしてきたか？』外国文出版社 一九五七年一〇月 一六頁
二四 申亀鉉『解放後の朝鮮文学』外国文出版社 一九五七年九月 一〇六頁
二五 注二四に同じ 四三―四五頁
二六 注一〇に同じ 一四七頁
二七 注一に同じ 一七三頁
二八 『松本清張全集三〇』文藝春秋 一九七二年一一月 三八五頁
二九 注二八に同じ 四〇七頁
三〇 注二八に同じ 四〇七頁

（ちょ じょんみん・九州大学大学院博士後期課程）

芸術大衆の主張 三つ

―表現手段として― 【4】

林 和

精神標識

者である。出來、不出來、美や不美、善や不善、眞や不眞を最終に審くのがこの讀者である。

批評家も、一人の讀者に過ぎない。如何に我儘な作家でも、讀者がそうつて、自分の作品を受入れない場合、氣を損ねない人は少いのである。たとひ當代の讀者といふものを眼中に置かない場合があるとしても、未來の讀者といふものを考へてゐるのである。未來の讀者をも考へずに、當代の讀者を無視するとは、これ亦笑ふべき事實である。

如何なる場合も、讀者の審判から作者や作品が逃がれることは不可能である。それは文學が初まる時からの宿命だ。

これは、文學が讀者に支配されてゐる樣な一面であるが、つぎは作家が何時も讀者を支配せんとする一面が、また文學の讀者への考慮として現はれる。

大連にて

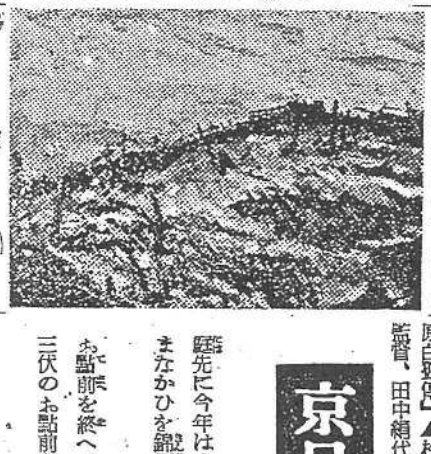
廣澤 虎造

大連は作年來雨なく水不足にて、市民一般困難龍在候、朝夕バケツをさげ瓶を持ち、配給の水貰ひの列を見ては、吾々東京者は大震災の時を想出し居り候

現代大家洋畫展

特に廿日まで日延べ

本社及び綴督府後援で洋畫壇の大家を講師に京城師範學校に洋畫夏季講習會を主催してゐる大潮會では、これと呼應して三越五階ギャラリーで十二日から現代大家洋畫展を開き、藝術院會員、文部展審査員、推薦、無鑑査級以上の作品二十數點を出陳、從來に見ない大作力作揃ひであることから果然人氣をあつめ、會期迫ると共に各方面の要望も高まつて來たので、三越と交渉の結果、十七日限りで開會する筈であつたのを、廿日の日曜日まで日延べすることになつたが、かゝることは京城では珍しいことである



ヤラリーで開いてゐるが、鄭子の

池成烈氏個展

けふから和信

昨年八月から本年六月まで北京、太原、開封、徐州、上海、漢口、南京、香港の第一線にある皇軍勇士を慰問の傍ら、戰跡を寫生して歸つた池成烈畫伯はその個人展を十九日から廿五日まで鍾路和信ギ

朝日座の漫才大會

朝日座では二十日から廿三日まで毎日午後六時開演で漫才大會をやることになつたが、楠大正坊、實家梅子、ミス・エミコなど女流を動員しての一座である【寫眞―ミス・エミコ】

隆に、諸士の戰野に、作品すべて五十五點、特異な展觀である【寫眞―『徐州戰跡圖』】

京城の京城を賑はす

問題の外國映畫二つ

「赤ちゃん教育」と「テキサス人」

一、新しく輸入される洋畫のことが話題になつてゐるが、作品、問題映畫の上映を觀ひフ

ー・ハインズの三名が共同出色したもの監督には天然色映畫「千潮」等を物して重要視されて來たジェームス・ホーガンが當り、主演は「ミシシッピ」のジョーン・ベネット「たくましき男」のランドルフ・スコットで、他に名老女優メイ・ロブスン、最近人氣の出たウナルター・ブレナン、名優役レイモンド・ハットン其他が出演してゐる

これは一八六五年、南北戰爭終了後合衆國建設を繞り、勇敢なるテ

合衆國建設の奮鬪史

テキサス人

ートラム・ミルハウザー・ボール・スローン、ウイリアム・ウイスタ

設に寄與する大戰鬪活劇史である

【梗概】一八六五年。南北戰爭が終つて南軍の兵士カークジョーダン(ランドルフ・スコット)が故郷に歸つて見ると、南部には惡政が橫行し、人民は困窮しアイブイ・ブソストン(ジョーン・ベネット)と云ふ若い女性に依つてテキサス州を合衆國から獨立させる運動まで起つてゐた。カアクはその非を說きアイヴイの所有する莫大な家畜をカンサス州へ賣る事になり、一行はインデイアンの襲撃、砂塵、暴風、野火などの自然の猛威と闘ひ、オクラハマ州を越へカンサスへ近づくが、一方、北部から南部へ移行した惡德政治家ミドルブラックの惡計で二人の計畫は妨害される・天は惡に組せず、家畜は無事カンサスに着し家畜の供給不足で不振のどん底

次週番組

京日歌壇

『夏季雜詠』

北原白秋

清州 角南 阿部

お點前を終へて立ちたる連枝惣病葉一つ落ちて來たり

三伏のお點前たのしお茶室に侍りて汗を忘るゝひとときの

仁川 砂田

田植取る乙女やさしく手を振りて急行列車を見送る

驛人の心もうれしこの驛に葵とダリヤよく咲きて

成歡 小川

朝早く起き出で見れば露おきし庭のトマトは色づきぬ

夕つ陽にポプラの影は細長く田の面に落ちて鷺の

城津 原田

城き日の思ひ出甘き桑の實に山路に獨り採りて味

野蕃の紅くうれたるこの山よ二年ぶりに來つるかな

初秋雜詠

八月二十日締切▲官製ハガキ限り認め、京城日報社內「京日歌壇」あて

京龍館 (二十二日から二十七日) ▲大部映畫石山稔監督、阿部九州男、木下双葉主演『小笠原白狐傳』▲松竹映畫、野村浩將監督、田中絹代、上原謙、桑野通子、佐分利信主演

浪花館 (十九日まで) ▲東宝映畫リアム・ウェイ監督、ジンダンリチャード主演『西俠盜傳』▲東宝映畫、高田保原作、早智子主演『銀ユース

は、いつもやらず夕食のことから起るのでした。

飯も、ラムゼー君が家へ歸つても、まだ夕御飯の仕度がしてないのです。

『何故、仕度をしないんだ』

ラムゼー君は、無論、英語で細君を叱りつけます。

『だつて、あなたの歸りの時間がお買つて來て毎日の亂飯に慣れて行くことは』

『今夜はトンカツにしはトンカツ』

ラムゼー君は夫婦喧嘩はなく

それから、夫婦喧嘩はなく

不安の主題を完く美しき表現と作家心理

林　和

る言葉を乗てるのが本當か、否かと云ふ空しい議論にあるのでなくすべては今日の作家達が使いにくい言葉が、使ひ良くなつてからの話だ。

さうでなかつたら、初めから文學なんかは問題に置かないのが本當である、そんな方法で文學を考へる事は、如何なる意味からしても、文學は寄與する處、餘り少いと、いはざるを得ない。

すると文學は表現の完璧や美のためであつて、内容は無いものかと、いへば、そんなものでない、だから言葉の問題は、先きから、さう粗雑に扱へられる程、なまやさしいものでないと云つたのだ。

表現への意慾は、また傳達への言葉でイデアなるものを説明したが、故なき事でない。イデアなるものは、すべて眞で、善で、美でなくてはならないといつたのは、實に、現實的、道義的で、藝術的であれといふ意味ばかりではない。

眞なるものは、善なる制限道義を經て、美しく形造られなければならぬといふ意味を含むんでゐるこんな過程を經て來ないものは、眞で、善で、美である事は出來ない。

何故なら、美しくないものは形無きものであり、形無きものは善であり得ないし、また善であり得ないのは眞でもあり得なかつたからである。

朱乙温泉にて

金　龍　濟

清津までの旅行を終へて只今温泉に來てしばし都塵を洗つてゐます。間もなく歸京致しますがこんな所へ一人來てゐると眠心の慰しさか、牛酪友人の所へやたらにエハガキを差上げたくなります。湯よりも渓谷の美がよく山の翠色水に映じて人の心を涼しく洗らやうです。

京日歌壇

『夏季雑詠』

北原白秋選

京　城　岡村千壽子

夏の陽をまともにうけし病棟は直角の影を地におとしたり

京　城　水谷信夫

町をへだてゝ遠き山より病室にふき來る風はづめたかりけり

親牛に仔牛はさひて草を食めり首伸す仔牛の肌はやさしも

おちつかぬ心に遣へてこの夜も獨りしわれは内科の書をよむ

京　城　あき・ふかみ

眞昼間の蟬ざこもらふ部屋内に我いねがたく蟬殺しをり

溪ぞひの小道は遠に山に入りて遠く聞ゆる蟬鳴の音

京　城　山路朝太郎

あつき日のひるのさかりを父と子がまはだかにゐてこころやすけし

日やけせる子が前垂めてかたりつぐ野球のはなしきくがたのしき

京　城　大山たかし

城壁に垂れ彼される青蘚を吹きあふる風は雨をふくめる

城門の日かげつくれる青蘚に年経の人のつとひ臥したり

京　城　成田ひろ子

雨の音いつしかやみて朝の風の青葉に通るひぐらすがしき

大鑑の眞町を愛のたゞひと夜除かせて蓋は藝ふるらし（孔雀サボテンの花）

京　城　砂田義繁

水撒ける路地の朝げは清々し十潤ひて黒く光れり

花持ちて吾が前を行く少女子の歩きチョコリに肌透きて見ゆ

初秋雑詠

八月廿日締切▲官製ハガキに一人一枚三首限り認め京城日報社學藝部『京日歌壇』あてのこと

新映畫の紹介

新開地

十月には完成

漢陽映畫社が『驛着地』に次いで發表を急ぐ『新開地』は來る十月に封切の豫定で強行製作中だが、

『新しき出發』

九月早々封切

『無情』の發表以來朝鮮映畫社の第二回作品『新しき出發』は李

新刊紹介

▲觀觀（第十八回鮮展號）作品の寫眞は別として各大家の展覽會評は京城日報紙上に掲載したものを

今晩のラジオ

六時戰場の華（東）星章々中川元次▲分講演（東）永松時井分國民談話國登山の歌々内田七時四十分戰線勇士夕（大）▲八時四談話（東）法博信九時十分琵琶（東）隊長々松田靜水

學藝だより

◇金命洙氏　京城府德壽ブペート三十

山葡萄殿行所）

▲石楠（八月）俳誌

亞浪選、制作の苦心

また亞浪記、その他

る文章が多い（五十

野區西町石楠社）

▲鶯祭（八月）俳誌

主宰する月刊、鶯祭

はじめ寄稿その他あ

のが多い（四十二錢、

區東大崎四鶯神殿行所）

▲草の實（八月）俳誌

題吟に自句自解に渉

りを示してゐる、

（卅錢、京城府給町

▲山葡萄（八月）俳誌

織あざやかに新人の作

羅してゐる（卅錢、二

米國の映畫界

驚くべき統計

北米映畫製作配給協會は最近一九三八年度における映畫統計を發表した、右によると映畫觀覽者は米國のみで週平均八千五百萬人、世界における週平均は一億五千萬人の多數に上つてゐる、これで見ると全世界で映畫を觀覽する人數の半分以上が米國で占められてゐる

既定になり、米國における映畫の普及狀態を物語つてゐる、統計のうち主な數字を拾ふと次の通り

（米國のみ）

△常設館入場料　十億弗

△この稅金　百萬弗

△映畫事業に從事する人員　二十八萬二千人

△映畫俳優所得金額　二億五千弗

△映畫常設館數一萬六千二百五十一

の心情を點綴した散文詩的郷土映畫で出演者は李錦龍、高永麗、金德心、高奇峰、姜貞愛をはじめ數千のエキストラを動員してゐる

蟬の聲細りて蟋の音は弱え、狹庭邊の秋草も露に濡れたり。

秋の用意整へけるにや。窓に蟲み徒らに泌み、身も心も慎さを奈何せん。

れで特輯號とは呆れた（特價一圓、東京・麹町三一畫觀社）

▲國風（八月）明き淵からの大和魂を培ひ育くものなしとの趣旨の春氏の主宰する月刊誌特に親切を傾けて京城府吉野町神樂園▲文學界（九月號）朝鮮で座談會（伊藤整、林房雄、岩倉政治、日出海）創作（舟橋本庄陸男）（定價六麹町、内幸町二ノ一▲白楊（八月）俳誌の主宰する月刊、雑他（社費年三圓、奉三白楊社）

▲かりたご（八月）俳（枌章選）課題吟（清學欄（鬼從子選）ほ

など（廿五錢、木浦府六、かりたご發行所）

▲冠（八月）俳誌と六、田中菊坡氏の容は月と共に充實し錢、京城府蓬萊町一、葉會）

▲いちご（八月）俳雑詠、野風呂選い（廿五錢、光州府黄金

文藝時評

作家の心と表現への意思

林　和

ポリティカルに、既成の意味ではかつてのヒューマニズムの延長にすぎないようとする考へは、寧ろプロ文藝の歴史的期に言葉への熱心を、藝術至上主義的とか、技巧的とか、排ひて理論的に、ポリティカルに考へようとした時代的な思考と非常に共通点がある、或は何人でもポリティカルに見ようとした

斯る思考方法の淫が今日尚殘つてゐるかも知れない

問題はそんなに、なまやさしい處に横出してゐるものではない、もつと深い處に潜んでゐるものである、それを知るために、もう少しの探求力と、耐力を、準備してゐなくてはならない

吾々は、そのために、表現への意志といふものを考へなくてはならない

道具は、作るためにあり、言葉は語り書くため、即ち表現のためにある

表現せんとする意志は作らうとする意志が常に道具を求めるやうに言葉を欲してゐる

表現は、造作が巧妙と便利を求めるやうに完璧と美を欲してゐる

完璧さと、美しさのため、作家達は最良の言葉を求むるものである、最良の言葉とは決して我が者にポリティカルな偏頗遊が醸するやうに、何か傾向的な偏見からえられるものではない

注意すべきことは、作家にとつて、最良の言葉としての一番光きの條件は便ひよいといふことである、便ひよい言葉でなければ、表現の完璧さも、美しさも期待出來ないからだ、斯る意味では作家は工匠の心理と共通するものがある

要するに、表現の對象を捉へる上に最も便宜で有効な言葉である

それはいふまでもなく、その作家が生れながらにして聽き、語り通じて來た言葉、日常凡ゆる用事を不便と、不自然さなくして、すまし得る言葉である

一作家が斯る言語で、自己の作品を形作つて行くのは決して何等か

新映画評

思ひ出の曲

少女趣味的感傷篇

ウ社作品

獨ウファ映畫『思ひ出の曲』——『未完成交響樂』のマルタ・エッゲルトが主演した音樂映畫でハンガリーのヴァイオリニスト、ソエレンツ・フェッセイ作曲の『悲しいワルツ』を主題歌として全巻をエッゲルトが唄ひまくつてゐる、彼女には既に未完成のやうな情熱も若さもなく、凄刺とした感傷が至つて乏しい

時代三十九世紀の中頃イムメンデインチンといふ小さな侯國を背景にこの國の殿様がその音愛した姫の忘れがたみクリスティーネ（マルタエッゲルト）と出合つて『想ひ出の曲』即ち『悲しきワルツ』を聞くといふお話で、それに大臣の息子の若い中尉ワルター（ヨハンネス、ヘース）とクリスティーネにお定りの甘つたるい戀を語らせてゐる

監督デトレフ・ジールクは音樂の情緒的効果を狙つてゐるが、調色の構成に緊密を欠き演出も低調に終り、装置も割に粗末な出來、エッゲルトは數年前に較べてやれ氣味なのは救ふべくもないが、さすがにその一枚芸板である美聲だけは認むべき未だ豊富で豊富で豊實なもの、歌詩と歌曲の甘つたるさ、御伽噺のやうな筋と云ひと

廣澤虎造の鮮内日程

京城廿六、七日

廿六、七両日京城府民館に出演する國東浪曲界の人氣者廣澤虎造は目下大連、旅順等の關東州地方を巡遊中であるが、廿日、奉天、天津、北京、安東を經て朝鮮に入り、次の日程で巡業の豫定である

中　かほる主演『百猫傳』

全國書道展

來月一日三越

京城郵信分掌局工事課員を中心とする鮮書會では書道振興の波に乗り廣く全國より條幅、扁額、色紙、短冊、半紙等に揮毫せる作品を募集中であつたが、いよ〳〵去る五日これを締切り、東方書道會及び鮮西書道會の鑑査員たる藤田子青氏の鑑査の上約百三十點を以て第一回全國書道展を九月一日から五日間京城三越五階キャラリーで開くことになつた

新刊紹介

▲肺病療防養養致則（原榮著）稿を起してから五十五版、肺病の療法についてあらゆる視角から檢討し、その正確なる、治療法を解いて餘すところない（二圓八十錢、東京、本郷、龍岡町三十一、吐鳳堂）

▲京城雜筆（八月號）手紙二つ（新妻莞工營部長に陳謝（寺田瑛）（四十五錢、京城黄金町三ノ二〇八、京城雜筆社）

▲滿洲映畫（七月號）三十錢（新京　特別市大同大街二一三滿洲映畫總行所）

▲解剖時代（八月號）百雷號記念特輯東亞、日本（英國）三十錢、東京・神田・司町一ノ四ノ二解剖時代社）

▲少女倶樂部（八月號）五十錢、東京・小石川・音羽・講談社

▲幼年倶樂部（八月號）五十錢、（東京・小石川・音羽講談社）・

▲キング（夏の増刊號）六十錢、現代、時代、雄愛、探偵小說講切集（東京・小石川・音羽・講談社）

▲京城雜筆（七月號）四十五錢、（京城・黄金町三ノ二〇八、京城雜筆社）

▲朝鮮及滿洲（七月號）六十錢、（京城・蛤町四十四、朝鮮及滿洲社）

▲朝鮮農會報（八月號）三十五錢（朝鮮京城黄金町二ノ一九五朝鮮農會）

▲食養研究（八月號）胃腸病とその食餌療法三十五錢（東京、深川隠電糧秩本廠内糧友會）

▲被服（八月號）三十五錢、（東京王子（赤羽）陸軍被服本廠内被服協會）

▲局友（八月號）十錢（京城、漢江通十五朝鮮總督府鐵道局友會）

▲朝鮮醫學會雜誌（第六號）五十錢（京城帝國大學醫學部内朝鮮醫學會發行）

▲月刊ロシヤ（八月號）國境の大激戰、危機に立つコルホーズ四十錢、東京、（麹町、丸ノ内二ノ二蘇通信社）

▲向上（八月號）行百里半九十（平沼駅一郎）皇民道場の建設（蓮沼門三）二十五錢、（東京渋谷千駄ケ谷、修養團）

▲朝鮮商工奬勵館報（京城・南大門四丁目）

▲宣撫月報（非賣品調査研究會）

▲國際觀光（夏季號）としての觀光宣傳を海外觀光局内、國際觀光局内、

▲講演の友（百五十錢、東京、軍事同盟に邁進せよ芝・琴平町二十六、

▲商工之友日本（八月號）工之日本社）

▲協和（二四三號）市東公園、滿鐵本社會）

▲訓導生活（八月號）本義と實踐（四十錢、荻窪二一一九四、訓

▲國策研究（八月號）を徹收すべし（中野再建設の樞軸（北陸（東京・神田・鐵倍界公人社）

▲科學知識（八月號）と黄金文化、人種優時局下の水産日本放東京・神田錦町一ノ識普及會）

▲朝鮮實業倶樂部（八月號）錢（京城簿路二ノ一（倶樂部）

▲國際知識（八月號）時局問題（佐藤尚武）とスラーヴ族の鬪爭十錢（東京・丸ノ内日本國際協會）

▲東洋之光（八月號）輯四十錢（京城府明東洋之光社）

▲ウオールドダイヂ上旬號）二十五錢（原町三ノ六一ラルド

▲ツーリスト（八月五十錢（東京・麹町一、ジャパン・ツー、日本旅行協會）

▲生活（八月號）何か特輯（十五錢、東ルガ台一ノ一、佐藤

▲遞信の知識（八月しい遞信の知識、發に付三錢切手封入の（東京・麹町・富士

遞信博物館）

京日歌壇

「夏季雜詠」

北原白秋選

京城　有賀　秀

ふるさとの野花もまじりゐたりけり花チガにけふは白き花あり

漢江の夕河岸に吾子とゐて魂を迎へむ火を焚きにけり（盆の十三日）

銃眼を敵ひて茂りたり山鳥の鬼ごりの上を白き蝶ゆく

▲八月廿三日（安東劇場）▲廿四日（平壤金千代座）▲廿五日（釜山劇場）▲廿六日、廿七日（京城府民館）▲廿八日（仁川）廿九日（咸興）▲卅日（滿津）▲卅一日（鶴門）

それより新丹江、佳木斯、ハルビン、新京、吉林の順序となつてゐるが、一行は虎造とも十五名に一座の花形は虎之助、右虎造、虎若、鶴造、虎太郎、虎松等で何れも元氣に張切つてゐる

一瞬のつながりを即にさくから摂つてゐることを知る。

『あゝ、あなたもあの時にゐたんですか』

言話といふものは、現在の生活に裏打ちを持たぬ。否、現在の生活に裏打ちのである。

『よき言葉』と『よくない言葉』

【1】 林 和

東京にて

中河與一

さて今度、私主宰に『文藝世紀』と申す雑誌近く創刊いたしますことは、政治、經濟、文學を論ずるつもりにて、現下の雑誌を改革指導する計畫にて一萬部、大いにやる積りでありますが、大藝術雑誌に今日の悪弊を攻撃しました、雑ふれば武者小路雑誌雑誌、場馬場試なとといたしました

『夏季雑詠』 北原白秋選

京日歌壇

京城 宮地清子

市川の里は近しと馬草刈る音は云ふにたえに疲れき（蘆郷）

雨煙る霧の山路にゆくりなし里の女の言葉かけたる

疲れたる胸を休めて振り返る青葉亜木の心地よろしも

京城 三谷壽美子

わが庭に落ちてかびたる青柿のまろべりけふも掃わすれしか

青柿のよく落つる日ぞ日もすがら夜もすがら病める吾兒をみとりつ

かめの子を飼ひゐる盥の水に落ちし青柿の音を淋しと思へり

京城 島一寛

繁きアカシヤの樹の間より蟬の鳴く聲きとほれり

蟬の聲すさまじきまつゝ今日ひと日山中の友の家に暮せり

暮れ方の空の雲は夕立ちの落つる直ちを吸ひこみにけり

京城 横川忠義

この庭にうかぶ雲々その中の小さき一つは家の前の岡

京城 渡邊茂子

みどり欲しと強ひて植ゑて向日葵は硬き土にもなじみ生ひつゝ

いつの日か大輪となら[illegible]にあまた綻めつゝ生ゆる向日葵

みてきたる水炊ひ込みし向日葵の風にむもむろ下葉ゆるがす

初秋雑詠

八月廿日稿切▲官製ハガキに一人一枚三首限り▲京城日報社學藝部『京日歌壇』あてのこと

【7】 清平寺九聲瀑 山田新一

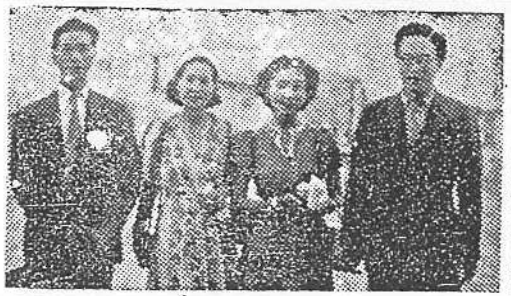
『伸び行く朝鮮』

新興スター連で製作

厳島陸軍設貿廠十周年記念映畫『伸び行く朝鮮』製作のため新興キネマ東京撮影所のスター古川登美、金澤美都子、半澤洋介の一行八名は十四日來城、目下府内の各地で撮影を續行中である、これより全鮮各地にロケハンを行って文字通り伸び行く朝鮮の姿をカメラに收めれ月下旬には完成の豫定である、この映畫の製作企畫を適當した高岩肇氏は撮影プランを左の如く語った

この映畫は遞信局保險課の委嘱で、私が脚本を書下しました、監督は須山眞砂碩、カメラは橋本榮で古川登美が東京の婦人雑誌記者になり、半澤洋介、金澤美都子の二人が朝鮮の人になります、四十日間全鮮各地に撮影行脚をすることになってゐますが、主として北鮮地方の新興産業を中心に、躍進朝鮮を力強く描き出したいと考へてゐます

なほ一行は十五日には和信、妓矣島飛行場、慶會樓、三越前廣場等でも撮影を行った【寫眞＝本社來訪の一行】



新映画評

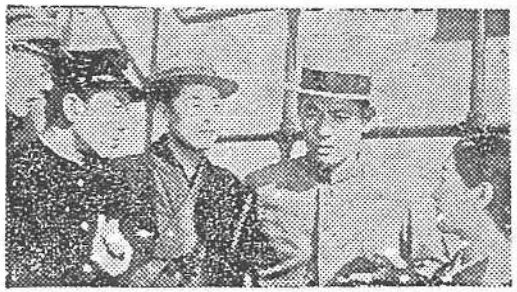
五人の兄妹

新人の清新な努力

大船作品

松竹大船作品『五人の兄妹』――脚本は新人木下恵介のオリヂナルストーリー、監督に當て島津保次郎の門にあつた吉村公三郎が『明日の踊り子』に續く作品、全體として稍冗漫な嫌ひはあるが、企畫構成共に最近の日本映畫の水準に迫るものがある

マッチ工場の没落を救はんとして方法を誤り選擧違反の責で自殺した北川氏には妻のお近（葛城文子）と五人の兄妹があった、長男の健一郎（宮哲家）はわが家の再興を期して許嫁のおぬひ（忍静子）とも別れ、一家をあげて上京、それから十二年を經過、健一郎は模範職工となり、次男要二（日守新一）は學子（森川まさみ）と結婚、生活をしてゐる、一（東光一）は出征、四（野秋雄）は大學に、五（大塚君代）は女子（大塚君代）いる頃、長男健一郎は結婚で弟妹達のために、て働き續ける



大船特有の粗雑さや低いが、父の殘したマ成功を誓ったり、末の娘に身も心も傾け母を連れて故郷の山ど、かなり通俗的なはゆるメロドラマのない、卷末主人公のとや、する子が淡い てゐた男の破れたポ などはケレン味のな死んだ父が選擧で生男もまた選擧違反に が、このところク擧薦清宣傳めいてな のシーンや金製品の其他時局下の色彩を れようとしながらサ 作品の内容を浮薄に 終ったのは惜しむべ とまれ脚本の眞面目さ も結構であるし大船と とその妹』以來のヒッ 一時間半――明治座上

今晩のプログラム

六時お話（橋）渡井茂吉 ▲六時二五分（咸）大朝特派員 ▲七時三十分國民歌 ▲軍國登山の歌 ▲七時四十分挨拶 對話（張家口）▲ 樂（釜）宇都宮幸 四十 分青年の時 ▲大陸建設と青年 國公望

待望の洋書

どんな物があるか

ルデア先生、來て下 イオネル・バリモ 「素晴しき世界」（ク コル・ミール、ジェ エアード主演）

◇ユニヴアーサル ネヴア・セツ ド・レ・リイ監督 世、ヴアジニア・フ 演）

◇ユナイト ▲『ワザ ィック（ウィリアム

・ミランド主演）

◇RKO ▲『戀のいざこざ』（レオ・マッチリー監督アイリン・ダン、シャルル・ボワイエ主演）▲『ガンガ・デイン』（ジョーゲ・ステイヴンスン監督、ケイリイ・グランド、ヴイタ

来る十月一日から實施せられる『映畫法』の施行と共に洋畫は果して興隆であるか、さきに六月上旬第四次輸入許可の有力作を仰いだとはいへ、第一次輸入許可後における記録は[illegible]

「で、猫に感心だな」
「猫なんかゐないの」
「犬が鼠をダッと猫」
「た、猫が瞬きもせず」
「猫はゐなんですワ」
「よ前が見てゐたんだ」
「藝者だから猫ぢやな」
「まあ、ひどいわ。」
「うん」
「犬は鼠を捕へてやらうと飛付くんだけど、高いから駄目でせう」
「うん」
「どうするかと見てゐると、犬はなかなかあきらめないの」
「うん」

次週番組

明治座

（廿一日から二十七日まで）▲ユナイト作品 ロバート・シャアウッド脚色、アーチ・メーヨ監督、ゲーリイ・クーパー、シグリット・ギューリイ、ベージル・ラスボーン、ビニーバーンズ主演『マルコポーロの冒險』▲松竹大船作品 竹田敬彦原作、猪俣勝人脚色、佐々木啓祐監督、川崎弘子、坪内美子、夏川大二郎近衛敬明、木暮實千代共演『日本の妻』前篇▲京日ニュース

≪資料編≫

趙正民訳

【資料１】李喆周『北の芸術人』啓蒙社　1967年１月

ｐ5　この本を書くに当たって

（前略）共産主義の実生活を認識せず、その理論だけで共産主義を論じてはいけない。特にこの本を書くようになったのは、日本の推理小説の第一人者である松本清張の『北の詩人』という実名小説を読んでからである。私は林和を含めた同時代における北朝鮮の多くの作家や芸術家の共同運命を同僚の立場で紹介しなければならないと思った。（後略）

ｐ13　第１部　北朝鮮の作家・芸術家

私は今も私と命を一緒にしていた北朝鮮の多くの作家・芸術家を忘れることができない。共産社会の幸福とエリートとしての誇りを誰よりも切実に求めていた彼ら。しかしながら彼らは、昼は笑顔で瞬時の幸せを感じたが、夜になると黒い陰がさした心で過さなければならなかった。その姿を想像する度に同情を禁じ得ない。これは、私が終戦後（朝鮮戦争後）韓国に南下し自由と幸福を味わい、両方の生活を比べる時により切実になる。（略）

北朝鮮の作家・芸術家は、他の人もそうであったように露の命となった。

説明は間違っているものの、その例の一つとして日本の『中央公論』に連載された「北の詩人」がある。日本の推理小説の第一人者である松本清張は、日本帝国時代（以下、日帝）に韓国（朝鮮）で左翼文学を指導していた林和を実名主人公として設定している。彼が異色の題材を通して読者に訴えたかったのは、入北した林和がアメリカの雇用間諜という汚名を濯げなかったため、死刑という悲しい運命をたどったことであろう。

林和が入北し、刑場の露と消えるまで日々を一緒にした私としては松本清張の「北の詩人」を否定せざるを得ない。（中略）「北の詩人」は現在、韓国社会に物議をかもしており、私はこのような状況からも林和の最後の事実を世間の人々に知らせなければならないと決心した。しかし、この決心はけっして「北の詩人」に対する反発によるものではない。そして、その必要もないだろう。

むしろ、私は一方的な公判記録　―例えば北朝鮮が操作した朴憲永、李承燁、林和などに対する公判記録―　による推理や虚構または主観的な観点ではない立場から赤裸々に書いていきたいのである。（後略）

ｐ137　一三　日本作家＜松本清張＞がこの事実を知っていたなら…

（前略）金日成一派はこのような批判事業を展開していくことによって、南出身の党員の非行（犯行）を調査しつつ、他方では北出身の党員を取り締まるという一石二鳥の利益を収めるために第５次全員会議を考え出したのである。

（つまり）南労働員だけを相手にして思想検討及び批判事業を行っていくと都合が悪い

ため、正当感を漂わせる「党の組織的思想的強化はわが党の勝利の基」というキャッチフレーズを通して、朴憲永一派を粛清しようとした。これは、彼らの陰謀がいかにいかがわしいものであったのかを伺わせるものである。

このように緻密な計画が準備されていたため、それから4ヶ月後の1953年8月朴憲永・李承燁・林和・李康国らを刑場に立たせることができた。以上のような権力争いの内容を知らない松本清張は、金日成一派が捏造した公判記録にひたすら頼ったゆえ、事実を歪曲した形で「北の詩人」を書き、さらに良心の呵責も感じていないのである。また、林和をアメリカの雇用間諜と描写しているが、それもまた捏造した公判記録に頼っているからである。もしも、松本清張が北朝鮮の共産党の内実や戦後の実情、そして共産党の生理を認識していたなら、このような作品は書かなかったであろう。(後略)

【資料2】『北の詩人・林和』　キム・ビョンゴル訳　未来社　1987年9月
p 289

この小説は日本の推理小説家としてよく知られている松本清張によって書かれたものであり、著者の松本清張は正確な資料に基づいてこの小説を書いたとしている。が、この本の「植民地時代の林和の生活と文学」を書いたシン・スンヨプ氏が内容を検討した結果、林和の出生地などの個人的な内容や文学史の内容が事実と異なることに気づき、次のような註をつける。(略) そして、もう一つは、当時、精版社偽造紙幣事件を担当した趙検事と張沢相首都警察庁長官は、小説の中の精版社偽造紙幣事件が事実と異なるところがあると主張した文を国内のある雑誌に掲載したとされている。当社はその雑誌を見つけようとしたが手に入れることができなかった。よって、その詳しい内容については省略することにする。因みに、この小説は歴史を背景にした上、実在した人物によって物語が展開されていくが、あくまでも推理小説的なフィクションであるため、事実と異なる部分があることを断わっておきたい。

【資料3】
1941年3月『朝光』
—「総力連盟文化部長矢鍋永三郎・林和対談」(昭和16年1月15日)

【連盟と文化団体加盟問題】

林　事変以後、文化への関心が高まり、その帰趨がいろいろと話題になっている中、総力連盟に文化部ができ、貴下は衆望を一身に担い、今度その部長に就任されました。いろいろな抱負をお持ちだと思いますが、どうでしょうか。初代文化部長としていいプランがありましたら、聞かせてください。

矢鍋　別に豊富な経験を持っている人間でもないので、そう聞かれるとちょっと困りますが……実際、各方面でどのように進めていくべきか、私を含めて考えていかなけ

ればならないと思っています。

まず、みなさんとの議論や意見交換のために、何らかの形で組織を作らなければならないと思います。とにかく「部」ができたら、部会が理事や参事などを設け、それによって大体の方針を決める機関の成立がなされるようになります。その下で今話した学術や演芸や教化や宗教などの諸部門の委員を選抜し、そこでみんなの意向を十分聞いてみようと思います。同時にまた私たちが必要とするところは注文したいと思っているし、連盟も文化諸団体と関係をもつようにしたいと思います。まずは、以上のことをしてみたいという程度で大概の方針を決めています。

林　それでは、部の中には組織的にいろいろな部署ができるわけですね。

矢鍋　全部門から部署を設け、一つの組織としてまとめるということです。そしてまた、詳細な分科を作る、或いは連絡委員を、というように、もっと具体的に決めていく手もありますね。このような問題はこれから考えて行きたいと思います。

林　それは、会議のような性質のものではないでしょうね。

矢鍋　意見交換みたいなものになるでしょう。意見を交換する内に、私たちが進むべき道が見えてくると思います。

林　意見の交換といっても、東京の中央協力会議だとか、官民懇談会のような、官民の意見交換のために臨時的に会議を開催することと、ただ機関として幾つかの部署を置くということの間には大きな相違があると思いますが。もちろん、部署の人選のことも考えなければならないですが……

矢鍋　とりあえず、部署を置くということに関しては今後考えることにして、まずもっとも適切な方法は……

林　それはそうですが、また私が知りたいのは、連盟の文化部の仕事、例えば学務局の社会教育課なら社会教育課、警務局の図書課なら図書課といった行政上の事務との区別をどうするかということもありますね。

矢鍋　それについて明確に言えば、表面と裏面という関係上の差異が生じると思いますが、……

林　事実上、大きな差異があるのではないでしょうか。そういった意味で文化部ができ、また矢鍋氏は民間の衆望を担ってこのような重職に臨んだわけですから。昨年、ある機会に古川前図書課長もそれについて話したことがありますが、今までの行政において、文化的事業というのは主に取り締まりをすることに主眼がありました。例えば、国家的見地からしてそのルートから外れないように監視したり、取り締まりをしたりする……

矢鍋　取り締まりのような消極的、裏面的な方法でやっていくというのではなく、文化部の仕事は、例えばこんなふうに発展させようとか、あるいはこのような方面に進ませようとか、積極的な形で進めていくことだと思います。これもやはり裏と表との相違と言えます。

林　　そういった意味で連盟の文化部と行政とは違うということですね。つまり、積極的な意味で、連盟の文化部は文化を指導するといいましょうか。

矢鍋　ですから、民間各方面と関係ある人々の意見も徹底的に反映されねばなりません。単に、このような取締りの基準として抑制していくということだけではなく……

林　　話は違いますが、精動時代に加盟していた団体が、総力連盟になった後、加盟しなかったことがあると聞きましたが……例えば、文人協会だとか……

矢鍋　既存の加盟団体は名前を変更して登録するようになっています。つまり、精動時と目的は同じでありながら、特別な意味をもたないものは合流して入り、また合流した方がいいものは合流しますが、しかし特別な使命をもったものを強制的に合流させたりはしません。

林　　しかし連盟創立当時、たしか、精動加盟団体を整理するということが、どこかで発表されたようでありますが。つまり、有名無実のようなものは整理し、そうでないと認められるものは連盟へ加入させるという。文人協会などの去就は今まで組織的にはっきりしていなかったと思いますが、どうしてでしょう。

また今度、映画人協会、演芸協会、音楽の団体ができましたが、どうですか。このような団体はやはり団体として連盟に加盟できますか。

矢鍋　そうですね。団体として加盟できるかどうか。どうなっているのか。

林　　先ほどお話したように、朝鮮人の芸術団体が徐々に増えていますが、このような団体の組織系統などは早く性格をはっきりさせなければならないと思います。

矢鍋　あまりにもばらばらになっていては、連絡をとるすべがないので、業種別に協会や団体のような組織がなければ統制ができないでしょうね。

林　　文化部としては団体として加入させますか、それとも別な団体を作らせるようにしますか。

矢鍋　それは、作れるものと作れないものがあると思いますが……

林　　これはやはり将来軽視できない問題だと思います。どうでしょうか。

矢鍋　とりあえず、団体加盟や下部組織などはできているので、どうにか関係をもつようにはしなければならないと思います。

【文化の職域奉公】

林　　そうですか。これはちょっと抽象的な話になりますが、とても重大な問題だと思います。つまり、職域奉公ということについてですが。これは国家の新しい体制の下で国民が自己の職域で総力を尽くし奉公するという意味だと思いますが、各自の職域でまず具体的にどのような方法が最善なのかということが問題になるべきだと思います。そういった意味で、文化は文化の領域で、言いかえれば文化の職域で奉公するときにどんな性質や形態を成すべきなのかについて部長の意見をお聞きしたいと思います。

矢鍋　それはちょっと難しい問題ですが。連盟なら連盟が、国民としての実践項目をどうやって各部門へ表現させていくか、演芸なら演芸をすることにおいて、映画なら映画をすることにおいて、その精神を消極的にも積極的にも表現できる。単純な娯楽本位のものにおいてもその傾向がどこに向いているのかについて監視する。どのような方法で表現していくのかは具体的に言えませんが、私たちは健全な方面へ持っていくつもりです。

林　しかし、文化は経済、政治、軍事とは確実に違います。つまり、広い範囲で言えば、文化が国家に奉公することは、政治、経済、軍事のそれとは確実に違うところがあると思います。その意味で文化は内地においてもある程度誤解されてきたし、文化人自身も誤解していた部分がありますが、このようなことははっきりさせないといけないと思います。これらのことについて貴下の意見はとても重要だと思います。

矢鍋　誤解されないよう、あなた方が頑張ってくれないと。

【政治と文化】

林　最近友人の一人が「文化理論の再編成」という文章を書きました。彼は文化理論再編成の主な基準を文化主義の清算というところに求めています。ここでの文化主義というのは、勿論ヨーロッパから入ったもので、つまり文化は政治や経済などから独立したものであり、絶対的な自律性をもっているものとされていますが、彼はこれを清算しなければならないといいます。しかし、そもそも文化は政治や経済、日常生活と無関係なものではなかった。唯、それらと文化との間には差異があり、相違があることがあまりにも誇張されたために文化主義というものが生まれたのだと思います。だから、新しい文化理論とは、単に文化主義を清算するところで終わるのではなく、文化とその他のものとの正常な関係を整備しなければならないというところがむしろ重要でしょう。

矢鍋　勿論、文化とは完全に独立したものではなく、政治や経済などと有機的に結合されていなければならないと思います。だから、政治だ、経済だといっても、文化的になっていかなければならないと思いますが……

林　しかし、政治や経済が文化となってはいけないでしょう。あくまでも政治は政治で……

矢鍋　文化になってしまうのではなく……

林　そうです。例えば、文化人はいろいろなことを考えたり、反省したりすることができます。しかし、政治家や軍人は文化人と同じことをしてはいけません。つまり、数万の敵を前にした部隊長が深く考え、反省していては戦争に勝てません。行為を行うには決断が何より重要だからです。しかし、文化は政治や軍事が急を要する決断のためにゆっくりと考えられないところを余裕をもって補充していくものという

か。

矢鍋　そう。とにかく全体を、有機的に……

林　そういう点で、大政翼賛会の前文化部長岸田国士氏の「文芸の側衛的任務」という放送演説は傾聴するに値するものでした。「側衛」、つまり「前衛」を政治であるとすれば、文化は後方を堅固にするに従事しなければならないということです。

矢鍋　そう！実際の文化はその時代の情勢に左右されるものだと思うのだが……

林　それは、どの時代においても文化は時代のものですよ。民族生活、国家生活と離れることはなかった。理論が文化の特殊性を絶対の自律性にまでもって行っただけの話です。そういう意味で、岸田氏の話は興味深いものでした。また、文化の役割を区別することは決していわゆる文化主義的な思考の方法ではないでしょう。結局、小説を書くように銃を撃つことはできませんし、銃を撃つように小説を書くこともできません。銃を撃つ時には銃が、小説を書くときには小説が必要でしょう。

矢鍋　銃撃の中にも詩はある。

林　敵を撃つのはやはり銃です。そういう意味で文化はやはり銃後の役割です。

矢鍋　今は銃後を強固にするのがなにより緊要です。

【朝鮮文化の特殊性】

林　そして私たちが気になっていることを率直にいいますと、直接私たちが生活する文化、朝鮮の地域的な特殊性、このような問題をこれからどのような方法で展開させるつもりですか。一つの国民文化が建設されていくことはそれほど難しく考えなくてもいいと思いますが、その途上における朝鮮文化は？

矢鍋　それも考えなければいけませんね。朝鮮の生活、言語、全ての方面の特殊性とその将来のことを考え、研究しなければならないと思いますが、今はやはり実際に直面した銃後のことを考え、諸文化も大体そういう方向へもっていくという方針を堅持しなければならないような気がします。

林　そういう意味での連盟の文化部の仕事は翼賛会の文化部のそれと違うところがあると思われます。或る意味では困難なものとなるでしょうが、その反面、重大な意義も持つとも思われますが……朝鮮文化に執着するというわけではないですが、その特殊性は現存するものであり、それに対する考慮も将来の見地からみて、至極重大な意味をもつ問題だと思います。連盟文化部もまた自然にこのような問題に関心を持たざるを得なくなるでしょう。

矢鍋　それはよく考えるべき問題ですが、しかし意識しなくても地域文化の特色は必ず現われるものでしょう。要するに、文化政策はその特色の中で一般的なものを作るということです。

林　文化百年の大計といいましょうか、そのような見地から見ても、実際、国民文化というものはそれぞれ異なる歴史と伝統をもつ文化を土台にしており、これらの交

流と融合を通じて、立てうるものと考えられます。

矢鍋　将来的には東亜共栄圏の指導を中心として、文化を作っていかなければならないでしょう。

林　支那文化も印度支那文化も蘭印文化も印度文化も南洋の土人の文化も考えるべきでしょうから。

矢鍋　建設的な将来のことを考えるときりがないでしょうね。

林　特に、これを機会に矢鍋部長の遠大な抱負をお聞きしたいのですが……

矢鍋　しかし、今はもっと現実的な問題を考えなくては……

【言語問題】

林　それは近い将来、現実的な問題につながるでしょう。遠い将来のことのように思われますが、考えてみれば現在の問題でもあることが分ります。例えば、言語の問題、これはデリケートな問題です。内地の友人たちと話すときによく誤解されることもありますが、このような問題はお互い胸襟を開いて話し合う必要があると思います。言語は別の角度から見れば、最も郷土的、民族的な色を強くもっているように考えられます。しかし一方、一つの民族なら民族、一つの郷土なら郷土において、言語は最も一般的かつ国際的なもののように思われます。自然だとか、歴史だとか、血統だとかは代えられないものです。しかし、例えば、朝鮮語の「サラン」という言葉は国語で「愛（アイ）」という単語に翻訳できます。翻訳可能ということは、言い換えれば、朝鮮語は朝鮮人だけに限ったものではなく、もっと一般的な思考や健康な思想をも受容できるということです。このように考えれば、朝鮮語は今後の朝鮮人たちと内地人たちを精神的に結合させるのに欠かせない有力な手段であるとも考えられます。

矢鍋　かなり慎重に考えなければならない問題ですが、言語の系統が全く異なれば話は別ですが、しかし朝鮮語と日本語は全く違うものでもないですね。九州と東北の間に交通が不便だった時には、言葉もかなり異なっていたが、この頃は共通的な言葉をもつことになりました。ですから、朝鮮とも交通が頻繁になったら徐々に言葉も接近していくでしょうし、最近は内地から流入し朝鮮語になったものもあり、また朝鮮語が内地の言葉になったものもたくさんあります。また、「あいのこ」のような言葉もできました。このように考えると、言語というものは交流できるものであると考えられます。できれば、言語が統一されることが、いろんな人が生活していく上で便利であるだろうし……言語が異なることはなにより不便ですから……

林　それはそうでしょう。そういう意味で文化部の事業は言語を中心にあれこれやってみることが必要だと思います。そして、これは行政上の事業とは性格を異にするものだと思います。国語普及の最も肝心な手段はやはり教育であると思います。つまり、行政上の……

矢鍋　義務教育となったら子供達はみんな国語を習得します。唯、現在いろんな知識を地方に普及しようとすると、諺文を使うしかない。そういうこともあるので、絶対使わせないわけにはいかないですが、だからと言って高級の理論を全て諺文にする理由もないわけです。下級の農民を対象とする際には、諺文を使うほかに仕方がないから、諺文の発展も適当に図った方がいいでしょうが。

林　そうですね。そういう意味もあるから、朝鮮語の必要はまだ大いにあると思われますが、特に、文学部門において希望されているのがあれば……

矢鍋　門外漢にそういう専門の話をすると……（笑）実際、私たちは単に理論だけを用いるのではなく、現実問題に沿って政策を決めていくしかないのです。

【文化の健康性】

林　近頃、私たちも文学の健康性について考えていますが……

矢鍋　美術や音楽などにおいても健全である必要がありますが、その健全の基準はどこにあるのか、というのが問題です。

林　まず、卑俗なものはいけません。

矢鍋　そりゃ、文化が向上していく上で、野卑なものが少なくなっていくことは望ましいことでしょう。

林　もっと具体的な意見を。

矢鍋　例えばラジオで「漫才」みたいなのが流れるが、卑俗なものじゃないと理解できない社会層があります。面白くないと言われるから、或る程度の卑俗は許されるとは思いますが、その限界を超えちゃいけないと思います。急に高級なことを言ったって、分らない人もいるでしょうし……

林　或る程度のことならわかりますが、文化の健全な発展によってそういうものは徐々になくなるべきです。この問題に関しては、私は矢鍋氏の英断を望んでいます。例えば、演劇協会が出来ましたが、勿論そういう団体がみな卑俗な演劇をしているとは思いませんが、しかし主要な団体がほとんど卑俗的な演劇をしているとすれば、それは一考する必要があると思います。勿論、通俗劇団が国策に協力していないと言っているわけではありません。国民的演劇といえば、もっと質の高いものが望ましいでしょう。しかし、今回の協会には質の高い劇団は一つもなかったと思います。学生や知識人という狭い層を対象にするのではなく、広い層の文化的水準を上げる演劇を指導・形成していくことが具体的な問題となると思います。

矢鍋　そういう風にしていこうと思っています。

林　東京では新劇、歌舞伎と新派の二つの団体が合体しましたが、これらは健全な国民劇を「モットー」にしてきました。前にもお話したように、朝鮮にもそういう団体は三・四あります。個人的な希望ではありますが、そういう団体が出来てもいいのではないかと思っています。

矢鍋　団体でも個人でもいいですが、先覚者たちが意見を発表し、それを交すことが大

事でしょう。

【農村娯楽に対して】

林　そのことを特に考えていただきたいです。そして、民衆娯楽のことですが……それについて……

矢鍋　民衆娯楽特に農村娯楽は考慮しなければいけません。

林　去年の秋、総督と政務総監が総督府で黄海道の「仮面劇」を御覧になりました。私も拝見しましたが、それを民衆娯楽として認めようとしております。この踊りは、黄海道附近で大昔から伝わってきたものです。このような問題については……

矢鍋　農村で優れたものができたということはいいことですが、しかし朝鮮では農村娯楽は抑圧されてきました。

林　李朝の時代には儒教文化から、近来には外国文化から抑圧されてきました。

矢鍋　どんな民族においても農村娯楽は必要です。

林　田舎にいけば、結構あります。

矢鍋　そのなかでいいものがあれば、誉めたてなければなりません。農民は自分の気に入ったものじゃなければ、嬉しがりません。

林　田舎では古い流行歌は歌いません。

矢鍋　都会の文化人が考えたものがそのまま農村娯楽にはなりません。

林　最近、沖縄県の郷土芸術が話題ですが、それも農村娯楽問題の一つになると思います。もっと言えば、民衆の教化と娯楽をいかに結びつけるかの問題です。娯楽というものは楽しいもの、昼は労働し、夜には娯楽を楽しむ、これは間接的に生産増進にも関係するものです。例えば、浪花節に強烈な時局的な内容を入れるとします。そこにはいい意図や意義があるにしても、それを聴く人々は、労働をし終えて楽しい時間を過すはずなのに、また何かを考えないといけない。

矢鍋　表現の方法はかなり間接的でなければなりません。純粋な娯楽であると思わせることが必要です。常に理論を考えるということはよくないと思います。

林　ラジオを聞くと、内閣情報部から発行する「週報」の論説のような歌や小説が紹介されますが、これではせっかくの休みの時間にも難しいことを考えさせられてしまいます。このことに関してはいかがお考えですか。

矢鍋　作者の頭の中にその精神があれば、露骨に表わさなくてもいいのです。それを露骨に表現する。下手な表現方法は先ほど言われたように逆効果をもたらしますので、考慮すべきものです。

林　文学にもその例があります。

矢鍋　そう言った表現方法は難しいから、逆効果になりがちです。拙い方法です。時間もないからこの話はここまでにしておきましょう。

林　長い時間、どうもありがとうございました。どうか、私たちの味方になってください。

矢鍋　味方にというよりも、一致協力しなければ……ところが、あなたがしている出版事業というものはどんなものですか。

林　去年はじめたばかりですが、例えば朝鮮の古書籍を復刻する仕事などをしています。漢文関係の書籍もありますので、東洋文化研究という問題を特に考えるようになります。儒教などを見ると、徳川中期の江戸にいた漢学者の研究態度、清朝末期の学者の研究態度、李朝中期以降の学者の研究態度などはとても類似点が多いです。

矢鍋　交流があったのでしょうね。

林　ええ、交流がありました。内地の京都のある医師が解剖学について書いたものがありますが、朝鮮にもそれと似通った科学書があります。現在、東亜共栄圏の問題が叫ばれていますし、また将来には新しい東亜文化というものが問題とされるかと思いますが、過去の文化遺産を整理し、発展させる見地からも、このような研究や古本の出版も必要だと思われます。

矢鍋　それもいい文化事業の一つだと思います。

林　今日はどうもありがとうございました。

【資料五】『林和全集Ⅰ詩』バクイジョン出版　2000年6月

「お前は何処に」――　愛する娘惠蘭(ヘラン)へ

いまだ
顔を覆い
三つ網みしながら
恥かしく顔を赤く染めていた
お前は今こんなにも
風冷たい吹雪のなか
なにを考え
何処

半白髪の
父親を想い
風吹く山頂にいるのか
心が紙のように薄く
何時も心を引き裂かれていた
母親を想い
黄昏れる野原に立ったのか
さもなくば
毎朝手をつないで出かけていた

너 어느 곳에 있느냐　―사랑하는 딸 혜란에게

아직도
이마를 가려
귀밑머리를 땋기
수줍어 얼굴을 붉히던
너는 지금 이
바람 찬 눈보라 속에
무엇을 생각하여
어느 곳에 있느냐

머리가 절반 흰
아버지를 생각하여
바람 부는 산정에 있느냐
가슴이 종이처럼 얇아
항상 마음 아프던
엄마를 생각하여
해 저무는 들길에 섰느냐
그렇지 않으면
아침마다 손길 잡고 문을 나서던
너의 어린 동생과

お前の幼い弟と
牡丹の花香る
わが故郷と
話声今でも聞こえそうな
懐かしい友を想い
遠い空を眺めているのか

愛する私の娘よ

生い茂ていた
葉はすでに落ち
冷たい風は
枯れ木で鳴き
見慣れた街は
すべて雪の中に埋もれ
耳を傾ければどこかで
聞こえる氷塊破れる音

父は今
水音澄んでいた洛東江のほとりで
あくどい仇の手で
焼けて崩れた
たくさんの村と都市を経て
我らが愛した
ソウルと平壌を経て
絶壁が幾重にも重なった山と
千里長杠が早瀬毎に鳴く
滋江も深い山奥に来て
何処にいるのか知らない
お前を想い
この歌を歌う

愛する私の娘よ

銀河が川のように流れ
南に至り

모란꽃 향그럽던
우리 고향집과
이야기 소리 귀에 쟁쟁한
그리운 동무들을 생각하여
어느 먼 곳 하늘을 바라보고 있느냐

사랑하는 나의 아이야

벌써 무성하던
나뭇잎은 떨어지
매운 바람은
마른 가지에 울고
낯익은 길들은
모두 다 눈 속에 묻히
귀 기울이면 어데선가
들려오는 얼음창 터지는 소리

아버지는 지금
물소리 맑던 낙동강 가에서
악독한 원수들의 손으로
불타고 허물어진
숱한 마을과 도시를 지나
우리들이 사랑하던
서울과 평양을 거쳐
천리 장강이 여울마다 우는
자강도 깊은 산골에 와서
어데메에 있는가 모를
너를 생각하여
이 노래를 부른다

사랑하는 나의 아이야

은하가 강물처럼 흘러
남으로 비끼고
영광스러운 군대가

栄えある軍隊が
首都を解放し
自由と勝利の歌
街の至るところ溢れていた
美しい夏の夜
戦線に向う道で
私たちは別れの挨拶さえ
できないまま
あなたは全羅道へ
私は慶尚道へ
向った

その間
私たちみんなの
苦難の時間は流れ
あなたは南方の彼方へ
私は遥かな北方の先へ
千里もまた千里も離れ
ここにいる　しかし聴いてごらん

愛する私の娘よ

こんな盗賊の侵害に
わが朝鮮人民はかつて
一回も敗れたことがあったのか
命がけ戦い退け
られなかったことがあったのか
ごらんなさい　わが英雄的な人民軍隊は
すでに清川江をわたって
平壌を経て
また南へ南へ下り
兄弟のわが中国人民支援部隊は
嵐のように走ってきて
もうすぐあなたのところへ
辿りつくだろう
お待ちなさい

수도를 해방하여
자유와 승리의 노래
거리마다 가득찼던
아름다운 여름 밤
전선으로 가는 길역에서
우리는 간단 말조차
나눌 사이도 없이
너는 전라도로
나는 경상도로
떠나갔다

이 동안
우리들 모두의
고난한 시간이 흘러
너는 남방 먼 곳에
나는 아득한 북방 끝에
천리로 또 천리로 떨어져
여기에 있다 그러나 들어라

사랑하는 나의 아이야

이러한 도적의 침해에
우리 조선 인민이 어느
한 번인들 굴해 본 적이 있으며
한사코 싸워 물리치지
아니한 때가 있었는가
보라 우리 영웅적 인민 군대는
벌써 청천강을 건너
평양을 지나
다시금 남으로 남으로 내려가고
형제적 우리 중국 인민 지원 부대는
폭풍처럼 달려와
미구에 너의 곳에
이를 것이다
기다리라

愛する私の娘よ

薄い夏の服に
三冬の風が
刃よりも痛く
激しい吹雪が
柔らかいあなたの背中に積り
一刻も耐えがたい
幾日幾晩ではあるが
耐えて戦え
あくどい野獣たちの
砲弾と銃弾が
目が覚めないほど
降りしきっても

愛する私の娘よ

敬愛する吾が首領は
なんとおっしゃっていたのか
わずかな土
わずかな陣地でも
血で以って守りきれ
一口の水
一粒の稲でも
仇に与えないために
あなたの全力を尽くせ
仇が滅び私たちが
勝利するまで戦え
それで、もし

愛する私の娘よ

あなたが無事で
またあなたと会えるのなら
翻る祖国の旗の下で

사랑하는 나의 아이야

엷은 여름옷에
삼동 겨울 바람이
칼날보다 쓰라리고
진동치는 눈보라가
연한 네 등에 쌓여
잠시를 견디기 어려운
몇 날 몇 밤일지라도
참고 싸우라
악독한 야수들의
포탄과 총탄이
눈을 뜰 수 없이
퍼부어 내려도

사랑하는 나의 딸아

경애하는 우리 수령은
무엇이라 말하였느냐
한 치의 땅
한 뼘의 진지일지라도
피로써 지켜 내거라
한 모금의 물
한 톨의 벼알일지라도
원수들에 주지 않기 위하여
너의 전력을 다하거라
원수가 망하고 우리가
승리할 때까지 싸우라
그리하여 만일

사랑하는 나의 아이야

네가 죽지 않고 살아서
다시금 나와 만날 수 있다면
나부끼는 조국의 깃발 아래
승리의 기쁨과 더불어

勝利の喜びと共に
私たちの再会を
涙で楽しむだろう
不幸にも、もし
お前がすでにこの世からいなくなり
叫んでも叫んでも帰って来ず
噎び叫ぶ私の声が
何時までも聞こえなかったら
父親の熱い手が
母親の震える手が
弟の小さい手が
同志たちの握りしめた手が
人里離れたところで
父親を想い
母親を想い
弟を想い
友人を想い
故郷を想い
祖国を想い
一人ぼっちで流したあなたと
同志たちの血を
百倍にして
千倍にして
仇の胸元を
乾く最後まで
搾り出すのだろう

愛する私の娘よ

夜中、ある
遠い空が風に泣かされ
止まないのなら
半白髪父親と
心が紙のように薄く
いつも心を引き裂かれていた
あなたの母親と

우리의 만남을
눈물로 즐길 것이고
불행히도 만일
네가 이미 이 세상에 없어
불러도 불러도 돌아오지 않고
목메어 부르는 나의 소리를
영영 듣지 못한다면
아버지의 뜨거운 손이
엄마의 떨리는 손이
동생의 조그만 손이
동무들의 굳은 손이
외딴 먼 곳에서
아버지를 생각하여
엄마를 생각하여
동생의 생각하여
동무를 생각하여
고향을 생각하여
조국을 생각하여
외로이 흘린 너와
너희들의 피를
백 배로 하여
천 배로 하여
원수들의 가슴팍이
최후로 말라 다할 때까지
퍼내일 것이다.

사랑하는 나의 아이야

한밤중 어느
먼 하늘에 바람이 울어
새도록 잦지 않거든
머리가 절반 흰 아버지와
가슴이 종이처럼 얇아
항상 마음 아프던
너의 엄마와
어린 동생이

幼い弟が
あなたを想い
眠れないことを思い出しなさい

愛する私の娘よ

あなたは今
何処

(1950、12)

너를 생각하여
잠 못 이루는 줄 알어라

사랑하는 나의 아이야

너 지금
어느 곳에 있느냐

(1950. 12)

「白雪を赤く染めたわが血の上に」

冷たい風
山腹にぶつかり
騒々しく鳴き
吹雪は空に触れ
頭を覆う険しい断崖へ

我が前進を遮る
仇の火を消滅して
九分隊の前進を保障せよ

すでに厳格な朝鮮人民軍隊の
戦闘命令は下され
愛する祖国は我らを
神聖な戦いへと呼んでいる

雪を踏む音は
私の足がきっと
前へと進む
確かな痕跡なのか

凍った空を裂く
酷い音はまだ
我が戦友たちの胸を狙い

흰 눈을 붉게 물들인 나의 피 위에

찬바람
산허리에 부딪쳐
요란히 울고
눈보라 하늘에 닿아
머리를 덮는 험한 벼랑에

우리의 전진을 가로막는
원수의 화점을 소멸하고
구분대의 전진을 보장하라

이미 엄격한 조선 인민 군대의
전투 명령은 내렸고
사랑하는 조국은 우리를
신성한 싸움에로 부른다.

눈 밟는 소리는
나의 발길이 분명
앞을 향하여 나아가는
틀림없는 흔적인가

언 하늘을 찢는
모진 소리는 아직도
우리 전우들의 가슴을 노리어
머리 위를 날아오는

頭の上を飛ぶ
仇の弾丸の音なのか
仰ぎ見れば
まるい空よ
手広げれば
ぎっしりとした土よ

たとえ高地が
絶壁で高く
五〇メートルの咫尺が
千里のように遠き
仇の砲火がたとえ
頭が上がらないほど降りしきっても
どうして朝鮮人民軍隊の前進を
こんなに長く遮られようか

死を恐れるな
私は人民の息子だ
時間を無駄にするな
私は戦闘命令を授かった
朝鮮人民軍隊の栄えある兵士だ

火の熱さを信じる
仇たちに朝鮮青年の血が
火よりも熱いことを知らせよ
石塀の厚さ信じる
仇たちに朝鮮青年の胸が
石塀よりも厚いことを知らせよ
鋼鉄の堅固さを信じる
仇たちに朝鮮青年の決心が
鋼鉄よりも堅固であることを知らせよ

仇の死と敗亡の中で
我が復讐と勝利の中で
米国強盗たちに

원수의 탄환 소리인가
우러르면
둥그런 하늘이여
팔 벌리면
가슴 부듯한 땅이여

비록 고지가
절벽으로 높되
50미터의 지척이
이렇듯 천리로 멀 수 있으며
원수의 포화가 비록
머리를 들 수 없이 퍼부어 내리되
어찌 조선 인민 군대의 전진을
이렇듯 오래 막을 수 있으랴

죽음을 두려워하지 말아야 한다
나는 인민의 아들이다
시각을 지체하지 말아야 한다
나는 전투 명령을 받은
조선 인민 군대의 영예로운 병사다

불의 뜨거움을 믿는
원수에게 조선 청년의 피가
불보다 뜨거움을 알게 하라
석벽의 두터움을 믿는
원수들에게 조선 청년의 가슴이
석벽보다 두터움을 알게 하라
강철의 굳음을 믿는
원수들에게 조선 청년의 결심이
강철보다 굳음을 알게 하라

원수의 죽음과 패망 가운데서
우리의 복수와 승리 가운데서
미국 강도배들로 하여금

불굴한 조선 인민의

不屈の朝鮮人民の
息子が
死を恐れず
突進する前には
火も石塀も鋼鉄も
単なるちり
千里の遠さも
目の前の咫尺にすぎないことを
痛烈に知らしめよ

雪降りしきる空
何処で祖国は
私の行く道を眺めて立っているのか
一日中鳴き止まない
風の中、どこで母は
私の最後の息吹を
聞こうとするのか

今行けば
帰られない六〇二高地
雪に埋もれた山頂

私の若い血が
花びらのように散り
暴れた仇の砲火が
最後に沈黙したら

戦友たちよ
私が生まれ育った大きい
有りがたい祖国の地よ
それのために戦い
命捧げようとした
懐かしい全てのものよ
さようなら

そして

한 아들이
죽음을 겁내지 않고
돌진하는 앞길엔
불도 석벽도 강철도
한낱 티끌
천 리의 멀음도
눈앞에 지척임을
사모쳐 느끼게 하라

눈발 부힌 하늘
어느 곳에서 조국은
나의 가는 길을 바라보고 섰느냐
종일토록 울어 끊지 않는
바람 속 어느 곳에서 어머니는
나의 마지막 숨결 소리를
들으려는 것이냐

인제 가서
돌아오지 아니할 602고지
눈 덮인 절정 위

나의 젊은 피가
꽃잎처럼 흩어져
발악하던 원수의 포화가
최후로 침묵하거든

전우들이여
내가 나고 자라서 큰
은혜로운 조국의 땅이여
그것을 위하여 싸우고
목숨 바치려던
그리운 모든 것이여
잘 있으라

그리하여
나의 손

私の手
私の頭
私の胸が
仇の砲台を抱き
石のように硬くなり動かないなら
ああ
私の小隊よ
私の同志よ
白雪を染めた
私の赤い血の上に

愛する祖国の
旗を立てよ
栄えある我が人民軍隊の
輝く軍旗を翻せよ
敬愛する我が首領の
万歳を唱えよう

朝鮮人民軍隊の厳しい戦闘命令が
どれほど持重であり
我が祖国の神聖な呼びかけが
どれほど屈強であったのか
全てを奴らに知らせてくれ

仇の胸に打ち込まれる
我が銃と槍の尖鋭さで
仇の頭の上に降る
復讐と死の恐怖で……

そして、もし
ある日
楽しき歌と共に
あなた方がまたこの
新渓に帰れるのら
忘れないでくれ
六〇二高地の昔の戦友を……

나의 머리
나의 가슴이
원수의 포대를 안고
돌처럼 굳어 움직이지 않거든
아
나의 소대야
우리 동무야
흰 눈을 적신
나의 붉은 피 위에

사랑하는 조국의
깃발을 꽂으라
영예로운 우리 인민 군대의
찬란한 군기를 휘날리라
경애하는 우리 수령의
만세를 불러 드리라

조선 인민 군대의 엄격한 전투 명령이
얼마나 지중하였으며
우리 조국의 신성한 부름이
얼마나 굳세었는가를
낱낱이 놈들에게 알려 달라

원수의 가슴에 박히는
우리의 총창의 날카로움으로
원수의 머리 위에 내려지는
복수와 죽음의 공포로……

그리고 만일
어느 훗날
즐거운 노래와 함께
그대들이 다시 이
신계 고을로 돌아오거든
잊지 말라
602고지의 옛 전우를……

あなた方がもしまた
昔の戦友を忘れなかったら
思い出してくれ　その遠い故郷に
寂しい一人の母が
生きていることを……

そして
母の息子は
母の言葉の通り
勇敢に戦死したと
伝えてくれ

勇敢に戦い
我らは勝ったと
悲しむ彼女を
慰めてくれ

그대들이 만일 또한
옛 전우를 잊지 않았거든
기억하라 그의 먼 고향에
외로운 한 어머니가
살아 있었음을……

그리하여
당신의 아들은
당신의 말씀대로
용감히 싸워 죽었노라고
전해 달라

용감히 싸워
우리는 이겼노라고
슬퍼하는 그를
위로해 달라.
(1951. 3.「영웅전」가운데서)

（1951、3　「英雄伝」の中から）

【資料６—①】

1953年年８月10日『朝鮮日報』「李鉉相帰順の工作—治安局、新事態へ対処」

７日の平壌放送が報道した、朴憲永12人が反逆の容疑で傀儡の高等検察総長李成雲によって起訴され、粛清されたという情報は、８日内務部治安局の関係幹部級の動きを一段と活発化させた。粛清の対象となっている人のみならず、すでに粛清されたと見られる12人は、みな朝鮮戦争以前に越北した、いわゆる南労党系に属する分子であり、また、智異山に本拠を置き、後方を攪乱する敵共匪らと直接緊密に提携してきた者も、今回に粛清されたとみられる。よって、治安局では、朴憲永のかけがえのない部下であり、現在南韓遊撃隊の総司令官である李鉉相などの残匪に、この折りに銃を棄て、下山、帰順することを勧誘する、ある種の工作を試みるだろうと一関係者は示唆している。よって、残匪掃討と共に共匪に対する宣撫工作の成果が大いに期待されている。

【資料６—②】

1953年年８月12日『朝鮮日報』—社説「北韓集団の内訌」

数ヶ月前から伝えられていた北韓傀儡集団の粛清事件は、数日前の平壌、莫府、その他の放送で確認された。一部においては、今回の傀儡集団の粛清事件をソ連の「ベリヤ」粛清をはじめ東欧諸衛星国家内の粛清と同様なものであると報道しているが、筆者は北韓の

粛清事件は後者と異なるものだと考える。傀儡集団内には 3 つの分派、つまり、ソ連派、延安派（中共派）、そして国内派（南労系）がある。周知の通り、最初の段階では、この 3 派が連合して政権を構成したが、6・25 を挑発し、それに中共が介入して以来、彼らの勢力間に大きな変化があったことは想像に難くない。つまり、いわゆる南労系よりもソ連系及び中共系が絶対的な優勢を保つことになったのは不可避なことであった。戦争が長引き、それによる疲弊の中にあって、外勢のバックアップが全くない南労系が最初に犠牲となったことは当然のことであろう。それでは、これで傀儡集団の粛清は終わったのだろか。いや、それは違うと思う。これから勢力争奪戦は一段と激しくなるだろう。ソ連系と中共系の両者が存在する限り、まずこの両者間の和平が保たれることはないと思うし、これは傀儡集団の実権をソ連系が獲得するか、あるいは中共系が獲得するかという決勝戦にまで至る可能性もある。従って、傀儡集団の動揺は今後も続くであろうと思うし、更に停戦という新たな事態はこれをもっと加速させる可能性を孕んでいる。しかし、私は彼らの内訌が激しくなっていくといっても、背後にソ連と中共が存在する限り、情勢の大きな変化はないと思う。よって、我々の統一問題解決にさほど大きな影響は与えないと予想する。だからといって、私たちは楽観的に考えてはならない。我々は、我らなりの予定計画を着々と展開させていくことが当面の課題であることを肝に銘ずるべきである。

【資料６―③】

1953 年 8 月 13 日『朝鮮日報』

―「共産独裁者の末路」（１）刑場に連れられた朴憲永をみろ」

「モスクワ」の「タス」通信は、北韓傀儡集団の頭株である朴憲永をはじめ 8 名が死刑を言い渡され、またその他の重要人物が処刑されたと伝えた。今回の事件は、北韓傀儡集団内部が大きく揺れ動いていることを知らしめるだけでなく、共産主義者の独裁秘密政権における残忍な暴力支配を如実に物語っている。また、北韓傀儡集団のみならず、中国共産政権の動きにも大きな影響を及ぼし、ソ連衛星国家にも大きな影響を与えるものと考えられる。

まず、朴憲永がアメリカの軍事諜報機関の頭株であり、大韓民国と内通していたことが、彼らの罪名であるが、これは全く信じ難いものである。この事件は、独裁政権を強化し、反対派閥をなくすため、彼らにいわゆる反逆という罪を被せてしまったことにすぎない。これは、ソ連の「マレンコフ」がソ連共産党のために 30 年間努力してきた「ベリヤ」を、アメリカと内通し、ソ連政権の転覆を試みたという反逆の罪を被せたことと同様である。朴憲永の人柄は少々偏狭であるという評判があるだけに、変人と見られる。しかし、彼は現北韓傀儡集団内部において共産党のために今まで最大の忠誠を捧げてきた。また、彼は秘密組織を営んでいた間、誰よりも激しい闘争をしてきた。つまり、朴憲永はわずか 22 才にして上海に亡命し、金丹冶や任元根らと共に「モスクワ」の「遠東弱小民族大会」に出席した。1925 年の春には、ソウルで全国民衆運動者大会と新聞記者大会を設け、それらの

大会を利用して朝鮮共産党を設立した。その朝鮮共産党が日本警官に検挙されたときには、発狂した振りをして見せ保釈された。その後、妻の朱世竹と一緒に外国に逃げ、再び国内に潜入し、解放される日まで日帝の目を避けながら秘密組織を設けるなど、彼の共産主義運動は30年間の長い道のりであった。彼は、一つの「主義」に頑固に忠誠を捧げてきたにもかかわらず、同じ集団内の権力闘争に巻き込まれ、結局は反逆罪に問われ、死刑を言い渡された。これは、彼だけではなく、北韓内の全ての共産主義者たちに無念さを与えるものであろう。何の為、誰を信じ「同志」と呼んできたのだろう。「真実」と「偽り」の分別もなく、「秘密」と「独裁」と「暴力」の集団が崩壊していくことを感じ取っているのは、他ならぬ汝等共産主義者であろう。朴憲永は、彼の「同志」たちによって銃殺を宣告されたが、これが彼らのいわゆる「祖国」と「主義」のための当然な結果であるとは言えない。彼の性格からして、彼は最後まで彼の仇が他ならぬ共産独裁と偽りの「偶像」であることを叫んだに違いない。

【資料6—④】1953年8月14日『朝鮮日報』

—「共産独裁者の末路」（2）朴憲永粛清は三巴戦、初の餌食

朴憲永に暗い死の影が襲う兆しは、すでに数ヶ月の前からあった。北韓傀儡集団内部のいわゆる北労党と南労党の暗闘は前からあったが、しかし、ここ数年の間、延安派つまり中共に根を下し、中国共産党運動に参加していた独立同盟出身の人と、ソ連から直接派遣されたいわゆるソ連生まれの「オルマウズ」という「ポソア」第2世との間の争いは深刻なものだった。その中、「朝鮮共産党」はソウル「コムグループ」に発展するが、北労党つまりソ連派の圧力で多数の人々が粛清されてしまった。残された人の中でも幹部は朴憲永一人だけであって、南労党には地位をもっている人がほとんどいない。しかし、南労党系の人は延安派には心を打ち明けることができた。その理由は、延安派は国内事情をよく把握しており、国内闘争においても功労が多く、情勢判断と「共産革命」の方向を決めるにおいても、彼らと相談せざるを得なかったからである。例えば、板門店会談に出たソ連出身の南日がはじめて平壌に来た時、彼は朝鮮語もろくに話せなかった。このように言葉も不自由で、国内共産運動体験もない人たちがソ連から派遣され、みんな副相や次長という地位をもつことになる。いくら「祖国」から派遣された人物であり、共産党の規律が「鉄の規律」だといっても、無条件に服従しなければならないことは、耐えがたいものである。それゆえ、ソ連派と南労党系の対立は避けられないものであった。唖の悩み苦しむ如く、（訳者注：現在、不適切な表現とされているが、原文に忠実するため、あえて訳しておく）なにも言えず、「服従」というより「屈伏」の気持ちを抱く間、対立はエスカレートし、血の粛清を免れ得なかった。

そして、6・25戦争後は、「10万青年」を洛東江で死なせた責任を巡って深刻な内紛もあった。朴憲永は無惨にも「10万青年」を死なせた事に対して良心に恥じていたのであろう。が、金日成一派のソ連派には、これに対する反省など微塵もなかった。彼らは、朝鮮に対

する愛がない。彼らの親、妻子、友人らの土であることを考えたこともない人たちである。人の命を粗末にする戦争中に育てられた人たちである。朝鮮の人たちがどうなろうと、彼らはいつでも彼らの「祖国」である「シベリア」に帰れば、それまでのことである。

6・25 戦争に中共軍が参加して以来、戦争をする間、北韓は完全に中共軍に支配されると言える。しかし北韓傀儡政権を支配しているのは、あくまでもソ連の「オルマウズ」一派である。そこで、中共と連絡を取っている延安派の活動範囲が広くなるにつれ、朴憲永の発言権や地位もともに拡大されるので、金日成らソ連派がまず朴憲永派の粛清を手掛けたのは、当然のことであると言える。

【資料6—⑤】1953年8月18日『朝鮮日報』

—「共産独裁者の末路」（3）次に粛清されるのはどの派になるのか？

しかし、このような暗い兆しが見えはじめたのは、去るところの春からだと言える。北韓傀儡集団の声明文や平壌放送などに外相である朴憲永の名前が見当たらなったのはすでに 4、5 ヶ月前のことである。いくら朴憲永の勢力が衰えたと言え、「外相」であり「副首相」である彼の名前が見えないはずはなく、また姿も見せなかったことについては、疑わしいものがあったと思う。これは粛清の前提であった。つまり、まず彼の名前を人民の記憶から遠ざけ、それから、朴憲永の「罪状」を作り、「ほら、見ろ」、「あやしい」という噂を広めていく方法が、彼らの粛清順序であったのである。

また、朴憲永の粛清が目前のものと知らしめたのは、約 2 ヶ月前に南労党系の文人たち、つまりソウルから越北した李泰淳ら一派がみな粛清されたことである。つまり、李泰淳・林和・李源朝、金南天など、いわゆる北韓文壇誌の錚々たるメンバー10 数名が一気に粛清され、その事実が北韓の「人民報」や其の他の機関誌に掲載された。その理由は、「反動」的であったというが、反動的というのは「反逆」や「政府転覆」の予備段階に該当するものである。彼ら文士はその罪に問われた途端に、傀儡集団からの保護を受けず、筆を捨て労働者のような生活をすることになった。自由労働者とは違って、自由に職業を求めることもできず、その日から飢える生活をはじめた。のみならず、いつ「反逆」という罪名を着せられるかも分からない恐怖に悩まされた。このようにして、ソウルから越北した文人の大量粛清は、南労党系人物の最後粛清を意味するものであったし、その目論見が朴憲永の命を狙っていたことは想像に難くない。現在、タス通信の報道によると、朴憲永をはじめとする 12 人は裁判を受けることになっていると言うが、これには表面に現われた朴憲永の側近はもちろん、下部組織の人までが含まれているだろう。朴憲永がでっち上げの罪名で死んでいくのと同様に、12 人も誰と親しい、誰の系統であるということだけで、粛清の罪名を背負わなければならないのである。

このように、朴憲永が粛清されることによって、北韓傀儡集団の勢力暗闘はさらに深刻になるだろうし、人心に影響するものも多いだろう。罪状の捏造によって、いわゆる「闘志・指導者」が粛清されていくことへの懐疑、またそれに対する恐怖は、今は無事なあな

たも例外ではないということを示唆する。恐ろしいのは彼ら自身の世界だ。誰のために命を捧げればいいのかについて考えざるを得なくなる。

しかし、問題はソ連派の強力な粛清は、ますます厳しくなっていくだろうし、その対象は中国派にも影響を及ぼし、最終的には屈伏を強要するであろう。これについては、南韓の私たちが観察するよりも、中国共産党の巨頭たちが北平で見た方がもっと詳細だと思う。よって、今日、北韓の戦争能力の味方になっている中国側が今回の粛清をどのように見ているのか、あるいはどの程度参画しているのかが問題だ。今までの経緯からすると、朴憲永の粛清事件がきっかけとなり、極東の共産陣営に新しい勢力の分布を前提とした深刻な理論闘争が展開される可能性もある。この場合、極東共産陣営の主導権を中心に中国共産圏がどれくらいソ連の衛星国家として忠誠を示すのかというのが、現実の問題として浮上するかもしれない。

【資料７】李喆周『北の芸術人』啓蒙社　1967年１月

p 149

以上が裁判長金益善の訊問第１問に対する林和の答弁であると言われている。

被告らの犯行陳述とその訊問の内容は1953年８月７・８日付の「民主朝鮮」に掲載された。人々は「これは嘘だ」と騒いだが、大声を出すわけにはいかなかった。林和の起訴状や訊問を否定することは党の政策を否定することになるため、いくら根拠があるとしても否定できないのが北朝鮮の社会だからである。（中略）

世界中何処の法廷・公判場でも裁判長が被告の経歴を尋ねる際に、被告は自分の経歴を簡単にしか答えない。林和の場合のように自ら「日帝に迎合した」、「日帝と完全に結託しました」と告白し、訊問もしていない問題　―つまり「カップ」解散声明書を提出したとか反ソ・反共行為をしたとか―　について触れたりすることはあり得ない。さらに、間諜行為の疑いで裁判に臨んでいる彼が、訊かれてもいない反ソ・反共行為を自ら述べることもやはりあり得ない。（中略）

また、その答弁の中で普通の常識では考えられない言葉、例えば自ら「プロ」文学の階級的な立場から離れたとか、「民族解放闘争で変節した者たちの集団」に荷担したとか、自分が勤めていた映画会社の名前もわざわざ「ブルジョア映画会社である高麗映画社」としたことなどは、被告の答えとして考えられないものである。それだけではなく、わざと「反動的内容の『朝鮮映画年鑑』」としたのも納得のできない部分である。このように、林和が述べている答弁を一字一句吟味すると、それは林和自身によるものではないことにすぐ気づく。さらに、訊問を急いでいる北朝鮮側は、林和が右手の動脈を切り人事不省に陥っていたとし注意を喚起しているが、それこそこの訊問が捏造されたことを裏づけている。

（後略）

p 151

以上が林和に対する２回目の訊問である。1953年８月６・７日、李承燁、林和らの公判で

彼らが死刑を言い渡されるまで以上のような訊問が行われたことを知っている人はいなかった。それは当時の新聞にも紹介されていなかったからである。当時の新聞には起訴状と判決文が掲載されるだけだった。

p 156　一八　林和の訊問における疑問点

北朝鮮の共産主義者らは、李承燁・林和一派の公判を公開裁判にするとしたが、全期間は公開しなかった。李承燁の場合のように自分たちに都合がいい時だけ公開したのである。私は今日まで林和の公判を傍聴したとする人に出会ったことがない。

些細な経済犯人（刑事犯）を裁判するにも数日間の時間がかかる。11 人にもなる人たちが反乱罪、間諜罪に問われているのに 4 日間で判決が出されたことは裁判史上、例をみない。林和の起訴状からも訊問に見られる幾つかの疑問点について述べてみる。

①間諜行為を述べる際に被告が堂々と「過去の不純な経歴…」「客観的環境の支配の結果…」「指導権を握ろうとした野望…」など、自分の弱点を述べることはあり得ない。

②訊問で裁判長は林和がどんな契機で間諜行為に至ったのかを一度も訊いていない。

③訊問で林和は米軍の CIC と 1945 年 10 月から関係しはじめたとしているが、判決文では 1945 年 12 月からだとされており、その日時が一致していない。

④林和は米軍の CIC、そして米軍の諜報機関と連係したとされているが、数多い諜報機関中どの機関と連係したか明確ではない点。また米軍の CIC と関係があったなら誰と関係したのかも明確ではない。これは何を意味するのだろうか。

⑤1947 年 11 月 10 日、林和は平壌に行き朴憲永・李承燁を支持する文化芸術運動を進行することに同意したとされている。しかし、その文化芸術運動の具体的な内容については触れていない。もし、朴憲永や李承燁と林和の間に文化芸術運動の話が交されたとしても、林和が無条件に賛成するはずがない。

⑥1947 年 11 月 10 日頃に平壌で間諜機関が組織されたとしたら、その当時の（社会的）環境や動機はなぜ問わないのか。

⑦林和はスパイ資料を 3 回にわたり南朝鮮に送ったとしているが、その後の判決文には 10 回となっている。これは何を根拠にして算出された結果なのか。

⑧6･25（朝鮮戦争）当時、ソウル陥落後、林和は李承燁から軍隊及び政権機関の活動とその施策、人民の思想状況、物価などを調査し報告することを命じられ、その活動をしたとされている。しかしこのようなことがあり得るのか。陥落した当時のソウル人民委員会（市庁）委員長（市長）は李承燁であった。彼の下には職員（勿論党員であるが）が数百人もいたので、あえて林和にそのようなことを命じる必要はなかったのである。

⑨1951 年 7 月、李承燁は彼の事務室で李康国と会い、これから資料があれば林和を通して送るように言いつけたとされているが、これもまた曖昧な訊問内容である。李康国と林和が関係していたなら、その日時や接触動機、犯罪内容が問われなければならな

いが、李承燁の訊問にも林和の訊問にもこの問題は問われていない。

⑩林和は文芸総で反動煽動した内容を述べる時「まだ北朝鮮には文芸路線が明白に出ていないから、作品を創作するのを見合わせるよう話し、彼らの創作と階級的文学芸術活動を麻痺させた」とした。しかし、裁判長の役目としてはいつ、どこで、誰と、何を、どのように反対宣伝をしたのかを明確にしなければならないのに、何一つ明確にしていない。(実際、林和はそのようなことはしていなかったので、操作できなかったのであろう。)

⑪武装暴動時「不純な文化人たちを集め彼らを利用」しようと努力した例として「李源朝・李泰俊」を挙げている。林和の陳述が事実なら李泰俊は当然林和と一緒に反逆罪に問われなければならないし、または対質訊問を受けなければならない。しかし、李泰俊は李承燁・林和一派の公判時に、作家同盟委員長として堂々と活動していた。

⑫林和が不純な文化人たちと連係したとするなら、その人数と具体的にどのような人物と連係したのかが明らかにされなければならない。それによって、林和の罪は明白になるが、やはり不明である。

⑬林和は作品活動を保留したとしているが、林和自身とその他の作家たちは旺盛に創作活動をしていた。これは訊問の内容と相反するものである。

このように追及してくと、林和に対する公判操作があまりにも乱暴に捏造されたことに気づく。私は法律家でもなく、またその分野には詳しくもない。素人の私にもこれだけの疑問が生じるのに、法律家に読んでもらったらどれだけの疑問が生じるだろうかと度々考える。

林和は間諜と反乱罪で裁判を受けたが、北朝鮮がその根拠を提示できず政治的な謀略で林和を死刑にしたことは、客観的に示せたと思う。

＊　以上は、韓国語の資料を日本語に訳したものである。なお、原文の表現やニュアンスを忠実に表現するため、現在、不適当な表現や日本語においては使われない単語も多少使っていることをお断りしておく。

平成十三年十月十日発行

第二回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行　北九州市立松本清張記念館
北九州市小倉北区城内二番三号
電話　〇九三―五八二―二七六一

印刷・製本　㈱ゼンリンプリンテックス

松本清張研究奨励事業

第4回

募集要項

一、趣旨　時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対象　ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）でこれから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内容　入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など（様式は自由、ただし日本語）を、平成十四年三月三十一日までに応募してください。

五、選考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発表　審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他　採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先　〒八〇二―〇八一三　北九州市小倉北区城内二番三号
TEL〇九三（五八二）二七六一　FAX〇九三（五六二）二三〇三

北九州市立　松本清張記念館